

---

# 騎士王物語

夢語部

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士王物語

### 【Nコード】

N4221T

### 【作者名】

夢語部

### 【あらすじ】

定年まで半年、ゲームオタクだけど平凡で独身のサラリーマンが事故で死亡。不思議なことにゲーム「騎士王物語」で作成したキャラクターに転生した。田舎で畑でも耕しながらのんびりと暮らしたいと願う主人公だが、どんどんと物語に巻き込まれていきます。「目覚めると、見知らぬ部屋に居た」そんなありきたりの異世界転生・主人公最強のファンタジーです。※本作品は「白騎士物語」の二次創作になります。ただし、世界背景や登場人物はオリジナル設定です。※再開しました。※最初に「お知らせ（再開します）」を

お読みください。

## プロローグ

「ごほっ、ごほっ、……。」

広くて、真っ白で清潔な部屋の中央に、ただ一つのベッドが置かれ、ベッドの上の20代の若者が咳きの発作に襲われていた。

若者は、肺病を患った病人のようにやせ細り、青白い顔をして、苦しそうに咳きをしている。観音菩薩を思わせる衣装を纏った若い美女が、若者の背をまるで看護婦のようなしぐさで擦った。

暫くすると、咳の発作が納まった若者は、仰向けに横になると、若い美女が、ベッドの掛け布団を整えた。

「ミロク。そろそろ時間のようだ」

と若者が掠れた声を出した。

「はい。マスター」

「命令した通りのタイミングで、「騎士王物語」を配布してくれ。このゲームがキーになるだろう」

「はい。マスター」

「再生した俺なら、きつと生き延びることができる」

「しかし、マスター。再生するとは言っても、マスターの人格は完全に消滅します。新しいマスターは、魂が同じでも、まったくの別人になるでしょう」

「そうだな、そうでなければ魂の力を拡大できないだろう。生まれ変わることで再生した魂は、今の10倍のパワーになる。そうでなければ、奴らに対抗できないだろう。それに、基本的な人格は変わらない。きつと、新しいマスターが気に入るさ」

「しかし、私にとっては、あなたとは別人であることに変わりはありません」

「そうだな、……だが、諦めてもらうしかない。お前を残して行くことになるが、後を頼むぞ」と若者は言うのと、眠ったかのように、静かに目を閉じた。

## 1話

0時26分。

JR東海道線の電車が戸塚駅で止まった時、腕時計の針が指していた時間だ。

東京駅から約40分、ぐっすりと眠り込んでいた俺は、電車が減速する時には目を覚まし、戸塚駅であることを確認して、電車を降りた。始発駅の東京駅から乗車するので、次の電車に並べば、必ず座ることができる。30年近くも、通い続けた甲斐あって、電車が動き出す頃には、ぐっすりと眠り、戸塚駅に着く頃に、目を覚ますことができる。

電車から降りると、人の流れに乗って、改札口に向かった。深夜のこんな時間なのに、電車からぞろぞろと背広姿のサラリーマンが降りて、改札口へ流れていく。

自動改札を通勤定期でパスして、駅の階段を下りる。

駅から出るとすぐに、胸ポケットからタバコを1本だけ取り出し、同じく、胸ポケットから愛用のジップを取り出して火をつける。完全に習慣化しているので、ここまで、半分眠った状態だ。タバコを一息吸って、やっと、目がさめてくる。

俺の名前は、だいまんまさと大門将人。59歳の何処にでも居る平凡なサラリーマンだ。

最近、疲れが溜まっているのか、変な夢を見る。夢の内容を覚えている訳ではない。目覚めたときに、おかしい夢を見たと言う感覚が残っているだけだ。

先程、電車で眠っている間も、その夢を見た。

タバコを吸いながら、どんな夢だったかを考えた。

誰かと話をしていたような気がするが、相手のことも、話の内容も、まったく覚えていない。

定年まであと半年、孫が居ても可笑しくない年齢だ。実際に兄と

妹の所は孫が居る。なのに、俺は、独身男性のサラリーマンだ。

贅沢をしなければ、退職金もあるので、老後を生きていく金は、十分にあるが、なんとも寂しい人生だ。

何時の頃から落ちこぼれたのか、入社した頃は、ばりばりと仕事をこなし、出世コースに乗っていた。若い頃に剣道と空手で鍛えた体力のおかげで、徹夜続きでも平気だった。他の競争相手を完全に引き離していた。

同期の中で一番に主任に出世したにも拘らず、落ちこぼれてしまった。

落ちこぼれた原因は何だったのか、上司との人間関係なのか、独身なのがいけなかったのか、あるいは、俺の趣味が原因なのか……。俺は、PCゲームに熱中し、ゲーム機を買い揃え、オンラインゲームにのめり込んだ。しかし、仕事は人並み以上にこなしたし、コンピュータ関連の会社だったためか、俺以外にも、ゲームに熱中していた者は大勢いた。

落ちこぼれの原因は一つではないのだろう、俺の人付き合いの悪さと独身であることと、ゲームを趣味にしていることなど。

結局、運が悪かったのだろう。

仮に、昔に戻って、人生をやり直すチャンスを与えたら……。

普通の人は、こんなチャンスを与えれば、喜んで人生をやり直すのだろう。しかし、俺は、そんなチャンスが欲しいとは思わない。人生をやり直して、果たして今よりも良くなるのか、やり直しても同じことをやっていれば結局は同じ結果になる。違う仕事を選んでも、趣味がゲームで、独身で、落ちこぼれているに違いない。

……いつの間にか、駅前の交差点について。

俺は、ふと、なんでこんなことを考えているんだと疑問に思ったが、ちょうど歩行者用信号が青になり、固まって待っていた歩行者達が交差点を渡り始めたところだ。

俺も、信号が変わってしまう前に交差点を渡ってしまおうと思い、

早速で交差点へ向かい、交差点を斜めに歩いた。ちょうど、交差点の中心にさしかかった時、後ろを何気なく振り返った。……………俺の目の前に巨大なトラックがいた。

俺は無意識の内に、突っ込んでくるトラック対し、横に避けようとした。横方向に避けるために、一旦、体を沈め、そして、思いつきり、ジャンプしようとした。

俺が後ろを振り向いてから、トラックにぶつかるまでの時間は一瞬だったはずだ。しかし、まるで、スローモーションで再生されているかのように、自分の体の動きを意識していた。トラックの運転手がハンドルに被さって寝ているのが見えた。

何故か、恐怖はなかった。

なんともつまらない人生だったなと思っていたと、トラックのフロントに体がめり込む、恐ろしい衝撃を感じた。

## 2話

……………ふと気づくと、俺は、何もないところにいた。  
目を開いているのか、閉じているのか分からないぐらい真っ暗な  
ところだ。

ここがどこなのか、何が起きたのか思い出そうとし、すぐに、ト  
ラックにぶつかった瞬間のことを思い出した。

……俺は死んだのか？　すると、ここは死後の世界か？

死後の世界が本当にあるとは、信じられん。

俺は、死後の世界があるとは信じていなかった。死んだら自意識  
は消滅してしまうだろうとなんとなく思っていた。

何故か分からないが、俺は、恐怖をまったく感じていなかった。

今の俺は、幽霊になっているのだろうかと思っていた。

自分の体の状態を確かめたくても、何も見えない、それに、金縛  
りにあったように、体を動かすことが出来ない。

霊界に関する本で、死ぬと、しばらく、自分の体の近くにいて、  
自分の葬式を見学したりすることが良く書かれている。

世間の出版社はノストラダムスの1999年の予言と同じで、と  
んでもないデマを平気に本にして売っていると言うことだ。しかし、  
死ぬと幽霊になって自分の近くに漂い、暫くしたら天国に行くのだ  
と言うことを一体、どれだけの人が信じているのだろうか。

ノストラダムスの予言は、2000年を迎え21世紀になった時  
点で、大嘘であることが判明したが、死後の世界は大嘘だと言う事  
実は、永遠に、世間に伝わることはないのだろうか。

……………どれぐらい時間が過ぎたのか？　現実世界では一瞬なの  
か、それとも、何日も過ぎてしまったのだろうか、……………ふと、  
正面に針の先ほどの小さな光が見えた。そして、光が近づいている  
のか、徐々に大きくなってきた。



針の先から、豆粒ぐらいの大きさになるのに、少し時間がかかったように思うが、豆粒の大きさからは、あっという間に大きくなり、光の中心に人がいることに気づいた。

それはすぐに、俺の目の前にやってきた。

きれいな着物をまとった美しい女性が、眩しいぐらいに輝いていた。

20歳ぐらいの若々しい顔をしているが、年齢は分からない、恐ろしく長い年月を経験していると思わせる何かがある。その女性が普通の人間でないこと、それどころが、神と呼ぶ存在に近い者。まるで、観音菩薩が具現化したような女性だと思った。

その女性は、魂の内側を見透かすかのように、じっとこちらを見つめていた。

『探査完了。波動が完全に一致しました。』

頭の中で、若々しい女性の声が響き渡った。そして、女性が、にっこりと微笑んだ。

俺は、悪魔に魅入られたかのように、優しく微笑む女性を見つめ続けていた。

女性は、右手を上げると手のひらを上にした。

「あなたは、どなたですか？」

俺は、我に返ると、目の前の女性に尋ねたが、女性は俺の声など、まるで、聞こえなかったかのように無視した。

女性の手のひらの上に、黄金色に眩しく光る玉が浮かんた。そして、美しい女性は唇をすぼめると、黄金色に輝いている玉を軽く吹いた。

黄金色の輝きが眩しすぎて、玉の大きさがよく分からなかったが、光の玉は俺の方に飛んできた。そして、俺の体の中に、入り込んだように思えた。

『やっと見つけました。これで、主人の命令を達成することができます。』

女性は、笑みを浮かべながら独り言を呟いた。

「なんだって、いったいどうなってるんだ。」

俺は、大声で怒鳴ったと思う、しかし、いきなり眠くなり、すぐに、眠りに陥るように、意識を失った。

### 3話

……………目覚めると、見知らぬ部屋に居た。

ベッドの中で、仰向けに寝ているようだ。首まで布団を被っており、布団の温もりがとても心地良い。このまま気持ちよく寝ていた、……………。

「……………あっ！」

俺は、トラックに跳ねられて死んだことを思い出して、慌てて、体を起こした。

……………とても狭い部屋だ。

6畳ぐらいの広さだと思うが、縦に長いので、4畳半の部屋のようを感じる。外は太陽が昇っているのだろう。だが、窓に分厚いカーテンが掛けられているので、部屋の中は薄暗い。家具は質素なタンスとテーブルに椅子だけ。テーブルの上には、濃い青色のウェストバックが置かれている。家具も部屋も、時代遅れのデザインで、随分と年季が入っているようだ。

扉の横に、鏡を見つけた。

木製の洗面器とタオル、水差しにコップ、床に木製のバケツ。…洗面台のようだが、随分と時代遅れだ。ここが病院だとは、到底思えない。

先程から違和感を感じているのだが、それが何なのか、良く分からない。……………ベッドの横に、ブーツが置かれているのを見つけた。

俺は、布団を横に剥いで、ブーツに足を入れた。まるで、使い込んでいるかのように足に馴染んだ。立ち上がって自分の体を見ると、シャツとパンツの下着しか身に着けていなかった。そして、違和感の原因が分かった。

……………随分と痩せている。それに、視線が高い。自分の体じゃ

ないみたいだ。

自分の体を確かめるために、扉の横の洗面台に急いで近づき、鏡を覗いた。そして、息を吞んで、固まってしまった。

……そこには、高校1年か2年ぐらいの美少年が写っていた。手で頬を撫でてみると、鏡の中の美少年も、手で頬を撫でた。鼻筋がすっきりと通っており、髪は癖の無い黒髪で、短めに整えられている。大きな目に長い睫毛。目の色は濃くて澄んだ青い色。じつと、目を見つめると、引き込まれてしまいそうな妖しげな魔性の魅力がある。中性的な顔立ちで、ボーイッシュな超美少女にも見える。後ろに下がり、シャツを脱いで、上半身を鏡に映してみた。

細身だが、腹筋は見事に割れており、スポーツ選手のように鍛えられた体だ。細身で瞬発力にあふれている感じで、これ以上はないと言うほど、理想的な体。テレビで見た若きダビデ像のようだと思った。

身長は177cmか、178cmぐらい、……俺よりも10cmも背が高い。

体重は70kg、いや、65kgぐらいだろう。……俺よりも20kgも軽い。

鏡の少年は、銀色の太い鎖に銀色のプレートのネックレスを首に掛けていた。銀色のプレートは、3cm×5cmの薄い長方形で、両面に文字が刻印されている。まるで、軍隊の認識票だ。俺は、装飾品を身に着ける趣味はないが、鏡の中の美少年には、良く似合っている。

……ふと、美少年の姿に見覚えがあることに気づいた。「うそだろう!」と驚いて、声を出した。「騎士王物語」と言うゲームのキャラクターにそっくりだ。

キャラクターメイキングで1時間以上も掛けてカスタマイズした顔に良く似ている。ゲームの3Dグラフィックで表現された顔は、少し荒いポリゴンで構成されていたので、大雑把な顔だったが、実体化したら鏡に映っている美少年の顔になるのだろう。こんなにも

人間離れた容姿になるとは、思いもしなかった。

「騎士王物語」は、インターネットに無料で配布されたPC用ゲームだ。

無料のゲームにしては、市販されているゲームよりもクオリティが高く、マニアックで、自由度が高いと物凄い人気だった。

1人用のオフラインゲームだが、オンラインで仲間を募って、クエストを遊べるようになっていた。

戦闘やクエストで経験値を稼いでレベルを上げて、キャラクターのステータスを強化し、様々なスキルを習得して、習得したスキルを使うことで、スキルの熟練値を上げて、キャラクターを強くするシステムになっていた。

また、クエストを達成したり、称号を得ることで、特性やレアなスキルを獲得することができた。

特性とは、例えば、「頑強」、「加速」、「危険察知」などがあり、防衛力が上がったり、連続して2回攻撃が可能になったり、敵の攻撃を察知して回避能力が上がったりする。そして、特性にも、熟練度が設定されており、熟練度が上がると、上位の特性に進化する特性もあった。

スキルの合計熟練値の最大値が設定されているので、どのようなスキルを習得するかで、特徴のあるキャラクターを育成することができる。例えば、剣を得意とする戦士や魔法を得意とする魔術師などだ。

メインシナリオは、主人公も含めて固定のオリジナルキャラクターが定められており、プレイヤーが作成したキャラクターは、脇役でしかなかった。

主人公は、ソウルナイトと呼ばれる人間の4、5倍のサイズの騎士と契約することで、ソウルナイトに変身することができる。そして、仲間のキャラクターも、物語が進む内に、それぞれの騎士と契約してソウルナイトに変身できるようになった。

当然、敵もソウルナイトと契約した騎士で、主人公は、敵のソウルナイトを倒すことで、国を救い、王女と結婚して、王になると言う、オーソドックスな物語で、クリア後に裏で国を操っていた裏ボスを倒すことで、真のエンディングを迎えることができた。

また、メインシナリオとは別に、プレイヤーが作成したキャラクターのみか、あるいは、オンラインで募集した他のプレイヤーキャラクターを仲間にして、クエストを達成し、レアな装備を整えたり、スキルや特性を獲得したりする。

そして、シナリオ拡張オプションが次々と発表された。

冒険者として遊ぶことができる迷宮都市の拡張シナリオ。最初は、地下300階層までだったが、すぐに、拡張シナリオが発表されて500階層まで拡張された。

同時に、鍛冶師、錬金術師、料理人と言った生産系のスキルが追加され、生産系のキャラクターで遊ぶための追加シナリオが発売された。

同じように騎士用、魔術師用の追加シナリオ、商人として遊ぶことができる商人用の追加シナリオと、次々と、様々な職業用の拡張オプション、追加シナリオが発表された。

そして、最近、地下迷宮を1000階層まで拡張する拡張オプションが発表された。

拡張された地下迷宮を攻略するためには、最大レベルの100では不可能なため、レベルの限界値を1000に、スキルの熟練値の限界値を1000から2000の倍にし、スキルの合計熟練値を無制限にするチートツールも一緒に配布された。

このチートツールで、キャラクターの初期ステータスや、アイテムなどを自由にカスタマイズすることもできた。

しかし、それまで、必死にクエストを攻略した努力を無効にしてしまうツールであり、また、バランスブレーカーであると、ネット上で、散々、叩かれてしまった。

ツールと1000階層の拡張オプションを発表したのは、製作者

ではない偽者じゃないかと言うデマもネット上に飛び交ったほどだ。  
俺は、拡張された地下迷宮を攻略するために、リオン・ウォート  
と言う名前のキャラクターを作った。

リオン・ウォートは、作りたてなので、レベルは1だが、設定可能な特性、スキルを全て設定し、ステータスは、設定できる最大の255、スキルの熟練値も設定できる最大の1000に設定してある。

合計熟練値は無制限、レベル限界値は1000、ステータスの限界値が999、スキルの熟練値の限界値は2000に拡張した。アイテムも、ツールで設定できるすべてのアイテムを最大にまで持たせてあるし、所持金も最大値にしてある。

.....有り得ない。

俺は、トラックに跳ねられたて死んだはずだ。遅くまで残業して帰宅したことをはっきりと覚えている。まるで、リオン・ウォートに転生したみたいだ。これじゃあ、まるで、小説の主人公じゃないか。こんな馬鹿なことがあるか！.....と叫びそうになるところを必死に我慢した。

頭が真っ白になって、何も考えられない。自分であるのだが、同時に、自分じゃないような。自分のことなのに、まるで、他人事のような。

俺は、上の空で、水差しの水を洗面器に入れ、顔を洗ってからタオルで拭いた。歯を磨いてから、うがいをして、汚れた水を足元のバケツに捨てた。

リオンの体は、以前の体と比べて随分と勝手が違う。リオンのステータスなら、気をつけないと簡単に家具を壊してしまいそうだ。冗談でなく、本当に、握手をしたら、相手の手を砕いてしまうかもしれない。

それに、五感が物凄く鋭くなっている。いや、五感だけじゃ無く、第六感のような不思議な感覚もあるようだ。臭覚も聴覚も、異常な

ほど鋭くなっているし、まるで、世界が変わったかのように視力も変わった。

戸惑いながらも、ベッドに戻って、腰掛けた。自分の状況が全く分からない。



## 4話

「おはようございます」

と耳元で、若い女性の声が聞こえた。俺は、吃驚して、声の主を捜すために、きよろきよろと部屋を見回した。

「探しても無駄です。私は、貴方のインターブレインです」

と再び、耳元で、女性の声が聞こえた。インターブレインとは、何だ？

「インターブレインとは、貴方に分かりやすく説明するならば、貴方の頭の中に挿入されたナノマシンの超スーパーコンピュータだと考えてください。視覚、聴覚などの五感は貴方の脳細胞と直結されていますので、あたかも、目の前にディスプレイがあるかのように画面を表示することができます」

つまり、頭の中に入っているスパコンってこと？

「はい。その通りです。勿論、正確には、全く違う物ですが、そのように理解して頂ければ、分かり易いでしょう」

つまり、君は、AIなの？

「はい。そのように理解して頂ければ良いでしょう。貴方が想像しているAIよりも、遥かに知能が高いAIです」

まるで、人格があるかのようだ。

「人格も個性ありませんので、安心してください。私は単なるプログラムでしか過ぎませんし、感情ありません。コミュニケーションを円滑にするために、あたかも人格があるかのように振舞っているだけです。頭の中に誰かが住み込んでいる訳ではありません。貴方が良く知っているパソコンと同じです。単なる道具でしかありません。気になるようでしたら、会話モードをもっと機械的な感じに変更することができますが、どうしますか？」

いや、このままで良いよ。

「了解しました。貴方の感情シミュレーションの結果、現状維持で問題ないと判断しました」

感情シミュレーション、……何となく意味が分かるから、説明は  
いらない。

「ありがとうございます。それでは、コミュニケーションを円滑にするために、私を呼び出すための名前を付けてください」

いきなり名前を付けろと言われても、なかなか思いつかないのだが、声のイメージから、14、5歳ぐらいの金髪の長髪で、碧眼、白いワンピースを着た可愛らしい少女の姿を思い描き、直感で、名前を決めた。

よし、「アリス」で決めた。

「実際に声に出して、名前を言うってください」

「アリス」

と俺は、声に出して言った。そして、今まで、声を出していなかったことに気付いて吃驚した。

「私の名前はアリスで、よろしいですか？」

「ああ、君の名前は、アリスだ」

「了解しました。私の名前はアリスです。よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ、よろしく」

「私と話す時、実際に声を出さなくても、大丈夫です」

『分かった』

「貴方宛のメッセージがあります。読みますか？」

『メッセージ？ 誰から？』

「メッセージを読めば分かります」

『分かった。見せてくれ』

と俺がアリスに頼むと、目の前にウィンドウが開き、メッセージが表示された。目の前の何も無い空間に画面だけが浮かんでいる。……不思議な感じだ。頭を右に向けても、そして、左に向けても、画面は視界の中央に浮かんでいる。

俺は、メッセージに注意を向けた。

大門将人様。

突然のことで、大変、驚かれているとは思いますが、お許しください。

すでに、気付いているかもしれませんが、この世界は、「騎士王物語」にとても似た世界です。

しかし、現実の世界とゲームは違いますので、注意してください。「騎士王物語」のメインシナリオは、この世界の1000年前に起きた戦争を題材にしています。

貴方が、何故、この世界に呼ばれたのか、簡単に説明しましょう。今から、2万年前に、私の主人が、この世界を見つけました。

そして、主人は、この世界を改造し、他の世界から住民を呼び寄せ、世界を制御するためのシステムを作り上げ、システムを管理するためのマザーブレインを作りました。

しかし、約千年前に、主人は病気のために死んでしまいました。そして、私に、この世界を引き継ぐ後継者を探し出すように命令しました。

主人の後継者になるためには、様々な条件があるのですが、その条件を貴方が満たしていたのです。

貴方が死亡した時、魂を抽出して、この世界へ運び、新しい肉体で蘇生しました。新しい肉体は、貴方の記憶にあったリオン・ウォートをモデルにしてあります。

主人の遺産を引き継ぐのなら、この世界を管理するマザーブレインの制御管理室に来て下さい。私のマスターとしての認証を受けて頂ければ、私の全ての機能、そして、全ての情報を開放します。

主人の後継者にはならないで、この世界で気ままに暮らして行くことも可能です。

貴方の思う通りに自由に生きてください。

そして、残念ながら、制御管理室が何処にあるのか、ヒントも含めて、教えることはできません。制御管理室を見つけることが後継

者になるための試験と考えてください。

時間は、掛かるかもしれませんが、探し求めていれば、必ず、辿り着けるはずです。諦めずにがんばってください。時間は十分にあります。

貴方に埋め込んだインターブレインの調整は済んでいます。貴方の記憶と知識の調整は、貴方が目覚めた状態でないといけないため、基本的な知識のロードはまだです。インターブレインに命令して基礎知識をロードしてください。この世界の言語はあなたの世界とは違う言語です。基礎知識をロードしないと言葉が通じないでしょう。

貴方のインナースペースに、大量の物資を入れました。インターブレインのアイテム画面で自由に取し出しが可能です。また、データも大量に登録しておきましたので、何不自由なく暮らせるはずです。

インターブレインとは、貴方に分かりやすく説明するならば、貴方の体に挿入されたナノマシンで構成された超ウルトラコンピュータだと考えてください。

インターブレインの詳しい使い方は、基礎知識に含まれています。それでは、直接、お会いすることを楽しみにしています。願わくば、必ず、会いに来て下さい。

かしこ。

俺は、メッセージを何回も読み返して、内容を確認した。

俺はトラックに跳ねられて死んだことは間違いないらしい。俺の体は、とっくに火葬されているだろう。

両親は、両方とも死亡しているし、兄と妹は、俺と違って何人も孫がいる。俺が死んでも、問題は無いだろう。まあ、兄には、葬式とか、手間を掛けさせてしまうことになるが、そこは、勘弁して貰うしかない。

定年後は、趣味のゲームをとことん楽しもうと考えていたが、今さら、人生をやり直すことになるとは思わなかった。

メッセージの内容をそのまま信じてしまうのは、危険かもしれないが、何も分らない今の状況では、メッセージに指示されたマザーブレインの制御管理室を見つけることを目的にするしかない。

普通に考えれば、簡単には制御管理室は見つからないだろう。そして困難に打ち勝つためには、レベルを上げて強くなる必要があるのだろう。リオンは作りたてキャラクターで、レベルは1だ。

兎に角、メッセージの指示通りに、まずは、基礎知識をロードするべきだろう。

『アリス』

「はい。マスター」

『基礎知識をロードしてくれ』

「了解しました。基本知識をマスターの主記憶にインストールします。基礎知識のインストールは、すぐに終了しますが、眩暈が起きる可能性がありますので、横になることをお勧めします」

俺は、ブーツを脱いで、ベッドに仰向けになった。

「結構です。それでは、基礎知識のインストールを開始しても良いですか？」

『いいぞ、始めてくれ』

と俺が返事をする、膨大な量の知識が、俺の中に流れてきた。物凄い勢いで流れ込んでくる知識が俺の記憶になっていくのが分かった。曖昧だった俺の記憶が、徐々に鮮明になっていくのを感じた。そして、同時に、頭がはっきりしてきた。天才にでもなったかのように、頭が物凄く良くなったと思った。

「基礎知識のインストールが終了しました」

とアリスが言った。

俺は、起き上がって、再び、ベッドに座った。

不思議なことに、昨日の夜、リオンが、2泊分の金を払って部屋を借りて、宿の食堂で晩飯を食べてから部屋で服を脱いで寝た記憶

がある。

ふと、時間が気になると、アリスが、07・03だと情報をくれた。リオンの情報やアイテム画面などが気になるが、朝食の時間だと思ったら、空腹であることに気付いた。

システムやライブラリに登録されている情報を確認するには、時間が掛かるはずだ。まずは、朝食を食べた方が良さそうだ。朝夕の食事代も宿代に含まれているので、朝食を抜いたら勿体無い。

再び、ブーツを履いて、慎重に体を動かすように気をつけて、タンスから近未来の戦闘服のような服を出して身に着けた。

昨晚、寝る前にタンスに入れた記憶がある。

硬そうな素材で出来た肩当や胸当が付いているので、革鎧のように見える。黒地に青いラインが入っていて、SF映画に出てきそうなハイカラなデザインだが、……まるでコスプレだ。

戦闘服の腰には、刃渡りが30cmぐらいのソードブレイカーのような大きな戦闘用ナイフが差してあった。

SF映画に出演する2枚目俳優のように格好良いのだが、しかし、実際にこんな格好で出歩くんなんて、正気を疑う。

他人事ではないのだが、何か他人事のような気がする。まるで、自分であって、自分ではないような、不思議な感じだ。

こんな服を着て、外に出たくないのだが、他に着る物がないのだから、仕方が無い。諦めて、テーブルの上に置かれたウェストバックを身につけた。

テーブルの上に部屋の番号が書かれた木製のプレートが付いた鍵も置かれていたので、部屋を出て、扉の鍵を掛けてから、階下の食堂に向かった。

## 5話

1階に降りて、食堂に入ると、数人の客が、朝食を食べていた。客の視線を気にして見ていたら、ちらりと見られただけで、すぐに、視線が戻った。

「おはようございます。朝食はお食べになりますか？」

と見覚えのある少女が元気な声で聞いてきた。昨日、部屋に案内してくれた14、5歳ぐらいの少女だ。

「おはよう。朝から可愛い声を聞けて、嬉しいよ。もちろん、朝食も頼むよ」

と俺は、お世辞を入れて少女に挨拶を返した。

何故か、少女は俯いて、「こちらのテーブルにどうぞ。」と小さい声になった。

からかったつもりは無いのだが、どうやら、からかわれたと思ったようだ。

少女がすぐにテーブルへ向かったので、慌てて、少女の後ろを追いかけた。中3ぐらいの女の子だったので、つい、兄の孫娘と同じように扱ったのだが、失敗したらしい。

少女に案内されたテーブルの椅子に座り、謝ろう思ったが、少女は、何も言わずに、奥へ行ってしまった。ほんの少しだが、顔が赤くなっていたようだ。

昔からそうだが、女心と言う物が、さっぱり分からない。兄の孫娘の反応と随分と違う気がするが、この世界の常識が違っているのだろう。

……………食堂に居る他の客から注目されているような気がする。やはり、俺の服装は目立っているのかもしれない。

テーブルに視線を落とし、周りを見ないようにして待っていると、少女が朝食が載ったトレイを運んできた。

「ありがとう」

と少女にお礼を言ったのだが、案の定、無視された。

顔が赤かったところを見ると、まだ怒っているのだろう。しかし、何故、怒っているのか、さっぱり分からない。

朝食は、スープ、トースト、目玉焼きのベーコンエッグ、ポテトサラダ。豪勢な朝食だ。しかも、量が多い。

トーストにジャムを塗って囓付いた、スープを飲んで、フォークで、ベーコンエッグ、ポテトサラダを食べた。薄味だが、素材が良いらしく、とても、美味しい。

朝食を食べていると、何人もの客が、次々と食堂に入ってきて、殆どのテーブルが埋まった。

随分、賑やかな感じだ。

亜人に分類される人間ではない種族も居る。ファンタジー世界でお馴染みの、小人族、ドワーフ族、獣人族に角が生えている鬼のような姿のヴァンモス族。……人間と亜人の割合は、半々ぐらい。当たり前だが、俺は人間じゃない種族を初めて見た。まるで、ファンタジー映画に入り込んでしまったかのような感じだ。

俳優が変装しているような作り物の感じが全しない。物凄く自然に見える。本物なのだから、当たり前ではあるが、どうにも、現実味が無い。

半数以上が、革や金属製の鎧を着て、剣や斧で武装しているし、ゲームでお馴染みのフルプレートを着込んだ者までいる。まるで、映画を生で見ているようだ。

いつまでも、見ていたいところだが、ワニの頭をした獣人や鬼のようなヴァンモス族は、ゲーム画面で見るとよりも、遥かに迫力がある。

見られている事に気付いて、難癖をつけられたらたまらないので、決して目を合わせないように注意した。

朝食に視線を戻し、何も考えずに朝食を食べた。

食べ終わると、少女が、ハープティが入ったカップを運んできて、



代わりに、食べ終えた食器を片付けた。

「ありがとう」とお礼を言うと、「どういたしまして。」と返事が返ってきた。

顔色も元に戻っているようなので、怒ってはいないらしい。少し嬉しくなつて、少女を見たら、また、俯いて、行ってしまった。：訳が分からん。

特に、若い女の子の気持ちは分からない。世代の違いをいやでも感じさせられるが、気にしないことにして、ハーブティを飲んでみた。

ストレート紅茶のような味で、飲めなくはないがコーヒーを飲みたいと思った。

コーヒーと同じような沈静効果があるらしく、気持ちが落ち着いてきた。

ハーブティを飲みながら、今の状況を考えた。

確認していないが、リオンは物凄い金持ちのはずだ。田舎に引退して、畑を耕しながら平穏に暮らしたい。あるいは、海の近くに住んで、魚を釣ったり、ヨットに乗ったり、山に入って、山菜を取ったりするのも楽しそうだ。

……しかし、チートキャラクターのリオンに転生したのなら、平凡な暮らしは望めないのかもしれない。

普通。小説の主人公は、死にそうな目に会うことになっている。

最終的には、幸せになれるとしても、小説の主人公が、最も不幸だと俺は思う。

俺は、主人公になりたくない。気楽な脇役を希望したいのだが、……目立たないように気をつけて、出来る限り危険を避けるように行動しよう。平凡な人間なら誰だって、そうするはずだ。馬鹿な主人公は、女性を襲っている悪人を見れば、自分から喧嘩を売るのが、俺は、ゲームオタクではあるが、平凡なサラリーマンなのだ。

長年のサラリーマンの経験から考えて、今、最初にやらねばならぬことは何か？

……………それは、現状把握だ。

冷静になって考えれば、当たり前のことだ。現在のリソースを把握し、得意な点と弱点を見極め、将来を見据えた目標計画を立案し、投資のリスクと効果を考えるのだ。

俺は、ハーブティを飲み干し、カップをテーブルに置いて、立ち上がった。

店の主人に「部屋で休むから、邪魔しないようにしてくれ。」と頼んでから、部屋に戻った。

## 6話

ウエストバックを腰から外して、テーブルに置き、椅子に座った。自分の状況を確認するために、メニュー画面を展開した。コマンド一覧の上の方に、ゲームと同じコマンドが並んでいる。ステータスコマンド、スキルコマンド、アイテムコマンド、マップコマンド、……。

メニュー画面にアイコンを並べたり、メニュー画面の中にさらにメニュー画面を作ったりと自分の好みで自由に画面をカスタマイズできるが、後で良いだろう。

ステータス画面、スキル画面、アイテム画面と次々にコマンド画面を展開して、ライブラリ画面を1番手前に移動した。

トップディレクトリの一覧画面をツリー構造を表示するモードに切り替えた。体系的にまとめられており、科学、技術、魔法に娯楽小説まで、あらゆる分野の情報が揃っているようだ。

この世界に関する文献が一つのツリーにまとめて入っていた。一覧の中から、試しに、冒険者ギルドのガイドブックを選んで表示した。

最初のページを見たたん、ガイドブックの内容を、それこそ一字一句まで、思い出した。そして、数学、物理、化学、医学など、地球よりも遥かに進んだ知識、魔法に関する高度な知識などを覚えていることを思い出した。

慌てて、ツリーを辿り、娯楽小説の分野の見知らぬ題名の本を開いたら、その本に関する記憶は無かった。娯楽小説まで覚えていたら、本を読む楽しみが無くなるところだった。ちゃんと考えて、知識がロードされているらしい。あるいは、ある程度の知識までしかロードされていないのかもしれない。

ライブラリには、記憶していない本が大量にあるかもしれないが、確認するには相当な時間が掛かるだろう。

しかし、この世界は、「騎士王物語」とは随分と違うのかもしれない。冒険者ギルド、魔術師ギルド、商人ギルドの規則が違う。：あつ、そうか。

「騎士王物語」はゲームなので、かなり簡略化されているが、大筋は同じだ。現実の世界は、ゲームと違って、もっと詳細に決められている。つまり、この世界の規則の特徴的な部分を抽出して、遊びやすく変更した規則が、「騎士王物語」で採用されている規則と言うことだろう。……ふと思いついたことがある。

『アリス』

と声を出さずに呼ぶと。

「はい。マスター」

とすぐに、アリスが返事をした。

『この世界のマザーブレインにアクセスできるか？』

「いいえ、マザーブレインにはアクセスできません。マザーブレインへのアクセス回線は閉ざされています。しかし、この世界を制御している神聖協会のシステムにはリンクしています」

やはり、マザーブレインにアクセスすることは無理か、もし、アクセスできたら、いきなりエンディングだと思ったが、甘くは無いようだ。

神聖協会のことは記憶にある。神聖協会とは、この世界を管理しているシステムの名前だ。「騎士王物語」には、なかった。

神聖協会は、個人を認識するための認識票を発行し、個人の口座を開設したり、銀行のようなサービスを提供しているし、ネットワークシステムのようなサービスもある。俺が首に下げているネックレスが神聖協会が発行した認識票だ。この世界では、個人を識別するために利用されている。

各ギルドや魔術学院などは、神聖協会のネットワークサービスを利用して情報を登録し、登録した情報を活用したり、資格の認定試験なども神聖協会が実施している。

他にも、貨幣を流通させ、農産物などの基本となる特定の産物を

一定価格で売買して物価を安定させたり、マジックアイテムや高度な技術製品を販売したりしている。

流通している通貨は、銅貨、銀貨、金貨、白金貨プラチナコインの4種類。銅貨の単位がコル、銀貨がシルク、金貨が克蘭で、100コルで1シルク、100シルクで1克蘭。銅貨と銀貨は、1枚、5枚、10枚、50枚の4種類。金貨は、1枚、10枚の2種類で、白金貨は1種類しかなく白金貨1枚は100克蘭になる。

単純に比較はできないが、1克蘭は、日本円で10万円に相当する。

ライブラリには、膨大な量の文献が登録されているので、タイトルだけを見たとしても、何日も掛かってしまうだろう。

ライブラリ画面を消して、ステータス画面を手前に移動し、表示モードを切り替えると、リオンの3D立体像が表示された。

3D立体像からリンクされているリオン・ウォートの登録情報を開いた。生年月日、種別、性別などの情報が表示された。リオン・ウォートは、人間種族の男性で、年齢は15歳。口座の残高が1億克蘭、冒険者ギルド、魔術師ギルド、商人ギルドには登録済み、各種の資格も取得済みになっている。

口座の残高は、キャラクターを作成した時に最大に設定した所持金が反映されたい。日本円に換算すれば、……10兆円だ。庶民の俺では、どれぐらいの金持ちなのか、想像もできない。

各ギルドに登録されている情報を確認すると、冒険者ギルドのリンクは最低ランクのF、魔術師の資格は、最上位の特級魔術師。商会名は「黒猫商会」で、商会口座の残高は、1千万克蘭になっていた。

ギルドの登録年月日、担当者名、魔術師試験も初級、中級、上級の各試験結果に、魔力測定結果など、詳細な情報が登録されていた。

リオンの3D立体像からリンクされている装備画面を開くと、身

につけているアイテムが表示された。

装備画面で、全ての服を取り去れば、3D立体像は裸になり、現実の俺も裸になってしまう。戦闘中に装備画面で武器を変更すれば、瞬時に武器を変更することがきる。ゲームなら普通かもしれないが、本当に実現されると考えると、……………反則技だ。

特性とスキルの情報をざっと調べてから、アイテム画面を手前に移動し、アイコン化されていたウェストバックの画面を開いて、中身を確認した。

銅貨、銀貨の全種類が10枚ずつ入ったがま口の財布と1クラン金貨100枚、10クラン金貨100枚が入った布袋の財布。銀行カード、冒険者カード、魔術師カード、特級魔術師認定カード、商人カード、交易許可カード、商会主証明カード、商会口座カード、…魔術師ギルドから支給される魔術師用のローブとマントに魔術師の杖、魔獣バッグ、端末装置になっている神聖協会の腕輪、着替用の下着に靴下、丈夫そうな普段着と靴、雨具、革鎧一式、ロングソード、グレートソード、日本刀、弓と矢筒に矢、拳銃とカートリッジ、投擲用ナイフ、魔法の水筒、食器、キャンピング用具、魔法のリュック、何種類ものサイズと形状の袋、宝石類が入っている幾つかの袋、召喚獣のマジックアイテム、調味料、食料、……………呆れしてしまうほど何でも揃っていた。

アイテム画面を手前にして、ライブラリと同様に、表示モードをツリー構造に切り替えて、ツリーを展開した。

ゲームのツールで設定したアイテムが1つのトップツリーで纏められていた。そして、ゲームでは出てこない日用品や銃などの近代兵器、地球よりも遥かに進んだ技術製品や武器に高度なマジックアイテムなどがライブラリと同様に分類されたツリーに大量に登録されていた。

鍛冶師や錬金術師などの生産系のスキルが反映されているらしく、素材からアイテムを製造したり、カスタマイズする機能もある。

これほど大量にあると、使いたいときにすぐに見つられるとは、

思えない。ウエストバックに必要と思われるアイテムが揃っているようだが、ウエストバックの中であっても、某青い猫ロボットみたいに、取り出すアイテムを選ぶのが難しいかもしれない。

ショートカットのように、緊急性のあるアイテムは、別枠に纏める必要がある。アイテム画面のツリー構造は、幾らでもカスタマイズできるので、時間を掛けて整理する必要があるだろう。

俺は、幾つかの整理用のアイテム画面を作り、ウエストバックのアイテムとアイテム画面に登録されているアイテムを夢中になって整理した。

…………ふと、時刻を確認するために、マップ画面を見ると、マップ画面の時刻が、12…48と表示されていた。

時間を忘れて夢中になるなんて、我ながら苦笑してしまった。

なんだかんだと言いながらも、俺は、夢中になって、時間を忘れてしまうほど楽しんできた。なんだか、うまく、のせられてしまったような気がする。しかし、ゲーマーなら、誰だって、俺のことを羨ましがるに違いない。

4時間近くも身動きせずに椅子に座っていたのだが、体は平気だった。肩が凝ったり、体が固まったりしていない。しかし、じっとしたままでは、不健康だ。空腹を感じないが昼飯も食べた方が良さだろう。新しい体に慣れる必要がある。

運動のために、外に出よう。簡単に昼飯を食べ、王都を観光したい。

ここは、ベルゼルグ王国の王都「エルガラム」。

「騎士王物語」のスタート地点になっており、この世界で最大規模の都市だ。

朝の様子から、この鎧は目立ようなので、ウエストバックに入っていた丈夫そうな服と靴に着替えた。

今日の日付は、4月1日。季節は、日本と同じ春だ。外は未だ少し寒いが、コートを着るほどではないだろう。

ウエストバックを身に着けて、部屋に忘れ物が無いか確認してから部屋を出た。1階に降りて、カウンターに居た宿の主人に鍵を渡して、宿の外に出た。



## 7話

宿屋の前の道は2車線ぐらいで、石畳で舗装されていた。通りに並んでいる建物は、レンガで造られているようで、中世ヨーロッパ風の風景だ。

多くは無いが、人通りがあるし、バスクと呼ばれるでっかいサイのような動物に引かれた大型の荷馬車が、ゆっくりと移動して行くのが見えた。

アーサー王やジャンヌダルクのような中世の騎士時代の映画か、ファンタジー映画の世界に入り込んだような感じた。

マップを拡大して、王都の全域を見えるように表示した。

計画的に区画整備された都市らしく、道路が網の目のような幾何学的な図形を描いている。北側の中央に王城、王城の南に王城前広場がある。王城前広場の周りに、神聖協会、各ギルド、教会などの王都の主要な建物が集まっている感じた。

俺は、王城前広場に行くことにした。そして、王城を一目見たいと思った。

なんだか、外国に観光旅行に来たみたいで、楽しくなってきた。

マップ画面を確認しながら建物や通行人を眺めながら歩いた。外国の田舎の街を予想していたのだが、思いの外、通行人が多くて賑やかだ。流石は王都と言ったところか。

宿屋を出て、30分ぐらいで、王城前広場に着いた。王城前広場はかなり広くて、綺麗に掃除されていた。午後1時半なので、昼休みのピークを過ぎていると思うのだが、多くの人で混んでいた。

中央に向かって進んでいくと、奥から、屋台の呼び声と旨そうな匂いがした。そして、肉を焼いた旨そうな匂いを嗅ぎ分けた。朝食をたっぷり食べたので、あまり腹は減っていないのだが、俺は、旨

そんな匂いを辿って、歩き出した。匂いを嗅ぎ分けて辿れるとは、まるで、警察犬だなど、苦笑した。

広場の中央に大きな噴水が建てられており、噴水の周りに多数の屋台が出ていた。人通りも多し、ベンチに座って、昼食を食べてる人も居る。

嬉しいことに、平和で、繁栄しているように見える。どこかと戦争でもしてたら、こうは行かないだろう。

匂いを辿ると6、7人の客が並んでいる屋台に辿り着いた。他の屋台と比べると、並んでいる客が少し多いようだ。これは、当たり前かと考えながら、列の後ろに並んだ。

すぐに、俺の番が来た。

「少年、何が欲しいんだ？」

と屋台の兄ちゃんが聞いてきた。

人間種族の男性で、25歳ぐらいの若者だ、細身で雰囲気はテキ屋の兄ちゃん。

俺の実年齢は兄ちゃんの2倍以上だが、リオン・ウォートの年齢は15歳なので、少年と呼ばれても仕方が無い。

台の上には、何種類かの焼きあがった串焼きが並べてある。

「これと、これを1本ずつ」

と注文すると。

「あいよ。2本で、40コルだ」

と威勢の良い声で、2本の串焼きを渡してきた。

俺は、ウェストバックからがま口の財布を取り出し、10コル銅貨4枚を渡して、2本の串焼きと交換した。

40コルは、日本円にすれば、大体、400円ぐらいに相当する。日本の焼き鳥とは違って、1本の串焼きが、かなり大きい。1本200円なら、かなり安いと思う。日本なら、1本で500円ぐらいだろう。

俺は屋台から離れて、肉の串焼きにかぶりついた。何の肉なのか分からないし、塩と胡椒の簡単な味付けだが、匂い通りで、なかなか

か旨い。日本よりも、こちらの世界の方が、食べ物に恵まれているようだ。

俺は、串焼きを食べながら、他の屋台を覗いて回った。見たことがあるような食べ物があれば、見たことが無い食べ物もあった。この世界が特殊ではなく、海外旅行へ行けば同じように見たことが無い食べ物ぐらい売っているだろう。単に食文化が違うだけだ。

食べ終えた串をごみ箱に捨て、ウェストバックから水筒を出して、水を飲んだ。屋台で飲み物も売っていたが、金を出してまで、買う必要は無いだろう。水筒は、500mlのペットボトルのような形をした魔法の水筒で、清涼な名水など、数十種類もの飲み物が無限に出てくる優れものだ。

当初の目的地である王城に向った。

公園を通り抜けると、4車線ぐらいの幅の広い道が王城へ延びていた。遠くの方に王城の建物が見える。敷地は広大で、建物も予想よりも規模が大きくて、綺麗だった。

城門まで、進んでいくと、8人のフルプレートで武装した騎士が立っているのが見えた。堀沿いに王城を眺めている人達がいたので、俺も、同じように眺めた。城に入る理由は無いらしい、城門に近づいて、職務質問でもされたら面倒なことになるだろう。いや、単に追い払われるだけかもしれない。

王城は、王都の名所になっているのだろう。あるいは、男女のペアが多いところを見るとデートコースなのかもしれない。

王城まで、距離があるのだが、ここからでも、王城の建物が十分に見える。

城門を通って、出入りする人が意外と多いし、見掛けが立派な馬車も通って行ったが、いつまでも見ていたい程の景色ではないし、聴覚が鋭くなっている所為か、男女の話しが良く聞こえる。

俺は、ゲームマニアだけど、デートを覗き見る趣味はない。

マップ画面を広げて、次の目的地を考えた。宿に戻るには早すぎ

る時間だ。

ゲーマーなら、冒険者ギルドが実際にどんな感じなのか見たいと思う気持ちを理解して貰えると思う。俺は、冒険者ギルドを見学することにした。

## 8話

冒険者ギルドの建物は、3階建ての大きな建物だった。入り口のロビーは、2階までの吹き抜け構造になっており、ロビーの左側、3分の1のエリアに受付窓口が並んでおり、残りがカフェテリアのようになっていた。受付窓口の隣に2階に上がる階段があった。階段横の案内板に、「魔獣のドロップ品の換金、クエスト達成の受付は2階」と書かれていた。

カフェテリアには、食べ物や飲み物を売っているカウンタとカウンタの前に5、60個ぐらいのテーブルが置かれ、3分の1ぐらいのテーブルには、飲み物や食べ物を置いた冒険者が座って、神聖協会の腕輪を操作してたり、話をしたりしていた。

何人もの冒険者が、カフェテリアの方の壁の前に立って、壁を眺めているところを見ると、そこに依頼が張り出されているのだろう。テーブルも壁際から十分に離れた場所に並べられている。

冒険者ギルドに対しては、酒場のようなイメージを持っていたのだが、随分と違う。真面目で明るい雰囲気だった。酔っ払いが闊歩している様子は全く無い。

2割ぐらいが俺と同じ普段着で、約7割が武装しており、魔術師の服装の者が1割の割合だ。良く見ると、冒険者の殆どの者が魔獣バックを下げており、テーブルに座った冒険者の何人かは、神聖協会の腕輪からディスプレイを出して、画面を操作している。

俺のウェストバックにも、魔獣バックと神聖協会の腕輪が入っている。

魔獣バックは、4次元ポケットのようになっているのだが、所持している冒険者の筋力に応じた容量しか入らないようになっている。魔獣を倒すと、倒した魔獣は跡形もなく消えてしまうが、このバックを持っていると魔獣が残したドロップアイテムが、自動にバツ

クの中に入るようになっていた。

バックを各ギルド、または、神聖協会に持ち込めば、中身をお金に換金することが出来るし、中身を取り出すことが出来るが、直接バックの中身を取り出すことは出来ないし、バックに物を入れることも出来ない。

考えてみると、一般人にとっては、全く使えないバックで、邪魔な飾りにしかならないが、魔獣を狩って生活する冒険者には必需品だ。

神聖協会の腕輪は、携帯電話や高性能パソコンに相当する情報端末のことだ。腕時計のようなデザインになっており、高性能な腕輪は、パソコンと同じようなディスプレイとキーボードを出すことができる。

冒険者の場合、パーティを組む場合と地下迷宮の各階層を繋いでいるポータルと呼ばれる転送装置を起動するために必要になる。

ポータルを起動し、パーティを組むだけの腕輪が1クラン、メール送受信、通話、ネットワークに接続して検索する機能を足すには10クラン、パソコンと同様にアプリケーションが使えるようになり、ネットワークから情報をダウンロードしたりアップロードできる機能がさらに10クラン。そして、さらに10クランを追加すれば、CPUとメモリの強化とCPUとメモリの性能に応じたアプリケーションの追加ができる。この機能強化は3回まで可能だ。つまり、最高機能の腕輪は51クランになる。尚、魔獣バックも1クランで売られている。

腕輪を操作すると、ディスプレイが使用者の目の前に表示され、ディスプレイを操作することで、パーティを組んだり、高性能な腕輪なら、キーボードを出してネットワークを検索したりする。

パーティメンバーは、どんなに離れていても、近くにいたかのよう、話ができるし、バックの内容は、パーティ間で共有される。

カフェテリアの壁に近づいて、掲示板を眺めてみた。

魔獣が出現する場所を示した王都近郊の地図が張られており、魔獣が出現する場所と出現する魔獣の種類とランク。買取ドロップ品の名前と買い取り価格。そして、盗賊が頻繁に現れる場所と賞金首の名前と賞金額の一覧が張り出されていた。

また、壁はランクごとに仕切られていて、ランクに応じた依頼の紙がぎっしりと張り出されていた。

ギルドのランクは、S、S、S、A、B、…Fで、Fが最低ランク。Aランク以上になると、ギルドからの指名の依頼を受ける義務が生ずる。

魔獣がドロップする魔石にポイントが定められており、魔石を売るか、依頼を達成すれば、ポイントが貰える。

ランクアップに必要なポイントが溜まると、ギルドに申請し、ギルドがランクアップの判断をする。

冒険者ギルドに売った魔石や達成した依頼の履歴がデータとして登録されているので、ギルドがランクアップに相応しい実力があるかと判断すれば、すぐにランクアップできるのだが、ギルドが実力を判断できない場合は、ギルドから討伐する魔獣を指定されるか、ランクに応じた依頼を受けるように指示され、指定ランクの魔獣を倒すか、指示された依頼を達成すれば、ランクアップとなる。

Aランク以上になると、審査のための面接が必要になり、Sランク以上は、なんらかの功績が必要になる。

俺は、ランクFから順に依頼の内容を調べた。

ランクEとFの依頼は、数が少なく、低レベルの魔獣のドロップ品の回収と日雇の仕事のような内容だった。

ランクD、Cの依頼は、数が多く、掲示板の場所も広く取っている。中レベルの魔獣のドロップ品の回収、生産系素材の採取と護衛の依頼。

ランクB以上になると依頼の数が少なくなり、高ランクの魔獣討伐やドロップ品の採集になっていた。

機能を追加した腕輪なら、神聖協会のネットワークに接続して調

べることが出来るので、壁の前に立って見上げる必要はない。

カフェテリアで、ポテトチップと果汁のジュースを購入し、空いているテーブルに座った。

ウェストバックから神聖協会の腕輪を出して、腕時計のように左腕に嵌めてから、ディスプレイとキーボードを出して、ネットワークに接続し、王都の冒険者ギルドのページを検索した。

壁の掲示板に貼り出してある情報よりも、詳細で、より多くの情報が、ページに記載されていた。

ディスプレイで情報を読んでいる間も、異常に鋭くなった俺の聴覚が、冒険者達の会話を拾い上げた。

特性の「複数同時思考」の効果と思うが、まるで、何人も自分が同時に存在しているかのように、情報を読んでいる自分、あるグループの会話を聞いている自分、そして、他のグループの会話を聞いている自分がいる。

「聞き耳」のスキルの効果かもしれないが、盗み聞きをするつもりは無いのに、自然と聞こえてしまう。

「聞き耳」は盗賊用のスキルではなく、どちらかと言うと探索用のスキルで、不意打ちを受けないように、音に対して警戒するために使用するスキルなのだが、盗み聞きとしても十分に使えるようだ。情報収集の手段としては、マナーに反するかもしれないが、酒場で噂を聞くよりも遥かに効率が良さそうだ。



## 9話

1時間ぐらいで冒険者ギルドから引き上げて、宿屋に戻り、午後7時ごろに1階の食堂に行った。

食堂に入ると、今朝の少女ではなく、20代男性の店員がカウンター席を案内してくれた。

晩飯は、サラダ、シチュー、パン、そして、ビールの大ジョッキ。食事を済ませて、他の客の会話を聞きながら、まだ半分ぐらい残っているビールを飲んでみると、隣の客に話しかけられた。

「坊主は、商人の見習いか？」

狼頭の獣人であるウォルフ族の男性。人間と違うので、年齢が分かり辛いが、人間の壮年、つまり、30代か40代ぐらい。ウォルフ族の寿命は、人間の倍ぐらいなので、60から80歳ぐらいかもしれない。

隣に座っていることを知っていたが、怖かったので、見ないように気をつけていた。

俺は、話しかけられたウォルフ族の顔を見た。

よく見ると、賢そうな目をしており、思っていた程、怖い感じがしない。

「商人じゃないよ。冒険者さ」

と俺は、格好つけて、答えた。ビールで少し酔っていたのかもしれない。

「冒険者だと、そうは見えないがなあ、大丈夫なのか？」

「おじさん。人を見かけで判断すると、後悔するよ。それより、おじさんこそ、商人に見えないよ。おじさんも、冒険者かい？」

座っているので、身長は分からないが、立派な体格をしていた。鎧ではなく、俺と同じ普段着を着ているので、冒険者じゃない可能性が高い。

この宿のような安い宿に泊まる客の大部分は、冒険者か旅商人のどちらかだ。つまり、冒険者でなければ、旅商人の確率が高い。

「はっはっは、愉快的坊主だ。まあ、坊主の言ったことも間違いでもないがな、俺は、元冒険者だ。今は、荷馬車の御者をやってる」

「ふーん。すると、運送屋だね」

「運送屋とは、珍しい言い方だな、まあ、荷物を運ぶのが、仕事だから、間違っちゃいないか。……すると、坊主は、迷宮都市に行くところか？」

「そうだよ。明日、行く予定だ」

「そうか、田舎から出てきたところと言った感じだな」

「へえ、良く分かったね」

「そりゃあ、迷宮都市に行きたがる餓鬼は多いからな。俺も、そうだった。でもよ。冒険者として成功するのは、素質のある一握りの冒険者だけだ。大抵の奴は、無理して死んじまう。俺は、死ぬ前に見切りをつけた、お蔭で生き延びてるよ。」

「そうなんだ、田舎者だから、良く知らなかったけど、地下迷宮って、どんな感じなの？」

「そうだな、夢を壊したくはないが、世の中の現実ってやつを教えてやるよ。若者を導くのは、大人の義務だしな。……俺もそうだったが、英雄になる夢を抱いて、地下迷宮に挑む若者は、本当に多い。しかし、大金を儲けるようになれるのは、100階層以上へ行ける上級者だけだ。最初は、宿代を払うだけで精一杯と言うのが普通だな。地道に地下迷宮を探索して、自分の実力に見合った魔獣を倒すんだ。坊主は、魔獣を倒せば、強くなれることを知ってるよな？」

ゲームにレベルアップは常識だ。現実には、こんな感じに認識されているらしい。

「うん。聞いたことはあるよ。だけど、詳しくは知らない」

「そうか、まあ、俺だって詳しくは知らんが、魔獣を倒すと、魔獣の強さの一部が体に取り込まれて、強くなると冒険者の間では言われている。しかし、強くなれる限界があってな、ある程度強くなる

と、幾ら魔獣を倒しても、強くならなくなる。個人によって、取り込めれる量の限界があるそうだ」

ゲームでは、キャラクターのレベルの最大は100。リオンは1000だが、現実は違うらしい。

「へえー。それは、知らなかったなあ」

「地下迷宮は、階層が増えると魔獣が強くなる。まあ、最初の30階層ぐらいまでなら、誰でも、簡単に行けるようになるが、運が悪いと、30階層ぐらいで、限界を迎える奴がいる。自分がどれぐらい強いのか、見極めるのは、難しい。上のランクの魔獣を倒せば、その分、金が儲かる。誰でも、上のランクの魔獣を出来るだけ倒したいと考えるし、30階層ぐらいじゃ、大した儲けにならないからな。少しでも、金を儲けて、威力の高い武器を買おうと、無理することになる。大抵の奴は、無理した結果、死んじゃうのさ」

「そうか、それで、おじさんは、何階層まで行ったの？」

「俺は、82階層だ。82階層で、大怪我をして、それで、冒険者を引退した。今思えば、怪我して良かったと思うよ」

「どうして？」

「今なら良く分かるが、俺の限界は、せいぜいが70階層だった。パーティを組んで、無理してたんだ。あのままなら、その内、死んでたさ」

「パーティって？」

「パーティとは、最大6人まで、仲間と一緒に、地下迷宮に入ることさ、地下迷宮は、不思議なところだな、同じ階層でも、入った冒険者毎に、違う階層になってるのさ。だから、怪我をしても、他の冒険者に助けってもらうことができない。自分以外は、誰もいないからな。しかし、事前にパーティを組んでおけば、パーティの仲間は、同じ階層に入れる。1人で戦うよりも、仲間で戦った方が安全だ。例えば、ランクが上の魔獣でもパーティなら倒すことができる。まあ、稼ぎもパーティで分けることになるから、儲けは減ることになるがな」

「なるほど、それなら、強い冒険者と一緒に行けば、楽だね」

「まあな、でも、そんなに甘くないぞ、当たり前のことだが、弱いと判断されたら、次からパーティに入れてくれなくなる。それに、金が絡むと大変だぜ、パーティ同士で殺し合いになることもある。気心の知れた友人でないと、危ないぜ。数人で組んで、仲間に入れた冒険者を殺して、装備品を奪う犯罪者もいるらしいからな、やたらとパーティを組まない方がいいぜ」

「そうか、それは、怖いね」

「命を預けられるほど信頼できる友人を作ればいいのさ。それに、仲間が居た方が楽しいからな」

「なるほど、その通りだね」

俺は、残ったビールを飲み干して、カウンターに置いた。

獣人の男の手のビールには、まだ、3分の1ぐらいのビールが残っていた。

ビールとつまみを奢れば、もっと話を聞くことができるだろうし、時間的にも、1時間ぐらいは余裕がありそうだ。……正直に言うと、狼の頭は、それなりに迫力があって、少し、怖いのだ。

種族差別のつもりはないし、人間種族の男性だったとしても。日本人のような容姿は、ここでは珍しく、殆どの人間は、外人にしか見えなくて、それに、やっぱり、外人は苦手だ。

以前は体質的にあまり酒を飲めなかったので、酒を飲みに行くのは、めったに無かった。所詮、俺は、酒を飲めないゲームオタクで、人付き合いが苦手なのだ。

以前の体なら、1リットルもある大ジョッキのビールは、とくに許容量を超えていたが、リオンは、アルコールに強いらしくて、大ジョッキを飲んでも、平気だった。

「それじゃ、俺は、部屋に戻って休むよ。色々と話してくれてありがとう」

とお礼を言ってから、立ち上がった。

「なあに、大したことじゃないさ。こっちこそ、話を聞いてくれて、

ありがとな」

「それじゃ。お仕事、がんばってください」

「おお、そっちも、がんばれよ」

と言って、見送ってくれた。やっぱり良い人だった。もう少し、話を聞けばよかったと後悔した。

部屋に戻って、特性とスキルを詳細に調べ、地下迷宮に入る準備を整えた。リオンのレベルは1なので、地下迷宮に行ってレベルを上げる必要があるだろう。

アリスの画面を見るのに、明かりは必要ないので、部屋のランプを消したのだが、リオンには暗視能力があるので、明かりがなくても、昼間のように見ることができた。注意しないと部屋が暗いのか、明るいのか、分からなくなるぐらいだ。

眠くは無かったが、12時頃に服を脱いで、ヘッドに入った。

『アリス、朝の7時に起こしてくれ。』

「了解しました。しかし、マスターには、7時間の睡眠は必要ありませんが、すぐに寝ますか？」

『どうということ？』

「マスターに必要な睡眠時間は1日に2時間程度です。2時間もあれば、マスターの体調を整えることができます。7時間の睡眠時間では、5時間が無駄になります。」

「……………ああ、そうだった。すっかり忘れていた。」

アリスに任せれば、完璧に体調を整えることができる。すぐに寝ることができるし、完璧な状態で、指定した時間に起きられる。嬉しいことにトレーニングも不要だ。苦しい筋力トレーニングをやらなくてもアリスが筋力のバランスを完璧に整えるので、筋力トレーニングをやるのと同等的以上の状態に整えてくれる。

『そうだな、忘れてた。…………それじゃ、もうちょっと起きてる』

と命令をキャンセルした。服を着るのも面倒なので、ベッドに入ったまま、ステータス画面を表示し、特性とスキルを見直したが、

長年の習慣を急に变えるのは難しい、時間の無駄かもしれないが、結局、2時頃に、アリスに眠らせて貰った。

## 10話

翌朝、8時頃に宿屋を出て、迷宮都市へ向かった。

王都から迷宮都市まで、約40km。車で40分ぐらいと考えると、すぐ近くだと言えるのだが。徒歩なら8時間ぐらいだろうか？身体能力が尋常ではないリオンが全速で走れば、すぐに着いてしまうだろう。

しかし、かなり古い言い方だが、スーパーマンのように、「弾よりも早く」走ったら、大ニュースになってしまう。

目立ちたくないのも、マジックアイテムの馬を召喚することにした。馬に乗って普通の道路を走ったら、馬に乗るのは初めてだったが、リオンの乗馬の腕は名人級だった。日本だったら、やっぱりニュースになるかもしれないが、ここでは、ごく普通のはずだ。

しかし、召喚した馬が、普通の馬では無かったので、30分ぐらいで、迷宮都市に着いてしまった。すれ違った人達が呆れた顔をしてたので、結局、目立ってたのかもしれないが、ニュースになることは無いだろう。何と言っても、この世界にはTVはない。まあ、噂にはなるかもしれない。

都市の入口で、誰も居ないことを確認してから馬をマジックアイテムに戻した。

地下迷宮に入るには、都市の中心にあるポータルに入り、キーワードを唱えれば、1階層の入口用のポータルに転送される。

普通は、迷宮都市の冒険者ギルドに地下迷宮に入るための申請を行なって、神聖協会の腕輪を購入するか、腕輪を持っているのならポータルが起動するように設定する必要があるのだが、リオンは、すでに冒険者ギルドに登録済みで、腕輪も設定済みなので、冒険者ギルドに行く必要はない。

冒険者ギルドが発行している分厚い地下迷宮攻略ガイドブックも

頭に入っている。神聖協会がネットワークのシステムを提供しているのだが、この世界には印刷技術がなかったため、神聖協会が発行していない本は、かなり高価になる。冒険者ギルドが発行している地下迷宮ガイドブックは500ページぐらいで1冊が20シルクもする。魔法が掛かっていない普通の本なら、初級魔法で複製できるのだが、魔術師を雇うのは金がかかる。人手で写本すると手間が掛かるわ、間違いもあるわで、この世界では魔法で写本するのが常識になっているようだ。

マップ画面を見ながら、迷宮都市の中心にあるポータルに向かった。

ポータルに行く途中の大通りに屋台が並んでいた。あまりにも旨そうな匂いだったので、昼飯用に、蒸した特大サイズの中華饅を3つほど購入した。2個もあれば十分なのだが、具が3種類もあって、2種類を選ぶのが面倒だったので、全種類を購入することにした。警察犬並みの臭覚が仇になって、匂いの誘惑に負けてしまった。

ポータルは直径30mの巨大な魔方陣だった。魔法陣の中に入り「転送、ファースト」とキーワードを唱えた。一瞬、視界が暗くなり、すぐに、見えるようになった。

ポータルの魔方陣から出て、腰に下げたロングソードを右手で抜いてから、マップ画面を確認した。

地下迷宮の中と地上の時間は一致しているので、地上と同じように、昼間は明るく、夜は暗くなる。そして、夜の方が魔獣が多くなる。

ガイドブックには、地下迷宮には、朝に入って、日が暮れる前の夕方には戻るようにし、翌日は、体力を回復するために、1日は休むようにと書かれている。

リオンには暗視能力があるので、暗くなっても平気だ。レベル上げには、魔獣が多くなるので、逆に夜の方が効率が良いのかもしれない。



マップ画面には、2階層へ行くためのポータルと、安全が確保されたエリア、そして、モンスターを示す赤い点が表示された。

赤い点は、俺から約200mの範囲の魔獣を示している。意識を集中して索敵のスキルを発動すれば、もっと広い範囲の魔獣を索敵できるのだが、迷宮の中なら、200mの範囲で十分だろう。

俺が見た範囲が、マップに反映され、マップ画面の情報が増えるようになっていく。

地下迷宮の仕様は、「騎士王物語」と殆ど同じようだ。ひょっとしたら、「騎士王物語」の攻略情報がそのまま使えるかもしれない。

『アリス』

「はい。マスター」

『騎士王物語の攻略情報があるよな、マップに反映できるか?』

「可能です。マップは、実際に踏破したかどうか分かるように色を薄くしますか?」

『そうだな、そうしてくれ』

「了解しました。実際の情報で上書きするようにします」

マップ画面に、見覚えのあるマップが表示された。

インターブレインのアリスには、感情と言った個性は無いが、非常に優れたAI機能により、簡単な命令でも、こちらの意図を汲んで、有益なアドバイスをくれる。

個性があるかのように会話が成り立つのだが、例えば、俺が綺麗な女性を見て、邪な想像をしていたとしても、アリスが怒ることは有り得ない。単なる機械でしかないのだ。

マップ画面に固定の宝箱とランダムな宝箱や、固定場所にスポーンする魔獣の情報、イベント情報などが表示された。

地下迷宮の各階層に決まったサイズや形はない。1階層は正方形の迷路になっていて、ゲームでは、隈なく探索しても、1時間から2時間ぐらいでクリアできたと思う。

マップ画面を操作して確認すると、1辺が5kmぐらいもある。単純な構造だが迷路になっているので、踏破する距離は50km以

上はありそうだ。どれぐらいの時間が掛かるのか、見当もつかないが、歩いて探索していたら、2、3日ぐらいは掛かりそうだ。可能な限り、走って探索した方が良さだろう。

入口用ポータルは行き止まりになっており、奥に向かった通路の先に赤い点が表示されている。

これから魔獣と戦闘するのだと思うと、急に怖くなった。恐ろしい魔獣と戦うシーンが頭に浮かんできて、歩け出せなくなった。

1階層の魔獣なら、大したことはないだろう。それに、リオン・ウォートのステータスなら、強くてニューゲームの状態なので、圧勝するに決まっている。……と、ヘタレな俺は、何回も自分に言い聞かせて、覚悟を決めた。

バンブージャンプで飛び降りる時のように、覚悟を決め、赤い点に向かって走った。

前方に、1mぐらいの角が生えたでっかいウサギが立ち上がって、俺の方を見ているのが見えた。可愛らしさの欠片もない悪人顔のウサギだ。

俺は、右手に持ったロングソードを後ろに引き、ウサギに向かって、突っ込んだ。

一瞬で、ウサギに近づき、あっと思った時には、体が勝手にロングソードを横に振って、首を刎ねていた。

あっと思った時、反射的に、ロングソードを横なぎに払って、首を刎ねようと頭の中でイメージしたので、体が勝手にと言うのは、御幣があるかもしれない。

俺がイメージした通りに体が動いていたのだが、余りにも、速かったため、実感としては、体が勝手に動いたように思った。

それに、一瞬で距離を縮めた時の速度、ロングソードを横に振った剣速は、人外の速さだった。

「本当に弾よりも早いかもしれん」

と、思わず声にだして、呟いた。

大きな角が付いたウサギの頭が転がり、首から血が噴出して、コ

トンと横に倒れた。首の断面は見事な切り口で、リアルに内部が見えるため、気持ちが悪くなったが、段々と薄くなって、飛び散った血まで綺麗に消えた。

気持ちは悪くなったが、生き物を殺したと言う罪悪感を実感する前に死体が消えた。

アリスのアイテム画面の魔獣バックのアイコンをクリックして、魔獣バックの画面を表示し、獲得したドロップ品を確認した。一角ウサギからのドロップ品は、魔石、角、皮、肉だった。名称の頭に「一角ウサギの」と付いている。

魔獣を倒せば魔石を必ずドロップするが、角、皮、肉などのドロップ品は5分の1の確率だ。俺は盗賊神の護符を装備しているので、ドロップアイテムを必ずゲットできる。

他にも、マサカドウの護符、不死鳥の尾、そして、成長促進の護符を装備している。成長促進の護符に加えて、特性の効果により、獲得経験値は8倍だ。

我ながらチートキャラだと思うが、遊びではないのだ。

ゲームを楽しむのなら、強力な護符を外していたかもしれないが、今は、現実には、地下迷宮を攻略しているのだ。

魔獣に攻撃されれば、怪我をするし、下手をすると死ぬかもしれないのだ。例えば卑怯者呼ばわりされても、特性や護符を外そうとは思わない。

マップ画面を確認すると、通路の50mぐらい先に赤い点が3個、表示されている。俺は、走って、赤い点を目指した。

今度は、3匹の吸血蝙蝠が飛んでいた。

さっきと同様にダッシュして、一瞬で距離を詰めて、斜めの袈裟切り、切り上げ、そして、正面からの切り下ろしで仕留めた。

今度は、イメージ通りに体が動いたが、さっきと比べると動きが遅かった。

先ほどは以前の体のつもりで、全力を出そうとしたのがだ、今度はイメージ通りに体を動かそうとして、力を抜いてしまった。

吸血蝙蝠は、3匹とも体が二つになって、ばらばらと落ちた。一角ウサギより小さいためか、気分は悪くならなかったが、生き物を殺したと言う生々しさを感じた。

ゲームの3Dグラフィックもリアルで生々しいのだが、それでも単なるCGだ。生き物を殺したと言う実感は、全く感じなかったが、魔獣とは言え現実には殺してしまうと、やはり抵抗がある。

冒険者は牛や豚などの屠殺業者と同じなんだろう。お金を稼ぐために、魔獣を屠殺するのだ、仕事だと割り切らないとだめなんだろう。割り切れないのなら、冒険者をやめるしかない。

………考えすぎると、嫌になる。逃げ出したくなる。ならば、今は、仕事だと割り切って、がんばるしかないのだろう。

マップ画面を見て、次に目指す赤い点の位置を確認した。

魔獣を殺すのが冒険者の仕事なんだと割り切ることにして、考えないようにした。

俺は、次の赤い点を目指して、通路を走り続けた。20匹ぐらいの魔獣を倒した頃にレベルが2に上がった。

宝箱を開け、仕掛けをクリアして、魔獣を倒しながら、通路を走り続けた。

マップの3分の2が完成した頃には、随分とリオンの体に慣れてきていた。特性の「高速思考」、「加速」に慣れてたためか、魔獣と戦闘になると加速されて、周りの時間が遅くなるように感じたし、リオンの動きに思考が追いつくようになった。

12時頃に、安全エリアとなっている小部屋に着いたので、壁を背にして座り込み、ウェストバックに入れた蒸したての中華饅を食べた。

2個ぐらいいは食べられると思って買ったのだが、実際には、1個で十分に腹が膨れてしまった。思っていたよりも、ボリュームがあるらしい。実際、大きな中華饅はそれなりの重さあった。

………魔獣を殺したので、食欲が失せたのだとは意識して思わないようにした。

食べ物をウエストバックかアイテム画面に入れた場合、熱い食べ物、いつまでも熱いままで、決して腐ることはないし、味が落ちることも無い。新鮮な物は新鮮なまま。冷えたビールなら、冷えたままだ。

残った中華饅はウエストバックに入れて放り込んでおけば良いだろう。無理に食べる必要はないのだ。魔法の水筒を取り出して、名水を飲みながら、少し休憩してから、地下迷宮の攻略を続けた。

1階層で出現する魔獣は、一角ウサギ、吸血蝙蝠、1mぐらいの芋虫のようなクラウラー、1mぐらいもある化け蛙、そして、1階層のフロアボスが3匹のケイブ狼だった。

フロアボスを倒し、ポータルを起動して2階層に上がった時、レベルは4に上がっていた。そして、時刻は午後の2時になっていた。時間が早いかと思ったが、思った以上の精神的なダメージを受けているのか、2階層の探索を開始する踏ん切りがつかなかった。船酔いと同じ感じだろうか。魔獣の血に酔ってしまったらしい。

魔獣のドロップ品を換金して、宿屋を探す必要があるからと自分に言い訳をして、地上に戻ることにした。

地上のポータルの近くに、換金専用の冒険者ギルドの支店が建っていた。換金所に入ると1階のホールに30ぐらいの窓口が並んでいた。2階にも同じようなホールがあるので、窓口は60ぐらいになるだろう。

時間が早いためだと思うが、随分と空いている。

700匹ぐらいの魔獣を倒したと思うが、ドロップした魔石とアイテムを一度に換金すると、大騒ぎになるかもしれないので、魔獣ドロップ品用にアイテム画面を作り、魔獣バックに100匹分の魔石と20個分のドロップ品を適当に残して、残りを全て、魔獣ドロップ用アイテム画面に入れた。

1階層で10個ぐらいの宝箱を見つけたが、数枚の銀貨か、魔法薬、そして、安物の武器だったし、隠し宝箱も、大した物が入って

いなかった。

空いている窓口に近い、魔獣パックを腰から外し、冒険者カードと一緒に、窓口に渡した。

係員は魔獣パックと冒険者カードを横に置かれた装置に入れ、ディスプレイを見た。

「随分と溜めたんですね、えっと、残念だけど、ドロップ品は必要数に達した物がないわね。どれも、あと少しってところよ。魔石の換金だけでにする？」

「魔石だけですか？」

と俺は疑問におもって聞いた。

「ああ、あなたは換金するのは初めてね。ドロップ品は指定された個数が溜まっていれば、クエストを受けていなくても、クエストの受注と達成処理を同時に出来るのよ。だから、必要数が溜まってから換金するのが普通なのよ。物によっては高値で取引されるから、魔獣バックから取り出して、バイヤーに売る冒険者も多いわ。何が幾らで取引されているかは、バイヤーに聞いてね。ギルドは関与してないわ。でも、結構良い値段で買い取ってもらえる物があるらしいわよ」

「なるほど、それじゃ、魔石だけでお願いします」

「分かったわ」

と係員は返事をする、端末を操作した。

「全部で、36シルクになります。お金は銀行の口座に振り込まれます。現金が必要な場合は、銀行で下ろしてください。ギルドポイントは3ポイントになります」

と係員はディスプレイを見ながら説明すると、装置から魔獣パックと冒険者カードを取り出して、返してくれた。

「ありがとう」

と俺がお礼を言うと、係員がにっこりと微笑んで。

「どういたしまして」

と返事をしてくれた。

俺は、窓口から離れて、冒険者ギルドの支店を後にした。

## 11話

魔獣の血に酔ってしまって、頭がぼうつとなってしまう俺は、ポータルの近くにある公園に行き、ベンチに座り込んだ。

頭を空っぽにして、何も考えないようにして、馬鹿になりきって、ぼうと空を見上げつづけた。

……………何年前だっけ？

以前にも、公園で、ぼけっと空を見上げて、辛いことを忘れようとしたことがあった。確か、主任になって、3、4年ぐらいだったか、仕事がかまうまいかなくて、上司に毎日、毎日、毎日、同じ説教を延々と繰り返されたっけ。まあ、結局は単なる虐めだったのだが、……………いや、忘れよう。もう昔のことだ。

物語の主人公なら、美人のヒロインが現れて、慰めてくれたりするのだろうか？ 確かに、こんな状態でやさしくされたら、誰だって惚れてしまう。…………成る程、だから物語になるのか。…………俺は、平凡なサラリーマンだ。そんなヒロインが現れるはずがない。経験上、何も考えないで、ひたすらぼけっとした方が、嫌な事を忘れやすい。

……………考えることをやめて、ひたすら頭を空っぽにし、何も考えないように、空を見上げ続けた。

30分ぐらい空を見上げ続けてから、俺はベンチから立ち上がり、宿を探すために、歩き出した。

時間は十分にあるので、迷宮都市の探索も兼ねて、通りを物色しながら歩いていると、柱や窓の棧、扉が赤い色の中華風の店を見つけた。殆どの建物はレンガ造りの洋風なので、ひどく目立っていた。見た時、中華の料理店かと思ったが、宿屋も運営しているらしく、宿泊費用の一覧が書かれた看板が出ていた。



都市の中央から離れているためなのか、料金は低めに設定されているし、外見から判断すると、まだ、新しい建物のようなのだ。

内装も中華風かもしれないと少し期待しながら、思い切って中に入っていると、内装は普通の宿と同じで、正面に受付、左が食堂となっていた。

受付カウンターの奥に、チャムチャム族と呼ばれている猫の頭をした女性の獣人が立っていた。

動物の猫よりも人間の顔に近いのだが、それでも、猫の顔なので、年齢は分からないのだが、若いように見えるし、微笑んでいるようにも見える。

地球の猫と比較したら、失礼になるのだろうか、猫の種類で言えば、シャム猫に似ている。

「いらっしやい、若い人、食堂は準備中だよ。それとも、部屋を探してるの？」

と話しかけてきた。若い女性の声だ。

「……えっと、……派手な建物だったから、何だろうと思って入っただけで、……中は普通なんだね」

「まあね。見ての通り、ちよつと街の外れにあるからね。目立つように主人が外装を派手にしたのさ、なんでも故郷の建物が、あんな感じなんだそうだよ。内装も故郷風にしようとしてたから、私が反対したのさ。あんなに派手な内装じゃあ、落ち着かないもんね。」

それより、どうするの？ 泊まっていくな？ うちの料理が自慢の店でね。他の店じゃ味わえない料理を出すって、有名なんだよ、部屋でのんびりしてれば、すぐに食事ができるよ。試してみなよ。絶対に後悔はしないよ。どうする？」

「夕食のメニューは何なの？」

「今日の定食のメインは肉団子だよ。味付けが特殊で、美味しいわよ。あとは、サラダと特製スープに、米よ。米が嫌ならパンにすることもできるけど、うちが炊いた米は美味しいよ。是非、試して欲しいな」

炊いた米とは、驚いた。しかし、外国の米は不味いと良く聞くから、期待しない方が無難かもしれないが、試してみるのはいいかもしれない、不味かったらパンにするか、次からは他の宿に泊まれば良い。

「……えっと、個室は空いてる？」

「ええ、空いてるわよ。個室だと1泊7シルクの前払いだけど、いいかい？」

「はい。お願いします」

「はい。まいど。支払いはカード？ それとも現金かい？」

「現金で、払います」

と俺は、ウエストバックからがま口を出して、5シルク銀貨と1シルク銀貨2枚を渡した。

「はい。7シルクちょうどね、それじゃ、夕食は炊いた米でいいんだね」

「ええ、是非、お願いします。」

「分かったわ。それじゃ、部屋に案内するから、付いて来て」

と彼女は言うのと、柵から鍵を取り出して、受付カウンターから出てきた。俺は、彼女の案内に従って2階に向かった。

7時頃に1階の食堂に入ると、シャム猫風のチャムチャム族の男性が近づいてきた。

「お客さん。こんばんわ」

「こんばんわ」

「お客さんの部屋番号は何番ですかにゃ？」

「204だよ」

「お1人なら、カウンター席でいいかにゃ？」

「ああ、かまわないよ」

「それじゃ、お客さんの席はこっちだにゃ」

とカウンター席に案内された。

「お客さんはパンにするかにゃ？ それともご飯にするかにゃ？」

「ご飯で頼むよ」

「分かったにゃ、すぐに持ってくるにゃ」

と店員は厨房の方へ行った。

言葉通り、すぐに晩飯を運んできた。中華風の肉団子、サラダ、どんぶりのご飯、トン汁のような味噌汁、ビールの大ジョッキ。スプーンとフォークに箸が付いてきた。

こっちに来て2日しか経っていないのに、物凄く久しぶりに日本料理を見たような気がした。まるで、海外旅行先で、日本料理店に入ったみたい、懐かしい気持ちと同時に、ほんと安心した気がした。

そっと、周りの様子を伺うと、箸を使っている客が2人しかいない、しかも、かなり苦勞して使っている様子だ。俺は、箸を右手で取り上げて、じっと見た。

「若い人。箸は、初めてですかにゃ？」

とカウンターの奥側から声が聞こえた。

声の主を見ると、料理人の格好した三毛猫風のチャムチャム族の男性だった。

「いや、初めてじゃないよ。けど、ここじゃ、珍しいから、驚いた。」

「へえ、箸を知ってるとは珍しいにゃ。……それなら、使い方は分かるかにゃ？」

「ああ、分かるよ。」

と俺は返事をして、右手に箸を持って、肉団子を挟んで、彼に見せた。

「へえー！、驚いたにゃ、お客さん、上手だにゃ」

「まあね。使い慣れてるから」

「なるほどにゃ、それじゃ、料理が冷めない内に食べて欲しいにゃ」と彼は言う、と奥へ引っ込んだ。

肉団子は一口では食べられないほど大きいため、箸で半分に割って、口に入れ、どんぶり飯の米を口に運んだ。予想に反して、日本

で食べてたご飯よりも、美味しい。高級な日本料亭で出てくるご飯に引けを取らない。肉団子も見た目通りの中華風の味で、たれがこつてりとして、とても旨い。

味噌汁を覗いて見ると、見たことが無い具が入っていた。外人の奥さんが作った味噌汁みたいだと思ったが、味は悪くなかった。

久しぶりの日本風の食事を夢中になって食べた。あつと言うまに食事を平らげてしまい、満足した溜息をついて、ビールを飲んだ。

横から、小エビの唐揚げが入った小皿が横から差し出された。見ると、受付カウンターにいたチャムチャム族の女性が隣に座っていた。

「これ、特別サービスよ。これも、箸で食べてみて」

と俺を見ながら言った。

「ありがとう」

と不思議に思いながら、お礼を言って、小エビを箸で挟んで、口に運んだ。揚げたてのアツアツで、とても旨い。そして、ビールを呷った。

「これは、旨いね、ビールに良く合うよ」

と横で見ていた彼女にお礼を言った。

「あんた、うちの主人と同じように箸の使い方が上手だね。何処で覚えたの？」

「何処って言われてもなあ、小さい頃からずっと使ってたからだよ」

「ひょっとして、主人と同じ出身かい？」

「ご主人の出身が何処か知らないけど、違うと思うよ。……えっと、王都から5日ほど歩いたところにある山奥で暮らしてた。」

と俺は、その場で、適当に考えて答えた。「孤児で、ある老人に拾われて、山奥で隠れて暮らしていた」ととっさに自分の生い立ちを考えた。

「山奥ねえ、……主人の出身は、ベンガル王国の辺境の村だよ、ユリトピア村と言って、チャムチャム族の小さな村から来たのさ。地下迷宮の珍しい食材が欲しくて、ここまで来たそうだよ、何でも、

究極の料理を作るのが夢だってさ。呆れちゃうよね」

「究極の料理ですか。……どんな料理か想像も出来ないけど、物凄く旨そうですね」

「どんな料理か、主人も分からないじゃないかしら、夢みたいなのを言ってるし、それより、今日の料理はどうだった？」

「はい。とても美味しかったです」

「それは嬉しいね、これからうちを贖肩してね。そうだ、あんたの名前は？」

「リオン・ウオートです」

「リオンちゃんね。私は、ラーニヤ、主人の名前はオルモンド。よろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

「さて、主人に睨まれないうちに退散しないとね。ゆっくりしていつておくれ」

とラーニヤは立ち上がると、空になった食器を運んで行った。

俺は、他の客の会話を聞きながら、小エビのから揚げを口に運び、ビールを飲んだ。部屋に引き上げる頃には、すっかりいつもの調子を取り戻していた。

## 12話

精神的疲労を取るために6時間の睡眠を取った俺は、爽快な気分が目覚めることができた。宿屋の中庭に出て、簡単なストレッチで朝の美味しい空気を満喫した。

朝食を済ませて、部屋に戻ると、すぐに準備を整えた。少し早いかと思ったが、すぐに宿屋を出て、地下迷宮の2階層に向かった。宿屋を出たのは7時20分ぐらいだった。

しかし、ポータルに向かう途中、何組もの冒険者が現れ、ポータルに向かった。弁当を売る屋台が商売を始めていた。俺は、屋台で食べ物を購入して、ポータルに向かう冒険者の流れに乗って歩いた。まるで、通勤するサラリーマンのようだと思った。

魔法陣の中に入ると、2階層のキーワードを唱えた。

2階層に出てくる魔獣は1階層と殆ど同じで、迷路のパターンは違うのだが、宝箱やイベントも似た感じだ。俺はすぐに赤い点を目指して走った。

最初に遭遇した魔獣は、化け蛙2匹に吸血蝙蝠が3匹。1階層と比べると、若干、数が多くなったような気がするが、俺は、瞬く間に5匹を倒した。

どうやら、完全にふっきれたらしく、罪悪感を感じることも、気分が悪くなることもなかった。ゲームの情報を元にアリスが提案した最短の攻略ルートに従って、迷宮内を突っ走った。攻略ルートがマップに表示されるので、俺はマップの指示通りに走り、魔獣を見つけたら、瞬殺するだけだ。隠し宝箱やスイッチなどの仕掛けはマップに表示されているし、俺が見逃しても、アリスが教えてくれる。

11時頃には2階層を突破し、12時頃に屋台で買った昼飯を食べて休憩。午後3時間半ごろに3階層をクリアして、4階層の入り口に到着した。

地上に戻るには丁度良い時間なのだが。

一昨日の夜。毎日、地上に戻って宿屋を探すには、午後4時ごろには引き上げる必要があるのだが、それでは、効率が悪すぎると考えた。俺は睡眠時間が2時間しか必要としないし、若い頃は深夜の12時過ぎまで仕事をしていた。それに、宿屋で泊まると、娯楽が何もないので、暇でしようがない。地下迷宮の安全エリアで快適に寝泊りできないかと、マジックアイテムを確認したら、魔法の小屋を見つけた。魔法の小屋は、見た目は3cmぐらいのサイコロのようなキューブだが、魔力を込めると1辺が2mの立方体の箱になる。そして、この箱の中に、家が丸ごと入っている。俺はカスタマイズ機能を使って、庭付きの3LDKのマンションをデザインした。

昨日は地下迷宮で寝泊りする状況ではなかったが、今日は、昨日のことが嘘のように調子が良いので、このまま地下迷宮の攻略を続けることにした。

順調に4階層をクリアして、5階層に突入後、午後8時頃に安全エリアで晩飯を食べて、休憩を取ってから攻略を続行。深夜1時頃に5階層をクリア、6階層に入っすぐの安全エリアで魔法の小屋を使用した。

魔法の小屋に入ると入口は6畳ぐらいはある玄関になっており、そこで靴を脱いで中に入るとすぐに30畳ぐらいのリビングになっている。自由にカスタマイズできたので、間取りはかなり広く取っている。家具や内装も現代日本風にデザインした。冷蔵庫からテレビまで、電化製品も揃えてある。

ダイニングキッチンに入って、夜食を食べて、風呂に入ってから、冷蔵庫からビールを出して飲んだ。何もかもが新品で、まるで、引越したばかりのような雰囲気だが、住み慣れた現代日本風のデザインなので、宿屋で泊まるよりも遥かに落ち着く。

昨日は魔獣の血に酔ってしまったって、酷い状態になったが、今日はいくら魔獣を殺しても平気だった。たった一晩で魔獣を殺すことに

慣れてしまうのはおかしい。

「アリス」

「はい。マスター」

「昨日の夜に、何か精神的な制御を俺にしたか？」

「はい。マスター」

「何をした？」

「昨日、マスターは深刻なうつ状態に陥りました。そのままでは、正常な活動が損なわれると判断しましたので、正常な精神状態に戻るよう治療しました」

「俺の心を弄ったのか？」

「いいえ。精神疾病の治療を実施したのみです。マスターの心を制御することは許されていません」

「今日は、何もしなかったか？ 例えば、生き物を殺した罪悪感を減らすとか」

「いいえ。何も行なっていません」

「仮に治療しなかったら、どうなった？」

「発熱、頭痛、および、吐き気などの症状が出たでしょう。そして、無気力状態に陥ったはずです。回復するには最低でも1年以上必要になるでしょう。また、トラウマになってしまいう可能性もありました」

「なるほど、分かった」

ひょっとしたら、心を操作されたかと思ったが、違ったようだ。心を操作されたかもしれないと疑問に思ったこと自体、心を操作されていない証拠なのかもしれない。今日は何もしなかったと言うことなら、本当に1日で慣れてしまったのだろう。それにしても、昨日は随分と重病だったようだ。それをたった一晩で治してしまうとは、実感が無いが、物凄いことなんだろう。

俺はビールを飲み干して、ベッドに入った。

2時間の睡眠後に、朝食を食べてから攻略を続行した。そして、3日後の昼頃に、10階層をクリアして地上に戻った。



ポータルの広場の屋台で食べ物を買って、昼飯を食べてから、冒険者ギルドの支店で、魔石とドロップ品を換金した。そう言えば、まだ迷宮都市の冒険者ギルドに行って無かったことに気がついた。俺は、冒険者ギルドを覗いて見ることにした。

迷宮都市の冒険者ギルドは、王都の冒険者ギルドの倍ぐらいの規模があった。掲示板に張られた依頼は、王都の冒険者ギルドと同じぐらいの数だったが、それと同数ぐらいのパーティ募集の依頼がぎっしりと壁に貼られていた。

ずらりと並んだテーブルには、4人から6人のパーティが座っており、みんな楽しそうに会話を楽しんでいる。

ふと、学生の頃の友達顔を鮮明に思い出した。いつも4人一緒に、馬鹿なことをやっては、大笑いした。前よりも記憶力が段違いに良くなったためだろう。初めて出会った時のこと、一緒に大学に行って、学生食堂で安いカレーを食べたこと、一緒に、都会に出て遊びに行ったことなど、一瞬で鮮明に思い出してしまった。

就職先がバラバラだったので、卒業後は殆ど会わなくなったのだが、あれから30年以上も経っている。大学時代の日々の記憶を詳細に思い出し始めたため、俺はアリスに命じて、思い出すことを止めた。昔の記憶に意識が取り込まれてしまいそうだった。

冒険者達が楽しそうに雑談している様子から学生の頃の記憶が呼び出されてしまったのだろう。気持ちを切り替えて、パーティ募集の依頼を調べた。

パーティに入ってみたいとは思うが、しかし、パーティに入る訳には行かない。リオンの力を隠し通すことは不可能だろう。絶対にボロが出るに違いない。

やはり神官や魔術師のメンバーを募集する依頼が多い。特に神官が不足しているのだろう。神官は怪我や病気を治療する技を持っている。治癒魔法を使える者は極めて稀だが、魔術師よりも神官の方が使える者が多い。

怪我を治す方法は、薬で治す方法と、魔法薬、そして、治癒魔法の3つのやり方がある。魔法薬は高価だし、治癒魔法を使える者はめったにいないので、薬で治すのが普通なんだと思う。

俺は冒険者ギルドを出て、地下迷宮に籠るための食料を買い込むために、市場に向かった。市場は商人のための施設で、市場で売買するには、商人ギルドの交易許可カードが必要だが、俺のウェストバックには、交易許可カードが入っている。

売買する単位が大きいのだが、仕入れ価格で購入できるので、商店で購入するよりも遥かに安い。俺は、大量に買い込んだ。

## 12話（後書き）

最初の投稿なので、区切りの良いところまで一気に投稿しました。次話から第二章に突入します。物語はまだ始まったばかり、先は長そうです。少なくとも、1週間後までには、次話を投稿する予定です。

## 13話

血を撒き散らして、屍となった20体ほどのゴブリンの騎士は、やがて、徐々に姿を消し、血糊さえも綺麗に消えていった。

ゴブリンの騎士が守っていた高さ3mぐらいの両開きの扉が、目の前に建ちはだかっている。この扉の先がゴブリン城の玉座、つまり、250階層のボス部屋だ。

マップ画面を確認すると、ボス部屋の中に、フロアボス1体と護衛6体分の7つの赤い点が表示されている。

250階層のフロアボスはゴブリンキング、護衛の6体は上位種のゴブリンナイトだが、リオンにとっては、大した敵ではない。

今は7月の下旬、地下迷宮の攻略を開始して、約4ヶ月になる。1週間のうち6日間は、地下迷宮で眠り、1日は地上の宿屋に泊まって休むようにして、ひたすら、地下迷宮を攻略した。

この世界の1年は12ヶ月で、1ヶ月が5週間の35日、1年は420日になる。季節は日本と同じなので、今は、夏の真っ最中だ。リオン・ウォートであることに慣れたし、この世界の生活にも慣れた。と言っても、地下迷宮を探索する冒険者の生活しか知らないし、迷宮都市から離れたことも無い。

マザーブレインの管理制御室は、地下迷宮の1000階層にあるだろうと思っているのだが、そこに入るためのキーアイテムは、地下迷宮には無いだろうと考えている。

少なくとも、俺がゲームデザイナーなら、単純に地下迷宮を攻略したらお終いにはしないだろう。最終的な目的は、マザーブレインの管理制御室の発見ではあるが、急ぐ必要はない。折角なので、この世界の他の場所に行って見たいと思っている。

生産系のスキルを上げるために、神聖協会が提供している全種類

の工房施設付きの店を購入したいのだが、残念ながら売れ切れ状態のため、手に入らなかった。

アリスに、売りに出たら即時に購入するように命じてあるが、手に入るのは何年も先になるだろう。

アリスの報告によると、迷宮都市から北に1300kmぐらいのところに、俺が所有する土地と建物があるらしい。マップで確認すると山脈の麓で、大きな湖がある大森林の奥にあるようで、得体の知れないバリアに包まれているらしい。何だか秘密基地のような感じもするのだが、距離が離れているので、とても徒歩で行ける距離じゃない。その内、調査に行けば良いだろう。

1000階層の攻略は、下手したら10年は掛かるかもしれない。生産系に手を出せば、少しは気がまぎれるのだが店を手に入れないと商売にならない。

レベルは147になったが、最初から最強の状態なので、レベルが上がっても強くなった実感が無いし、他の冒険者と交流が無いので、自分がどれぐらいの強さなのか分からないのだが、リオンはチートキャラクターなので、相当な強さなんだと思う。

下手に目立って、面倒事に巻き込まれたくないので、初心者冒険者の振りをして、隠すように努めているし、他人と交流を持たないようにしているのだが、流石に寂しいと感じ始めている。

5日前にギルドランクをDに上げたので、隊商の護衛の仕事を請けて、他の街に行ってみようかと考えている。

背中から「黒桜」を抜いて、ボス部屋の扉を押し開けた。

「黒桜」は、刀身が四尺三寸、鞘に入れた状態だと全長が170cm近くもある日本刀だ。腰に下げると引きずることになるので、背中に担ぐしかない。

超レアな素材で作られた特製品で、特別な魔法の力はないが切れ味が凄まじく、魔闘気の通りも良い。鉄の鎧でも簡単に切り裂くことができるし、ドラゴンや鬼人など、普通の剣では歯が立たない魔

獣でも、簡単に切り裂く事ができる。軽量化の付与魔法を掛けてあるのだが、鉄よりも重い素材を使用しているし、肉厚の刀なので、相当な重量の業物に仕上がっているが、リオンの筋力なら片手で振り回すことも可能だ。

俺は「黒桜」を両手で正面に構えて、護衛のゴ布林に向かって加速しながらダッシュした。

護衛のゴ布林は、扉が開いたことに気付いたようだが、扉を見たままで、俺の方を見ていない。敏捷さのステータスが高いので、一般人の4、5倍の素早さで動ける上に、特性の効果でさらに4倍に加速した状態だ。俺の動きが見えていないのだろう。

6体の護衛の首を順に一刀で刎ねた。まるで動かない人形の首を順番に切り落とすような感じだ。剣術の技など必要ないんじゃないかと思う。

ボスのゴ布林キングは俺に気付いているようで、玉座から立ち上がって、両手剣を構え、俺を目で追っていた。しかし、それでもスローモーションで動いているかのように鈍い。

ゴ布林キングは2mぐらいの戦士で、フルプレートで完全武装しているのだが、フルフェイスの兜で、凶悪な顔が見えないためか、怖い感じが全くしない。

俺はゴ布林キングとの距離を一瞬で詰めて、頭上に掲げた「黒桜」をゴ布林キングの兜に振り下ろした。

ゴ布林キングは両手剣を上げて「黒桜」を防ごうとしたが、俺は両手剣を弾き、腕も切りながら完全に切り下ろして、返り血を避けるためにゴ布林キングを蹴飛ばして後ろに飛んだ。

ゴ布林キングは左右に分かれてゆっくりと崩れ落ちた。

俺はゴ布林キングの死体を見ないように後ろを向いて、血糊を吹き飛ばすかのように「黒桜」を左右に振ってから背中の中の鞘に仕舞った。

魔獣を殺すことには随分と慣れたが、内臓を撒き散らしたゴブリンの死体は見たくない。死体が消えた頃を見計らって後ろを向いた。

玉座のあった場所に、直径10mの魔方陣が出現していた。251階層に行くポータルなのだが、ここで、ポータルに入ってしまうと超レアなアイテムを取り逃してしまう。

玉座の近くに、隠し宝蔵庫があるのだ。4箇所の仕掛けをクリアしてから、フロアボスを倒すと、宝蔵庫が開放される仕掛けになっている。俺は、隠し宝蔵庫を漁ってから、251階層に行くポータルに入り、地上に戻った。

251階層のポータルから地上に戻ると街の喧騒の音が耳に入ってきた。そして、自分の影が長く伸びているのに気づいた。1時間ぐらいで陽が沈むだろう。

ポータルの魔方陣に何人もの冒険者が現れ、申し合わせたかのように、換金所に向かって走って行った。換金所の混雑は、今頃がピークで、換金が終わる頃には、とつくに暗くなっているだろう。

俺は、換金するつもりはないので、邪魔にならないように気をつけながらいつも利用している宿屋に向かった。

赤白の派手な外装の宿屋の扉を開けて中に入ると、オーソドックスな内装のカウンターが客を待ち構えている。このギャップがなんとも言えない不思議な感じがする。

「こんにちは、お客さん。お泊りですか？」

とカウンターに座っていたトントンが挨拶してくれた。トントンはこの宿屋を経営している夫婦の長男で、チャムチャム族の若者だ。母親に似て、シャム猫のような顔をしている。15、6歳だと思うが、猫の顔なので、良く分からない。が、まだ子供であることは確かだ。

「こんにちは、トントン。個室は空いてるか？」

「いつもの部屋が空いてるにゃ、1泊7シルクだにゃ」

「それじゃ、2泊で頼むよ」

地下迷宮の攻略は、区切りが良いので、明日は休みにして冒険者ギルドで護衛の依頼を探してみるつもりだ。

俺は、財布を取り出して、14シルク分の銀貨をカウンターに置いた。トントンは14シルクを取ると、カウンターの下から、鍵を出して、立ち上がった。

「案内はいらないよ。鍵を渡してくれ、何号室だ？」

「部屋は203号室だにゃ」

とトントンは言うのと、鍵を俺に差し出した。

「ご利用、ありがとうだにゃ」

「ああ、こちらこそ、世話になるよ」

と俺はトントんに答えてから、2階に向かった。

普段着に着替えてから、部屋を出て、1階の食堂に向かった。俺の鎧には、温度と湿度を調整する魔法が掛かっているので、普段着を着るよりも、鎧のままの方が快適なのだが、夏の盛りに、革鎧のまま、夕食を食べる冒険者はいない。

食堂は普段通りに繁盛しているようだ。全てのテーブルが埋まっており、カウンターも空いている席が2つしかない。空いているカウンター席に座るか、相席をお願いして座るしかないが、俺はいつもカウンター席に座っているので、問題ない。

「いらっしやい。リオンちゃん」

入り口で食堂を眺めていたら、ラーニャに声を掛けられた。

「ラーニャさん。こんばんわ」

「いつものカウンター席が空いてるわよ」

「そうですね。カウンター席にします。それと、定食セットをお願いします」

「分かったわ。それじゃ、カウンターの空いている席に座って、直ぐに定食セットを持っていくわ。今日は、焼き魚よ！ 美味しいわよ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべて、厨房に去って行った。チャムチャム族は魚が好物らしく、この宿屋では、魚料理が良く出る。

俺は、食堂の奥に行き、カウンターの端の空いている席に座った。



焼き魚を箸で食べるのは、箸に慣れていないと難しいらしい。日本人なら、ナイフとフォークを使って魚を食べる方が、箸で食べるよりも難しいと思う。

隣に座っている赤毛の若者が、焼き魚を食べるのに、難儀していた。この店でも、箸を使う客は少ないのだが、隣の若者は、その少ない箸の愛好家の1人らしく、箸で、魚の身をほぐそうとして、魚をばらばらにしていた。

チラチラと横目で隣の様子を伺っていたら、ラーニヤが定食セットを運んできた。

「お待たせ」

とラーニヤは言う、俺の前に焼き魚のセットを並べて。

「ごゆっくり」

と声を掛けて、離れていった。俺は、箸を取って、焼き魚を食べ始めた。

綺麗に焼き魚を食べ終えて、ビールをぐいっと飲んで、満足の溜息をついた。

「なあ、ちよつといいか？」

隣の若者が声を掛けてきたので、若者に目を向けた。

隣に視線を向けないようにしていたので、若者の顔を見たのは、初めてだ。二十歳ぐらいの人間の男性。赤毛に赤い目、西洋系の白人で、映画俳優として世界的なスターになれそうなほど整った顔だ。そして、額に薄っすらと黒い汚れが見えた。墨で書いた落書きを洗って落としたけど、薄っすらと残ってしまったかのような汚れが見える。……いや、汚れじゃない。ルーン文字だ。ルーン文字を消した跡のように見える。非常に気になる。しかし、魔法的な文字なので、普通の者では見えない類のものだ。見えない振りをした方が無理だろう。

俺と同じように薄手のシャツを着ているだけだが、傍にロングソールドが立てかけられている。座っているのも身長は分からないが俺

よりも、背が高いようだ。この暑さで、鎧を着ている者は居ないが、殆どの者は武器を身につけるか、手元に置いている。武器が手元にないと安心できないのは、冒険者の職業病かもしれない。

「ああ、ごめん。驚かすつもりはなかったんだけど、えっと、……お前さんが食べた魚が、あまりにも、綺麗な食べ方だったから、凄いなあと思ったんだ。それで、箸の使い方に何かコツでもあれば、教えてほしいなあと思った訳よ」

と焦った様子で、若者が言い訳をした。確かに、少し驚いたし、じっと見つめてしまったが、そんなに慌てる程のことではないと思う。

「確かに、魚を綺麗に食べる方だと思うけど、そうだなあ……魚が好きで、貧乏性なだけじゃないか？」

「貧乏性？」

と若者がオウム返しに答えた。意味が分からないらしい。

「えっと……。つまり、出された食べ物は残さないと言う感じがな、子供の頃から、食べ物を粗末にするな、出された物は残さずに食べろと教育されて育てられたからね。魚は好きだから、食べられるところは全て食べれば、こんな感じになるよ。箸じゃなくて、ナイフとフォークで食べても、同じじゃないか、……それと、箸を使うコツなんて無いよ。箸も子供の頃から使っているからね。使い慣れれば、誰でも、使えるようになるよ」

「慣れか？」

と今度は、合点が行った顔で答えた。

「そうだよ。俺は、変な癖がついてるけど、正しい持ち方で使い続けていれば、おのずと上手に使えるようになるさ」

「正しい持ち方なんてあるのか？」

「一応ね。俺は3本の指しか使わないけど、正しい持ち方は4本の指で持つんだよ。えっと……こんな感じ」

と俺は、正しい持ち方で箸を持って、若者に見せた。

「親指で箸をしっかりと抑えて、片方の箸を薬指の乗せて、固定す

る。そして、もう片方の箸を人差し指と中指で挟んで動かす……と、まあ、こんな感じだ」

俺は箸の動かし方を説明しながら、実際に使って見せた。若者は俺の手を見ながら、箸を持つと、魚の身を箸で掴もうとした。

「……、こうやって挟めば良いのか」

と若者は言う、箸で挟んだ魚の身を口に入れて、ビールを飲んだ。

「ありがとうよ。何となく、使い方が分かったよ。……俺の名前はギルバート・ソルダイン、ギルと呼んでくれ、よろしくな」

と若者が名乗った。

「俺は、リオン・ウォート、リオンで良いよ」

と俺は同じように返した。

「リオンか……。やっぱ、男だよな」

ギルバートは、俺のことを女と思っていたのだろうか？

「服装を見れば、分かるだろう。俺は男だ」

「ああ、すまん。男だとは思ってたけどよ。冒険者だと男のような格好をした女性も居るからなあ、間違ってたら失礼かと思ってさ」

明らかに、女性と思っていたようだ。確かに、リオンの顔は、女性と思われてもしかたがない顔かもしれない。こちらに来て、髪を切っていないので、肩まで伸びてしまった髪を後ろでまとめてポニーテイルにしている。しかし、薄手のTシャツしか着ていないのだから、少なくとも、胸を見れば男だと分かるはずだ。……たぶん。まあ、洗濯板みたいな女性もいるかもしれないけど、確かに、ギルバートの言う通り、男みたいな格好した女性の冒険者を見かけることはある。

「まあ、いいけど」

と俺は、返事をして、ビールを飲んだ。暑い夏には、冷えたビールが1番だ。昔はアルコールが飲めなかったのだが、今はビヤガーデンに毎日のように通うサラリーマンの気持ちがよく分かる。

「リオンは、商人か？」

「冒険者だよ」

「そうか、武器を持ってないから、商人かと思ったよ。修理に出してるのか？」

「いや、部屋に置いてきた。食事をするのに、武器はいらないだろう？」

「まあ、その通りだが、無用心じゃないか？」

「どうして？ 宿の食堂に野獣は出ないし、山賊もいない。武器は必要ないだろう。それとも、喧嘩で武器を使うのか？」

「まさか、喧嘩で武器は使わんさ。相手が抜けば、俺も抜くけどな。でも、殺したりはしない」

「なんだか、喧嘩慣れしてるみたいだね」

「そうでもない。いや、少しはそうかもしれないけど、少なくとも、自分から喧嘩を売ったりはしなさ。売られた喧嘩は買うけどな」

とギルバートは、ビールを持ち上げて飲んだ。冒険者なら普通かもしれないが、やはり喧嘩慣れしているようだ。

「実力のある奴は、喧嘩を売ったりすることはないからな、酔っ払って絡んでくる奴は、実力も無いと相場が決まっている。それに、俺は相手の強さが大体分かる。自分よりも強いかわるがわりは分かるさ。ここには、俺よりも強い奴が幾らでもいる。そして、不思議なことに、リオンは俺もより遥かに強いと見た。リオンは15か16だろう。そんなに強いはずがないのになあ、見た目は、ほんの駆け出しの冒険者にしか見えないし、体格だって、女みたいに華奢な体だ。……なあ、リオンは、何階層まで行ったんだ？」

とギルバートが真剣な顔をして、聞いてきた。敵分析のスキルがあれば、敵のステータスが分かるので、ギルは敵分析のスキルを持っているのかもしれない。しかし、正直に答えることはできない。

「まあ、それなりってとこかな」

と俺は曖昧に返した。

「それなりか……確かに、いきなり聞かれても、正直には答えられんよな、悪かったよ。俺達は、地下迷宮に入って1年半になるけど、

174階層を突破したとこだ。リオンは、もっと先に行ってるんだろう？」

「まあ、そんなとこだ、ギルバートは、パーティを組んでるのか？」  
「ああ、そうだ。それと、俺のことはギルと呼んでくれ、友達はみんなそう呼ぶよ。えっと、パーティの話だったな。俺達は、俺を含めて3人のパーティだ。1人は魔術師で、もう1人は戦士。2人も幼馴染さ。リオンは1人か？」

「そうだよ」

「それなら、俺達とパーティを組んでみないか？ あと1人、仲間が欲しいと思ってたとこなんだ」

「折角だけど、パーティを組むつもりは無いんだ」

「そうか、リオンとは気が合いそうだと思ったんだけど、仕方がないか。縁があれば、また会えるだろう」

とギルバートは、残っていたビールを飲み干した。

「それじゃ、俺は、宿に帰るわ。ここには、食事に来ただけで、仲間と違う宿に泊まってるんだ、箸の使い方を教えてくれて、ありがとう」

と言うと、足元に置いてあったロングソードを持って席を立ち上がり、俺に手を振ってから食堂から出て行った。

## 14話

翌日の朝、遅めに朝食を済ませ、革鎧にロングソードを腰に下げ、冒険者ギルドに向かった。

冒険者ギルドのカフェテリアは、快適な温度に調整されているためか、冒険者で溢れていた。夏休みになると図書館が一杯になってしまうのと同じ現象だ。冒険者ギルドや商人ギルドなどの公共施設や高級な宿には、エアコンのような温度を調整する魔法器具が設置されている。

俺は、依頼が貼られている掲示板の前に立ち、ランクDで受けられる護衛の依頼を詳細に調べた。それほど遠くない街に向かう商人の護衛の仕事を請けるつもりだが、ランクDで受けられる護衛の件数自体が少ないし、しかも1人で受けられる依頼は1件もない。護衛の依頼の殆どが、パーティを前提にしている。

ランクをCに上げて出直すか、あるいは、商人ギルドで商品の輸送クエストを受けるか。しかし、商品の輸送クエストを受けるには、荷馬車が必要になるだろう。今のところ、商人になるつもりは無いので、荷馬車は購入したくない。手紙などの小荷物を運ぶ依頼では、報酬が少なすぎて割に合わない。

「あれ、リオンじゃないか」

と、突然、肩を叩かれた、振り向くと、ギルバートが笑顔で立っていた。真っ赤な部分鎧にロングソードを腰に下げている。身長は182cmぐらい、俺よりも背が高いし、赤い部分鎧が良く似合っている。羨ましいとは思わないが、さぞかし、女性にモテルことだろう。

「……誰かと思ったら、ギルじゃないか、おはよう。昨晚振りだね」と俺は笑顔で挨拶した。昨日の夜に会っただけなのに、以前からの知り合いのような気がした。

「ああ、おはよう。依頼を探しているのか？」

「まあね。気分転換に、何か依頼を受けようかなと思ってね」

「そうか、俺達も、護衛の依頼を探してるところだ」

「ギルもか、それで、依頼は見つかったの？」

「それが、なかなか見つからない、ユーリが調べてるけど、3人パーティーだと難しいらしい、リオンは見つかったのか？」

「いや、同じだ。護衛の依頼を受けようかと思ったけど、1人じゃ、無理だね」

「それなら、俺達と一緒に受けないか？ ユーリの話だと、4人パーティーなら、依頼があるそうだぜ」

「そうだなあ……………」

と俺は躊躇してしまった。リオンの力を隠すためには、パーティーに入らない方が良いのだが。護衛の依頼を受ければ、パーティーを組む訳ではなくても、何人かの冒険者と一緒に受ける事になるだろう。見知らぬ誰かよりも、目の前のギルバートと組んだ方が、明らかに良いと思う。

「実を言うと、困ってるんだ。リオンが居れば、護衛の依頼が受けられる。なんなら、今回の依頼だけでも一緒にやらないか？ パーティの街までの護衛だから、パーモに着いたら、パーティーから抜けても文句は言わない。なあ、頼むよ」

とギルバートが続けて、頼んできた。なんだか、親しい友達に依頼されているような気がした。

「そうか、分かった」

と俺は答えてしまった。

「よし、それじゃ、仲間を紹介するから、来てくれ」

とギルは、嬉しそうに俺の肩を叩くと、腕を掴んで、引っ張った。

ギルバートに案内されたテーブルには、ギルバートと同じ年頃の男女が座っていた。男性は茶色の髪に茶色の目で、ギルバートと色違いの部分鎧、こちらは茶色だ。がっしりとした体格で、ギルバートほどではないが、意志が強そうな顔つきの2枚目だ。女性は金髪

に緑色の目で、紺色の女性用魔術師のロープを着て、腕輪から出した端末を操作している。夏用の女性用魔術師のロープは、まるで、夏用のワンピースのように、肩なしで胸元が大きく開いており、しかもミニスカートのように丈が短い。夏バージョンの魔女っ子の格好だ。そして、2人とも、ギルバートと同じように、消えなかったルーン文字が額にあった。俺は、驚きが顔に出ないように咄嗟にポーカーフェイスを装った。

「エドワード、ユーリ。仲間を見つけてきたぞ」

とギルバートが2人に声を掛けた。2人は端末の画面から顔を上げて俺を見た。

「ギル、また、ナンパして来たの、でも、凄い美人ね」

とユーリと呼ばれた女性魔術師が、呆れた顔をして、ギルバートに視線を向けた。

「おい、リオンは、男だぞ」

とギルバートが慌ててユーリに言った。

「えっ、うそ！」

とユーリが、驚いた顔をして、両手で口を隠し、俺の顔を見た。急に腕を動かしたので、表示されていた端末が消えた。

昨晚もギルバートに女性だと思われていたようだが、続いて、俺のことを女性だと勘違いした者が現れた。たぶん、髪を長くしているのが原因かと思うのだが、そう言えば、この世界に散髪屋は、あるのだろうか？ 探したことが無いので、無いとは言えないのだが、今まで、見たことが無い。

「まったく、ユーリは俺のことを何だと思ってるんだ？」

とギルバートがユーリに文句を言った。

「ギル、仲間って、どういう意味だい？」

とエドワードと呼ばれた若者がギルバートに聞いた。

「さっき、4人なら、護衛の依頼があるって言ってただろう？」

「ああ、言った。しかし、それにしても、ほんの10分で、仲間を見つけたのか？」



「ああ、偶然、リオンに会ったからな。リオンとは、昨日会ったんだ。箸の話をしただろう」

「そう言えば、箸がどうと、騒いでたわね、お蔭で課題に集中できなかったわ」

「それは、悪かったな。それより、俺達よりも実力がありそうだって、話したよな」

「そうだったかしら」

とユーリが、昨晚の話を思い出そうと、思案げな顔をした。

「兎に角、リオンを仲間に入りたいが、いいか？」

とギルバートがエドワードに聞いた。

「うむ。……まあ、良いだろう」

とギルバートが、暫く考えてから答えた。

「よし、それじゃ、リオン、座りなよ。立ったままじゃ、目立つぞ」  
テーブルの傍に立って居る冒険者は他にもたくさん居るので、立っているだけで、目立つはずが無いのだが、不思議に思いながらも、俺は、ギルバートに言われて、椅子に座って、正面を見た。ギルバートは俺の隣で、エドワードの正面、俺の正面はユーリだ。

「私は、ユリウス・スタイナー。見ての通り、魔術師よ。ユーリと呼んでね」

とにこやかな顔をして、ユーリが自己紹介をした。

「俺は、エドワード・ブライスだ。よろしく」

とエドワードが自己紹介をした。

「エドワードがリーダーだ」

とギルバートが説明してくれた。

「リオン・ウォートです。よろしくお願いします」

と俺は名乗って、頭を下げた。

「ねえ、リオンは何歳？」

とユーリが目を輝かせながら聞いてきた。

「16歳だよ」

今月の16日が誕生日だったので、16歳になった。

「あら、2つ下なのね。私は18よ、3人とも同じ、私達は幼馴染なの。それでも、初級魔術師の資格を持ってるのよ。王都の魔術学院に入学したのよ」

「それは、凄いですね」

「それほどでもないわ」

とユーリが嬉しそうに答えた。

「リオンは1人で、地下迷宮に潜ってたの？」

「そうですよ」

「どれぐらいまで、行ったの？」

「秘密です」

「あら、やるわね。そんな顔で秘密ですなんて言われたら、たまらないわ。隠す必要は無いじゃない、白状しなさいよ」

「俺も興味あるな。俺達よりも先に行ってることは確かだろう」

とギルバートも聞いてきた。こちらに来て、他人と交友を持たずに、地下迷宮にずっと籠っていたが、年頃の女性はおしゃべりであることを思い出して、なんだか楽しくなった。

久しぶりの会話が楽しくて、テンションが上がっているようだ。

しかし、正直に言っても、信じないだろうなあ。

「200よりも先だと言ったら、信じますか？」

「えー。嘘でしょう」

とユーリが驚いた声を出した。

「俺は、信じるぜ」

とギルが俺に同意した

「そうだな、嘘じゃなさそうだ」

とエドワードが重々しく同意した。まさか、信じるとは思っていなかったが、2人は、あっさりと信じたようだ。

「何で、2人とも、あっさりと信じるのよ。何か、信じられないわ」

「それより、パーティの登録をして、さっきの依頼を受けようぜ」

「依頼って？」

と思わず、聞き返した。依頼のことは何も聞いてない。

「そうか、依頼のことをリオンに話してなかったな、ユーリ、説明を頼むわ」

「しょうがないなあ。……えっと、依頼は、個人商人の護衛よ。行き先がバーモ。リオンはバーモのことを知ってる？」

アリスが、バーモの情報を伝えてきたが。

「さあ、よく知らない」

と俺は、答えた。

「バーモは、ワインの名産地で有名な街よ。ここから100kmぐらひは離れてるわ。大型の荷馬車で行くから、3泊4日の予定よ。途中、泊まる所がないから、野宿になるわ。教授にバーモでワインを購入するように頼まれているのよ。それで、バーモに行く隊商の護衛の依頼を探したら、個人商人の依頼を見つけたけど、4人以上のパーティって、条件が付いてるのよ。報酬は、全部で10クラシオン。相場で考えると、報酬は普通よ、だけど、出発が明日。朝の8時に交易所の待合所に集合することになってるわ。依頼主は、リッチモン・オーガスタ。スルモスタ商会所属の商人だけど、詳しいことは分からないわね。でも、スルモスタ商会は、王都ではそれなりに名前が売れた商会だから、大丈夫だと思うわ。分かっている情報はこれだけよ。ちょっと急かもしれないけど、大丈夫かな？」

アリスからの情報によれば、ここから南南西に118km。人口は約7000人の街、水が良いのか、ワインとビールの名産地として有名で、酪農も盛んらしい。名産物は、ワイン、ビール、チーズなどの乳酸品と名馬のようだ。特に150年から200年物の銘柄が付いたワインが有名らしく、1本でも、10クラシオン以上の値段が付く物があるらしい。

特に反対する理由は無いのだが、行ったとしても観光地では無いので、特に面白い物は無さそうだ。まあ、旅行に行く訳では無いのだから、仕方が無いだろう。

「そうだね、特に問題は無いよ」

「良かった。それじゃ、エドワード、リオンをパーティに登録して、

窓口で、依頼を受けてきてよ」

「分かった」

とエドワードが返事をする、腕輪を操作して、パーティへの勧誘メッセージを飛ばしてきた。俺も、腕輪を操作して、パーティ参加の承認を返した。

アリスがパーティ用の画面を表示し、仲間になった3人の一覧を表示した。リンクを展開すると、神聖協会に登録されている個人情報が表示された。

3人とも、腕輪を操作して、俺がパーティに参加したことを確認した。

「それじゃ、依頼を受けてくる」

とエドワードは立ち上がると、受付窓口の方に去って行った。

「そうだ、リオンも、教授の依頼を受けない？　ワインを王都まで運ぶ仕事なんだけど、1本で2クランになるわ。私達は6本ずつ運ぶことにしたから、12クランよ。」

エドワードとギルが以前に下宿していた雑貨店の主人の兄さんが、ワイン工場を経営してるそうなのよ。それで、雑貨店の主人の話では、紹介があれば6クラン以下で仕入れられるそうよ。

教授が1本8クランで買い取るって言っているから、6クランよりも安く仕入れれば、もっと儲かるわ。それに、バーモで王都に行く隊商の護衛の仕事を受けることもできるしね」

「教授って、誰なの？」

「王都の魔術学院の導師よ。私の師匠なんだけど、『私のことは、教授と呼びたまえ』って言うぐらいの変人よ」

「おい、自分の師匠を変人って言うのは、酷くないか？　まあ、確かに、変った人だけだよ。でもよ、マリアさんの友人だしよ。良い人だと思っぜ」

「勿論、良い人よ。そうじゃなかったら、弟子入りしないわよ」

「そうか、それならいいけど。兎に角、悪い話じゃないと思うよ。仕入れの資金は自分持ちだし、途中で割ったら、ばあになるけどな。」

6本ぐらいなら、何とかなるだろう。6本以上になると荷物になるから、きつい」

俺なら、アイテム画面に登録すれば良いので本数は問題じゃない。某ネコ型ロボットの4次元ポケットと同じ4次元ウエストバックがあるし、250階層の隠し宝物庫で手に入れた同じような機能があるリュックもある。

「それで、教授は何本まで買い取ると言ってるの？」

「赤白を1ダースずつとシャンパンを1ダース、シャンパンは2ダース欲しいと言ってるけど、12本も持てないから6本ずつで妥協して貰ったわ。教授が欲しがっているワインとシャンパンは、20年物のプレミアが付いたワインとシャンパンよ。オークションなら1本が15クラン以上で取引されているそうよ」

「4ダースで96クランの手数料なら、割りが良いね。護衛の仕事を受けなくても問題ないんじゃない？」

「おい、4ダースも仕入れる資金が無いし、運べないぞ、俺達は、商人じゃない」

「地下迷宮で、無限バックを手に入れたから、幾らでも運べるよ」

「うそー！ リオンは、無限バックを持っているの？」

とユーリが驚いた声を出した。

「あるよ」

と答えたが、ユーリの反応に驚いた。持っていることは言わない方が良かったかもしれない。

「なんだよ。無限バックって」

「知らないの？ 見た目は普通のリュックなんだけど、無限に物を入れられるマジックアイテムよ。どんなに入れても、重くならないし、しかも、バックの中は、別次元の空間になっているらしくて、時間も停止したままだそうよ」

「へえ、さすがユーリ、良く知ってるね」

「当然よ。私の専攻は考古学よ。マジックアイテムは必須科目だわ」  
「そう言えば、そうだったな」

「だけど、無限バックって、確か250階層で見つかる超レアアイテムで、見つけるのが、物凄く大変だったはず。確か、マリアさんに聞いたことがあるわ。ひょっとして、リオンは250階層をクリアしたの？」

驚いた。まさか250階層のアイテムであることまで知ってるとは、予想外だ。しかし、下手に誤魔化すのも問題だろう。

「信じられないかもしれないけど、昨日、250階層をクリアしたところなんだ」

「200以上とは聞いてたけどよ。まさか250とは、流石に、恐れ入ったぜ」

「何だか、呆れて物も言えないって感じね」

とユーリは呆れた顔をしたが、しかし、しっかりと物を言っていると思っていたら。

「しっかりと、物を言ってるじゃないか」

とギルバードがユーリに言った。

「何よ。物の例えでしょう。それより、運ぶ手段があるなら、4ダース仕入れたいわね。だけど、全部で288クランは大金だわ」

「金ならあるよ。教授が確実に買い取ってくれるなら、出しても良いよ」

と俺は、勢いで、提案してしまった。言ってから、しまったと思っただが、後の祭りだ。

「それなら、最低でも1人24クランの儲けになるわ」

とユーリの目がドルマークになりそうなほど、嬉しそうな顔をした。

「おい、そんな大金があるか、……って、そうか、ソロで250階層をクリアしたんなら、それぐらいは儲けてるか、ちえっ、羨ましいぜ」

「24クランもあれば、次の資格試験を受けられるわ」

「資格試験？」

「中級魔術師試験よ。9月と3月に試験があるの。9月は無理だけ

ど、次の3月の試験を受けるつもりなの」

「へえ、凄いですね」

「まあね。うふふ……。」

とユーリが満更でもないと言う笑顔で笑った。

「なあ、250階層のフロアボスって、どんな奴よ」

とギルバードが聞いた。

「そうだな、250階層のフロアボスは、ゴブリンキングとその護衛のゴブリンナイトが6体だった。ゴブリンキングは、身長が2m以上の巨体で、フルプレートにグレートソードで武装してたな、護衛のゴブリンナイトは……」

と俺が説明を始めると。

「お待たせ、依頼を受けたぞ」

とエドワードが戻って来て、ユーリの隣に座った。

「エドワード、聞いてよ。リオンが無限バックを持っているだって、それに、ワインの仕入れ資金も出すって言ってるの、だから、1人24クランの儲けよ」

エドワードが何を言ってるんだと言う顔をして、ユーリを見た。

「何のことか分からないよ」

「もう、なんで分からないのよ。えっと、無限バックって言うのは、名前の通り、無限に物を入れられるマジックアイテムなのよ。それで、教授から依頼されたワインの4ダースを運べるの！ しかも、購入資金の288クランをリオンが出せるそうなの、だから、教授が1本8クランで購入してくれるから96クランの儲けになるのよ、つまり、1人当たり24クランの儲けよ。分かった？」

「ああ、分かった。つまり、ワインの4ダースを運ぶ手段と資金をリオンが提供すると言うことだね。だけど、希望通りに4ダースも仕入れられるかどうか分からないから、あまり期待しない方がいいぞ」

「そうかもしれないけど、24クランも儲かると思ったら、ウキウキしてこない？」

「ユーリの言う通りだな」

とギルバートも嬉しそうな顔で答えた。

「おい、ギルもか！　しっかりしてくれよ。教授が言っているワインとシャンパンは、プレミアが付いた稀少品だぞ、大量に仕入れられるような代物じゃないだろう」

「もう、エドワードったら、ちょっとぐらい夢を見たって良いじゃない、それに4ダースぐらいなら、大丈夫よ。紹介してもらったワイン工場は、バーモでは1番古くて、歴史がある工場だし、規模も3番目よ。4ダースぐらい、楽勝よ」

「そうかもしれないけど、買えなかった場合も、考えろと言ってるだけだ。それより、場所を移して、昼にしよう。こんなところで、儲け話をするもんじゃないよ」

「おっと、確かに、エドの言う通りだ、軽率だったな」

と頭を掻きながらギルバートが同意した。

「もう、良いわ」

とユーリが拗ねた顔をした。

「リオン、一緒に昼を食べないか、仕事の打ち合わせもしたい」

「ええ、勿論です」

「それじゃ、行こう！」

とエドワードが号令を掛けると、全員で、冒険者ギルドから外に出た。



## 15話

エドワード達と昼飯を食べながら護衛の仕事について打ち合わせをしてから、旅の準備を整えるために分かれた。

エドワードに弓を用意するように言われたので、武器屋に行き、一番強力な弓を購入した。その後、商店街で保存食などを仕入れてから宿屋に戻った。

今朝は早めに起きて、1番で朝食を済ませてから旅立ちの準備を整えた。

見た目は普通の革鎧に丈夫なブーツ、旅の必需品一式を入れた無限バックと呼ばれるカーキ色のリュックを背中に担ぎ、ロングソードを腰に下げて、布の袋に入れた弓と矢筒を肩に掛けた。ウェストバックを腰に巻きつけ、戦闘用ナイフを腰に差して、準備完了だ。

武器と鎧は、2ヶ月程前に、この都市の普通の武器屋で購入してカスタマイズした物だ。品質は良いがありふれた素材で作られた武器と鎧なので、初心者冒険者にしか見えないはずだ。

昨日購入した弓もカスタマイズして、必要筋力を最大にしたので、普通の冒険者では弦を引くことができないだろう。武器と鎧には、強力な魔法を付与したが、魔力隠蔽処置も施してあるので、見ただけでは、魔法の品だとは分からないはずだ。

地下迷宮やフィールド上のダンジョン、および、古代遺跡で見つかるマジックアイテムには、強力な保護と修復の魔法が掛かっているのが普通だが、店で購入できる普通の素材の武器や鎧に強力な魔法が付与されているとは、誰も考えないはずだ。

宿屋を出て、迷宮都市の西側にある交易所の待合所へ向かった。7時40分に、待合所で集合することになっている。

護衛する荷馬車は個人商人として登録された大型の荷馬車が1台

だけ。普通、野獣や盗賊団の襲撃を恐れて、数台の荷馬車で隊商を組むのだが、今回の依頼は1台のみなので、その分、リスクが大きいいと言える。

バーモの街まで、3泊4日の旅程で、途中は野宿だ。護衛する側から見れば、最悪の条件と言える。エドワード達が冒険者ギルドで集めた情報によれば、盗賊団は出ないらしいが、バスクを好物とする森林オーガに襲われる可能性があるらしい。

バスクとは、地球の生物であるサイを大きくしたような獣で、草食の大人しい動物らしい。速く走ることは出来ないが、物凄い力持ちで、大型バスか10tトラックぐらいもある大型の荷馬車を1頭で引く事ができる。荷物を積んだ荷馬車は、下手をすると20tはくだらない重量になると思う。バスクの引く力は凄まじいのだろう。しかし、速度は、人間が歩くぐらい、つまり、6か7km/hしか出ない。よって、盗賊団や野獣に襲われたら逃げることは不可能だ。盗賊団にとっては、美味しい獲物なんだろうが、護衛する側としては、非常に厄介だと思う。途中で倒した野獣の報酬は護衛の物だし、途中の食料と食事の世話は、依頼主側で面倒を見ることになっているが、これで、報酬が1人2クランと50シルク。日本円にすれば、25万円の報酬が高いのか安いのか、良く分からないのだが、商人側から見れば100万の経費は痛いだろうと思う。

現代日本なら、10tトラックの輸送1回分が100万円なんて有り得ない。運消費が高くなれば、その分、商品の売り値に積み上げられてしまう。神聖協会が取り扱う産物を除くと、遠方の名産品は高価であることは容易に予想できることだ。

アリスの情報によると、護衛の死亡率の推定値は5%ぐらいになるらしい。護衛側の俺から見れば、命が掛かっていると思うと、報酬の25万は安いんじゃないかと思う。金儲けのためなら、地下迷宮に籠っていた方が遥かに儲かると思うのだが、普通の冒険者では、そうも行かないらしい。つまるところ、冒険者の生活も楽じゃないと言うことだろう。

交易所は、都市で商売する商人が売買する市場、神聖協会の施設、他の都市や街へ商品を運ぶ隊商の事務所兼待合所と倉庫に大型の荷馬車を駐車するための広い駐車場がある。俺達は、交易所の待合所で集合することになっている。

待合所は広いホールになっており、大勢の冒険者がひしめいていたが、パーティ参加している状態なので、マップ画面にエドワード達3人が緑色の点で表示されているので、すぐに見つけることが出来た。

ちなみに、神聖協会の腕輪には、マップを表示する機能はないし、ステータス画面もアイテム画面もない。マップ画面、ステータス画面、アイテム画面などは、アリスの機能だ。つまり、使えるのは俺だけのようだ。

「おはよう」

と3人に声を掛けると、3人とも俺の方へ振り向いた。

ギルバードは、昨日と同じ赤い分部鎧にロングソード、小ぶりの盾と弓を背中に担いでおり、エドワードも昨日と同じ茶色の部分鎧にギルバートと同じ武装だ。ユーリも昨日と同じ夏バージョンの魔女っ子のスタイル、そして、身長ぐらいの長さの魔術師の杖を持っている。長いブーツを履いているだけなので、年寄りの俺には、白い太股がまぶしい。

3人とも登山家が担ぐようなふくらんだリュックを足元に置いていた。ギルバードが一番背が高くて、182cmぐらい、エドワードが178cm、ユーリは170cmぐらい。俺は、エドワードと同じぐらいの身長だが、体格は比べ物にならないほど、俺の方が華奢だ。いや、エドワードの体格が良すぎるとも言える。決して、太っているのではない、鍛え上げられたいかにも戦士らしい体格だ。エドワードに比べれば、ギルバードも見劣りするが、どちらかと言うとギルバードの体格が冒険者としては普通なんだろう。

「リオン、おはよう。早いわね」、「リオン、おはよう」、「おう」

と三人三様に、挨拶を返してくれた。

ユーリが俺に近づいて、背中のリュックを触った。

「へえ、これが、無限バックかぁ、普通のリュックにしか見えないわね。それにしても、軽そうだわ。いいなぁ」

と小さい声で呟いた。

「それじゃ、依頼主のリッチモンさんを探すぞ」

とエドワードが言うと、足元のリュックを持ち上げて、待合所の係員らしい人に向かった。俺達は遅れないように、エドワードの後を追った。

昨日の話では、エドワード達の護衛の依頼は今回で9回目だそうだ。ギルドランクはCで、もう少しでBにランクアップできるらしい。

エドワードは、係員に依頼主のリッチモンのことを聞いたらしく、係員が指を指して、エドワードに答えていた。エドワードは、俺達に頷いて、さらに、移動した。

「おはようございます。貴方がリッチモンさんですか？」

とエドワードが、ウォルフ族と呼ばれる狼の頭をした獣人に声を掛けた。背格好はギルバートと同じぐらい。紺色に白色の模様が入った顔で、目は茶色。茶色の革鎧と両方の腰に短めの剣を差している。双剣を使うのだろう。

「ああ、俺がリッチモンだ」

「護衛の依頼を受けた、エドワード・ブライスです。そっちの3人が仲間です」

とエドワードは、リッチモンに説明すると、依頼票を差し出した。リッチモンは、依頼票を受け取って、目を通すと、依頼票をエドワードに返した。

「4人とも若いようだが、ランクCなら問題ないだろう。とにかく、依頼を受けて貰って助かったよ。昨日まで受け手が居なかったから、殆ど諦めてた」

「そうですか」

とエドワードが無難に返した。

「時間は早いが、俺達の荷馬車に移動しよう、準備は整っているから、早く出発できるに越したことは無い。御者も居るから、自己紹介は、荷馬車に行ってからしよう」

「分かりました」

とエドワードが4人を代表してリッチモンに頷いた。

リッチモンに連れられて、俺達は、待合所を出て、広い駐車場を早足で歩いた。ウォルフ族のリッチモンにすれば、普通の速さなんだろうが、ユーリは、ふうふうと息を吐きながら、膨れ上がったリユックを辛そうに運んでいた。

見かねた俺は、ユーリのリュックの片方を持って、ユーリの隣を歩いた。リュックは80kgぐらいはありそうだが、レベルを上げている冒険者なら普通に持てる重さのはずだ。ユーリは魔術師なので、筋力は低いのだろう。

それにしても、女性が持つ重さじゃないことは確かだ。しかし、どうしてこんなに重いのか気になるが、女性の荷物の内容を聞く訳には行かない。

「ありが、……とう。……リオン」

とユーリが、途切れ々に礼を言った。

リッチモンが、大型の荷馬車の御者台に近づいて、立ち止まった。

「これが、俺達の荷馬車だ、あいつが、御者のロンリだ」

「エルモ族のロンリだよ。よろしく」

と御者台に座っていた小人が挨拶をした。身長が120cmぐらいのエルモ族と呼ばれる小人族で、アライグマのような顔付きをしているが、獣人よりも、人間らしい顔をしている。手足は、大人並みの大きさ。アンバランスであるが、なんだか3頭身か4頭身のぬいぐるみのようで、とても愛嬌がある種族だ。

「俺は、パーティリーダーのエドワード・ブライスだ。よろしく」

「俺はギルバート・ソルダイン。ギルと呼んでくれ」

「私は、ユリウス・スタイナー。ユーリと呼んで」

「僕は、リオン・ウォーとです。よろしく願います」

と俺達は順番に自己紹介をした。

「すぐに出発しても良いか？」

とリッチモンがエドワードに聞いた。

「分かりました。それじゃ、荷物を荷台に置いて、最初の見張りは、俺とユーリ。ギルとリオンは、荷台に乗ってくれ」

「待って、エドワードとギルで見張り台に上がって頂戴。私はリオンと組むわ」

とユーリがエドワードに言った。エドワードは一瞬、ユーリの顔を見ると。

「分かった。それじゃ、ギル、荷物を置いて、見張り台に上がるぞ」と返事をする、ギルと一緒に、荷台の後ろに向かった。俺は、ユーリのリュックの片方を掴んでいた、そのまま、ユーリに連れられて、荷台の後ろへ移動した。

俺とユーリが、荷台に乗り込むと。

「エドワード、2人とも乗り込んだわよ」

とユーリがパーティ間通話機能を使って、エドワードに連絡した。「了解」

とエドワードが答えた。そして、数分後に、荷馬車がゆっくりと動き出した。

荷馬車の壁板には窓がないので、荷馬車の後ろの景色しか見えない。まだ、迷宮都市から出ていないので、見慣れた街並みの景色が見えるだけだ。

この時代の荷馬車は酷く揺れるだろうと覚悟していたが、荷馬車の速度が遅いためか、意外と揺れが少ない。慣れれば、本を読むことも、居眠りをすることもできそうだ。

座席は無いが、代わりに、つぶれたクッションが幾つか置かれていたので、俺は、背中と尻の下にクッションを当てた。

「リオンは、16歳よね。地下迷宮の攻略は、いつから始めたの？」  
と俺と同じように、クッションの上に座ったユーリが聞いた。俺の近くで、木箱を背中に座っている。荷馬車の中は広いので、態々、近くに座らなくても、場所は十分にあるのだが、何故か、ユーリは俺の傍に座り込んだ。

「初めて地下迷宮に入ったのは、4月2日だった」  
「今年の？」

「うん」

「それじゃあ、まだ、4ヶ月も経ってないじゃない、それで、250階層って、信じられないわ」  
とユーリが呆れた顔をした。

「そうだね」

と俺も同意した。確かに、4ヶ月で攻略できる階数じゃない。1ヶ月が35日なので、4ヶ月で140日。1日で平均2階層以上を攻略したことになる。

さてよ。これって、呆れた顔ですますような数値じゃないような、それ以前に信じること自体、無理な数値じゃないだろうか？

「私達は、1年前の4月からよ。1年と4ヶ月になるわね。それで、174階層を攻略したところよ」

とユーリが話を続けた。

「ああ、174階層を攻略したとギルバードに聞いたことがある」  
と俺は考えるのをやめて、ユーリの話に合わせた。

「そういえば、ギルバードが箸の正しい使い方を教えてもらったって、嬉しそうに言ってたわ。何処で、箸の使い方を覚えたの？」

「師匠だよ。王都から40kmぐらい離れた山奥で暮らしてた。3月に師匠が死んだから、迷宮都市に出てきたんだ。師匠に、迷宮都市で冒険者になれて、言われたからね」

「そうなんだ。それで、両親は？」

「両親は知らないよ。山に捨てられてたらしいよ。3歳ぐらいだったと師匠が言ってたけど。山をうろついてたところを拾ったと師

匠が言ってたよ」

「そうか、私達と同じね。私達も孤児よ。3人は、マリアさんに拾われて育てられたわ。なんだから、リオンの師匠って、私達のマリアさんと同じみたいだわ」

「そうなんだ」

「私は、魔術師の才能があるからと、魔術学院に入れてもらったし、私達は、とても幸運だったと思うわ」

「3人は血のつながりは無いよね。全然、似てないし」

「ええ、そうよ。でも、兄弟と同じよ。一緒に育った仲だもの」

「ふーん。そうなんだ」

ユーリは、エドワードとギルバートのこと、マリアのことや教授と魔術学院のことを色々と教えてくれた。

10時ごろに、荷馬車が止まり、バスクを休ませるために、30分の休憩となった。

俺とユーリは、エドワードとギルバートと交代して、見張り台に上がった。

見張り中は、ユーリは話しかけて来なかった。見張りは重要な仕事だと認識しているのだろう。見張り台から見る景色は、とても素晴らしいのだが、荷馬車の移動速度が遅いので、景色にまったく変化がなく、すぐに飽きてしまった。

俺は、油断なく見張っているかのように見せかけて、ライブラリから読みかけの本を開いた。何か異常があれば、アリスが警告してくれる。

昼飯の時間になると、荷馬車は、道を外れて止まり、昼飯にサンドイッチが配られた。バスクにも水とえさが与えられ、1時間の休憩が取られた。

エドワードとギルバートが見張りを交代して、俺とユーリは荷台の後ろに乗り込んだ。ユーリは、分厚い本を取り出して読み始めたが、すぐに、頭がこっくりと船を漕ぎ出した。



俺は、ユーリを起こさないように、静かに、本の続きを読んだ。

荷馬車が道を外れ、開けた場所で止まった。

西の空が真っ赤に染まっている。じきに太陽が沈むだろう。

「綺麗な夕日ね」

振り向くと、夕焼けに染まったユーリが徐々に沈んでいく太陽を見つめていた。ユーリは、元々美人なんだが、赤く染まった光の加減が絶妙で、今の姿は絶世の美女に見える。俺は今のシーンを記憶に焼き付けてから。

「そうだね。でも、エドワードのところに行かないと、叱られるよ」と俺は、答えた。

「そうね、残念だけど、行きましょう」

と俺に笑顔を向けて言うのと、見張り台から身軽に下へ降りて行った。

俺も、ユーリに続いて、下に降りた。御者台の傍にリッチモン、ロンリ、エドワード、ギルバートが集まっていた。

「リッチモンさんとロンリさんが、野営の準備をするそうだ。俺達は、森に入って、焚き木を集めるぞ」

とエドワードが俺達に命令した。「分かった」と三人三様に返事をして、4人一緒に森に向かった。

森の奥に入らなくても、すぐに、一抱え分の焚き木が集まった。

4人で、集合場所に戻ると、ブロックで作られたかまどの横で、ロンリが野菜を刻んで、鍋に入れていた。

エドワードがかまどの近くに、焚き木を置いたので、俺達3人も順に、その上に焚き木を積み上げた。

「あー。誰か、かまどに火を着けてくれないか？」

と俺達に気づいたロンリが頼んできた。エドワードが慣れた手つきで、焚き木をかまどに入れ、すぐに火を起こした。

「凄いね。あっという間に火がついた」

と俺が感心して言う。

「まあな」

と満更でもない顔で、エドワードが答えた。

「昔からエドワードが火付け役だったわね」

とユーリが嬉しそうに言った。俺はユーリの言葉だけだと、誤解されそうなセルフだなあと考えた。エドワードがかまどから離れると、ロンリが鍋をかまどの上に置いた。なんだか、ぬいぐるみが動いているような愛らしさがある。

「ありがとう。これなら、早く出来そうだ。楽しみにしててね」

とロンリも笑い顔で答えた。ロンリが料理を作る様子を見ていると。

「おーい。暇なら、こっちを手伝ってくれないか」

とリッチモンの声が聞こえた。

リッチモンは、屋根だけの大きなテントを組み立てようとしている所だった。運動会やお祭りなどで、来客用に張られるテントと同じようなテントだ。俺達はリッチモンの指示で、手早くテントを組み立てた。

テントが組みあがると、ユーリが魔術師の杖で、地面に魔方陣を描き始めた。物理的な進入阻害と認識阻害の機能を持つ魔方陣のようだ。ユーリは真剣な顔つきで、魔術師の杖に魔力を通しながら、魔力で魔方陣を描いた。

魔力量から判断すると、明日の朝まで、十分に持ちそうな感じだ。長時間、発動させる魔方陣なら、魔力を通し易い触媒を使って、魔法陣を描くのだが、野営のための魔方陣なので、朝まで持てば良いのだろう。

魔力のみで、魔法陣を描けるのは、中級魔術師からだと思う。ユーリは初級魔術師だと聞いていたが、実力的には中級魔術師の力があるようだ。

「エドワード、魔方陣が出来たわよ」

と魔方陣を描き終わると、ユーリがエドワードに伝えた。

「了解。それじゃあ、焚き木を集めに行こう」

とエドワードの指示で、再び、4人で、森に入り、焚き木を補充した。

「これだけあれば、十分だ。ユーリ、魔法を発動してくれ」

とエドワードがユーリに指示すると、ユーリは、「分かったわ」と返事をして、魔力を魔方阵に注いだ。魔方阵が魔力で輝き出して、半径10mぐらいの魔法のバリアが形成された。ドラゴンのような強力な魔獣なら簡単に破ってしまうだろうが、この辺りに出現する普通の魔獣なら、このバリアで十分に持つだろう。

俺達は、焚き火を囲んで、ロンリが作った夕食を食べた。まあ、味の方はあまり褒められないレベルだったが、プロの料理人じゃないのだから、食べられるレベルで十分だ。

リッチモンが安物のワインを提供してくれたので、みんなで飲んだから、毛布に包まって、テントの屋根の下に転がって眠った。

魔法のバリアがあるので、見張りの必要はないそうだ。

何かあればアリスが覚醒して警告してくれるから、俺は大丈夫なんだが、本当に全員で寝て良いのだろうかと物凄く疑問に思ったが、リッチモンも大丈夫だと言っていたので、大丈夫なんだろうと思う。リッチモンは運送のプロだ。俺はプロの意見に対しては素直に従うことにしている。

ギルバート達と出会ってから、まだ2日しか経っていない。なんだか、随分前から知り合いだったような不思議な感じがする。それは、この2日間がとても濃い2日だったと言えるのだろう。考えてみれば、この世界に来て、まだ4ヶ月しか経っていないし、しかも、ずっと地下迷宮に籠り切りだった。

なんだか、大きな流れに乗って、流されているような、そんな運命的な何かを思わせるのだが、不思議と嫌ではなかった。今の状態が普通なんだと何の根拠も無しに思えるし、いや、何かとんでもないどんでん返しが待っているに違いないと言う不安も感じる。

この世界に来た時、俺は平凡なサラリーマンだから、平穩無事に

暮らしたいと考えていたのだが、はっきり言って、今は、とても楽しいと思っている。良く聞く話だけど、人は1人では生きていけない生物なんだそうだと。

まあ、ただの言い訳であって、俺は皆に流されているだけなんだと思う。そう考えると、俺って、日本人なんだなあと思得してしまった。

他の者達は、とっくに、寝てしまったようで、起きているのは俺だけ。屋根しかないテントの端に寝転がっているの、見上げると満天の星空が見える。これほど素晴らしい星空は、日本では、見ることは難しいだろう。人間は大自然の一部なんだと素直に納得できてしまう。大自然の物凄く雄大なエネルギーを感じて、人間とは、なんてちっぽけな存在なんだろうかと感傷に浸った。

しばらくぼうとしながら、星空を眺めてたが、俺は、アリスに命令して、寝ることにした。

## お知らせ（再開します）

読者様の皆様には、ご迷惑をお掛けして、大変申し訳ありません。  
続きを読みたいとの読者様の希望がありましたので 再開することになりました。

幸い、書き溜めた分がありますので、暫くは、同時進行も可能だろうと判断しました。

最初に注意事項を記します。

「神様からもらった遺産は異世界でした」はリメイク版ですので、「騎士王物語」の書き溜めた分も流用することを考えています。

このため、「神様がもらった遺産は異世界でした」と「騎士王物語」は、お互いにネタバレを含むことになります。

小説を純粋に楽しむのであれば、どちらか片方は、完結するまで読まない方が良いかと思いますが、申し訳ありませんが、完結するのは、かなり先のことになるかと思えます。

私なら、とても我慢できなくて、両方とも読んでしまうだろうと思いますし、どのような読み方をするのかは、読者様の自由ですが、一応、片方のみ絞った方が楽しめるでしょうと、お勧めしておきます。

経緯を知らない読者様もいるかと思えますので、リメイク版の経緯を箇条書きで示します。

- ・「騎士王物語」が「白騎士物語」に似ているとの指摘があった。
- ・ 作者は、「白騎士物語」に影響を受けていたことを認め、リメイクすることを決意。
- ・ 「騎士王物語」を「白騎士物語」の二次創作の作品に小説情報を変更。

・「神様からもらった遺産は異世界でした」をオリジナル版として、新規に作成

原稿の投稿は、「神様からもらった遺産は異世界でした」に合わせるようにしますので、更新は遅くなるかと思いますが、ご了承をお願いします。

最後に、感想、ご指摘、ご意見、励ましの言葉などを頂きまして、ありがとうございます。

今後も、よろしくお願いします。

以上。

## 16話

翌朝、日の出と共に起きた俺達は、早々に朝食を済ませて出発した。

今日の組み合わせは、俺とギルバート、そして、エドワードとユーリだ。最初は俺とギルバートが荷台に乗って、エドワードとユーリが見張り台に登った。

荷馬車が動き出すと、ギルバートが話しかけてきた。

「そう言えば、250階層のフロアボスって、どんな奴だった。まだ、聞いてないよな」

「えっと、話してなかった？」

「聞いてない。どんな奴か教えろよ」

「えっと……、250階層のフロアボスは、ゴブリンキングとその護衛のゴブリンナイトが6体だった。ゴブリンキングは身長が2m50cmぐらいの巨体で、フルプレートにグレートソードで武装してたよ、護衛のゴブリンナイトはフルプレートとロングソードに盾だったよ」

「2m50cmか、でけえなあ、それに護衛が6匹。流石にきつそうだな」

「えっと、そうかも」

「簡単に言うねえ、それで、どうやって、倒したんだ？」

ギルバードが期待に目を輝かせながら聞いた。

「護衛6匹の首を順番に刎ねて、そのままゴブリンキングに突っ込んで、正面から剣を振り下ろして倒したよ」

「なんだよ。もうちょつと詳しく話せよ。それじゃあ、省略しすぎだろうが」

省略した訳じゃないし、もっと詳しくと言われても困るなあ……。まさか、4倍に加速してなんて、言わない方が良さそうし。

「えっと、……。ごめん。あんまり覚えてないや」

目を輝かせて聞いていたギルバートが、俺の答えを聞いた瞬間、ガクッと肩を落とした。

「おい、リオン。そんな説明があるか！　こう言うのは、もっと、手に汗を握る感じで、話すもんだぞ、例えば、2匹のゴブリンナイトが同時に剣を振ってきたけどよ。俺は、そのちょうど真ん中をヒラリとかい潜って、背後から一刀両断にした。とかさあ」

「へえ、旨いもんだね」

「何言ってるんだよ。冒険者なら当然だろうが、そんなことじゃ、女の子にモテねえぞ」

俺の返事を聞いたギルバートが呆れた顔をして言った。

60にもなって、今更、女の子にモテたいなんて思わないが、そう言えば、リオンは16歳の体だった。16歳なら性欲があるのが普通だし、朝立ちだって、……。あれっ、朝立ちしてねえな。リオンって、ひょっとして不能か？

アリスから応答があった。意図的に性欲を抑えているそうだ。

……。……。まあ、いつか。今更、やりたいとも思わんし、女の子を口説くなんて面倒だし、と言うか俺には無理だ。伊達に今まで独身だった訳じゃない。却って都合が良いかもしれない。

「そう言えば、ギルバート達は174階層まで行ったんだろう、174階層のボスは、どうだったんだ？」

俺は話題を変えることにした。

「174階層のボスはまだだぜ。250階層を突破したりオンに言われたら、嫌味に聞こえるぞ」

ギルバートが嫌な顔をして答えた。

「ああ、ごめん。そんなつもりじゃなかったんだ。えっと、パーティを組んだことがないから、パーティで攻略すると、どうなるのかあって思ってた。教えてよ」

「まあ、そこまで言うなら、話してもいいけどよ。そうだなあ、170階層のボスが強敵だったから、170階層のボスを倒した話を



してやる」

ギルバートは、一旦、話を止めて、思い出そうとした。

「……………リオンは知ってるだろうけど、170階層のボスは、地獄の門番と呼ばれている双頭のケルベロスだった。俺たち3人はケルベロスの洞穴の前にいた30匹のヘルハウンドの群れをやつとの思いで倒したんだ。それで、そこでちょっと休んでから洞穴の中に入った。俺が先頭で、2番目がユーリ、3番目がエドワードだ。

曲がり角でそっと覗いてたら、奴は洞穴の一番奥の広い場所で、佇んでた。最初は寝てるのかと思ったけどよ。よく見たら、一番手前の頭が薄目で見てやがった。

俺は、そっと引き返して、2人に様子を話して、どうするか相談した。結局、ユーリが耐熱保護バリアを全員に掛けて、俺とエドワードで突っ込むことになった。

リオンは知ってるだろうけど、ケルベロスは炎のブレスを吐くから、その対策よ。

ユーリは入口のところで、魔法で攻撃することになった。俺はエドワードの掛け声で、ケルベロスに向かって走った。すぐ後ろにエドワードが走ってた。俺達に気付いたケルベロスは立ち上がった、全長が5mか6mはあったな。

後ろからユーリの魔法が飛んできて、ケルベロスの片方の頭に当たった。俺は、飛び上がって、魔法が当たった頭にロングソードを振り下ろした。確か、エドワードは右に回って、奴のわき腹にロングソードを突き刺そうとしたな、俺はちゃんと横目で見てたよ。

奴の頭は固かったぜ、ロングソードで切り裂いたけど、ほんの表面だけでよ。骨で止まっちゃった。奴が頭を振って、俺を弾き飛ばした後に、どえらい声で咆哮しやがった。

その声の大きさといったら、とんでもなかったぜ、俺は思わずびびっちゃったけど、奴がエドワードに火を吐いたのが見えてよ。俺は慌てて立ち上がったぜ、……………」

ギルバードは身振りを交えて熱く語った。手に汗を握る迫力満点

の話し振りだった。ギルバートとエドワードは、何回もケルベロスにブレスを吐かれ、何回も弾き飛ばされたけど、2人とも不屈の根性で立ち上がって、ケルベロスに向かったそうだ。少なくとも2回以上は死んだんじゃないかと思ったが、その点は突っ込まなかった。

朝の休憩時間の後、エドワードとユーリに見張りを交代して見張り台に上がった。

俺とギルバートは背中合わせで見張り台に立って、周りを警戒した。

街道は、大きな森を迂回するように、森に沿って延びており、俺達に荷馬車は、森の横を進んだ。

1時間ほど進んだ頃、アリスから警告と情報が送られてきた。マップ画面で確認すると、森の中に、幾つもの赤い点が隊商の行く手を塞ぐように、動いていた。

赤い点は、約36個。隊商の列に併せて、縦に長く展開して、迫ってきている。吹き出しが現れて、森林狼、そして、森林オーガと表示された。森林オーガは3匹だ。

森林オーガは、身長が5mぐらいの人食い鬼で、バスクが好物だ。勿論、人間も好んで食べる魔獣で、明らかに荷馬車を狙っている。

「左側の森の中に魔獣が36匹、3匹が森林オーガで、残りは森林狼。こっちを包囲しながら、近づいている」

俺はパーティ間通信機能で皆に報告した。

「距離は、分かるか？」

エドワードが聞いた

「60mぐらいだ」

「ギル、リッチモンさんに、荷馬車を右に移動させて、森から離れてから停止するように頼んでくれ」

「分かった」

ギルバートはエドワードに答えると、リッチモンにエドワードの命令を伝えた。荷馬車はすぐに、街道を右に逸れてから止まった。

森まで30mぐらいだ。

荷馬車が街道を逸れた時に、布袋から弓を取り出して、弓に弦を張った。見張り台に設置されている矢筒から矢を取り出して構えた。エドワードとユーリが、荷台から出てきて、バスクの方へ移動した。リッチモンも2本の剣を両手に持って、バスクを守る位置へ移動した。

「ギルとリオンは弓で狼の数を減らしてくれ、俺とユーリでバスクを守る」

ギルバートはとくに、弓を構えていた。俺とギルバートはエドワードに「了解」と返した。

マップ画面で確認しながら、森から出てきそうな森林狼に弓を向けた。

「来るぞ」

俺は叫ぶと、森林狼達が森から飛び出してきた先頭の森林狼に狙いを定めて矢を放ち、すぐに、次の矢を構えた。

俺が放った矢は、狙い通りに森林狼の眉間に矢が突き刺さったが、その寸前に、次の森林狼を狙って矢を放っていた。

ギルバートも近くの森林狼に矢を放っていたが、距離がありすぎるのか、森林狼の脇を掠めて消えて行った。

「リオン、お前、凄えな！」

ギルバートが叫んだ。

弓のスキルの熟練度は1000もあるし、力は人外のレベルだ。

ギルバートの矢と比べると、そのスピードは桁違いだし、ギルバートが驚くのは無理はないだろう。俺も驚いた。

森林狼の数が多いので、俺はギルバートに返事をせずに、次々と矢を放った。

ギルバートが2匹の森林狼を倒した頃には、俺は10匹の森林狼を仕留めていた。

しかし、それでも5匹の森林狼がバスクに近づいていたが、待ち構えていたユーリが魔弾で2匹を倒し、エドワードが2匹を素早

く切り裂き、リッチモンが1匹の森林狼を仕留めた。

森林狼の先陣を仕留めた頃に、3匹のオーガが森の境界線に差し掛かった。

森林オーガは、巨体である故に頑丈でしぶとく、そして、必ず複数で現れ、かつ、数十匹の森林狼を従えていることから、冒険者ギルドはランクBに認定している。森林狼は雑魚だし、森林オーガは弱点の水属性で心臓を撃ち抜けば、一撃で倒せるので、それ程強敵でもないのだが、何せ数が多いのでやっかいだ。

4倍に加速すれば、バスクに近づく前に全てを倒せる自信があるのだが、あまり人間離れた動きは見せない方が良さだろう。エドワード達は174階層を突破する程の実力者なので加速を使わなくても大丈夫だろう。

「3匹のオーガが森から出てくるぞ」

俺が叫ぶと、十数匹の森林狼を従えたオーガが森から姿を現した。隣でギルバートが懸命に矢を撃っているのだが、半分ぐらいしか当たっていない。

「ギル、俺はここで矢を撃っているから、エドワードの応援に行ってくれ、オーガ3匹はきついよ」

「確かに、そうだな」

ギルバートは返事をする、見張り台から飛び降りてバスクの方へ向かった。

最低でも1匹のオーガを倒さないとエドワード達には辛いだろう。出来れば2匹を片付けたい。

木製の矢に魔闘気を通わせるのは非常に効率が悪いが、矢に水属性の魔闘気を纏わせて弱点の心臓を撃ち抜けば、一撃で倒せるはずだ。しかし、矢に魔闘気を纏わせるのに時間が掛かってしまう。

6匹か7匹の森林狼がバスクに襲い掛かりそうだが、エドワードとギルバート、そして、リッチモンの3人で何とかするだろう。

ユーリは森林オーガの弱点を知っているようだが、魔弾の威力が

不足している。先頭の森林オーガに当たった魔弾は、当たった瞬間に弾けている。凝縮して貫通力を高めた水属性魔弾なら、一発で倒せるのだが、ユーリは魔弾を凝縮することが出来ないらしいが、ユーリの攻撃は森林オーガに十分なダメージを与えているようだ。

俺はエドワード達の様子を横目で見ながら、矢に水属性の魔闘気を纏わせた。

十分に魔闘気が溜まってから、2番目のオーガの心臓を狙って矢を放った。狙い通りに心臓を撃ち抜くと、予想通り、一撃でオーガが倒れた。そして、すぐに、次の矢を準備した。

ユーリが攻撃していたオーガにギルバートが突っ込んで行った。バスクに襲い掛かった森林狼はエドワードとリッチモンが、始末している。

数秒掛かって水属性の魔闘気を纏わせた矢を3番目の森林オーガに撃ち込むと、2番目と同様に倒れた。

ユーリの攻撃で、1番目の森林オーガが膝を突いた。随分と弱っているようだ。

ギルバートが膝を突いた森林オーガに飛び掛って行った。そして、森林狼を倒したエドワードが森林オーガに向かって駆け出したが、エドワードが森林オーガに辿り着く頃に、森林オーガがゆっくりと倒れた。

俺は、見張り台から飛び降りて、エドワード達のところへ移動した。

ユーリは魔力をかなり消費した様子で、リッチモンドとエドワードも、肩で息をしているようだ。ギルバートはオーガの近くで仰向けに転がっていた。

「怪我をしている者はいなか？ 魔法薬があるぞ」

と俺が聞くと、3人から大丈夫だと返事があった。バスクは大人しくしているし、ロンリがバスクの様子を調べているが、バスクも怪我が無いようだ。

パーティ共有の魔獣バックに森林オーガと森林狼のドロップ品が残ったが、倒した魔獣は地下迷宮と同様に姿を消した。

5分ぐらいするとギルバートが立ち上がり、エドワードに向かって移動した。そして、何時の間にか、エドワードの近くに全員が集まった。

「バスクに怪我は無かったよ。いつでも、出発できる」

ロンリが嬉しそうに報告した。

「若いから期待してなかったが、予想外だ。正直、駄目だと思ったよ。ほんとに、助かったよ、ありがとう」

リッチモンが俺達を褒めてくれた。

「リオンの弓は凄かったな、エルフでも、真っ青だぜ」

ギルバートが俺の肩を叩きながら言った。

「ほんとうに凄かったわ、目で追えない位、速かったわね。全然、見えなかったわ」

「森林オーガを一撃で倒しただろう。どうやったんだ？」

エドワードが聞いた。

「あれは、水属性の魔闘気だわ。森林オーガの弱点は、水属性だもの。水属性の魔力が飛んで行ったのを感じたわよ」

俺の代わりにユーリがエドワードに答えた。まずい。森林オーガを倒すのに夢中で、魔闘気のことを考えていなかった。

「ほう、リオンは魔闘気の使い手なのか？ 迷宮都市でも、数人しか使えないと聞いたぞ」

リッチモンが感心した声で言った。

「そうか、リオンの強さの秘密は魔闘気か。なるほどなあ」

ギルバートが呆れた顔で俺を見た。俺は注目の的になっているようだ、吃驚した顔はされなかった。魔闘気は魔法の分類に入るが、魔術師ではなく、戦士の技とされている。体内の魔力を循環させて肉体を強化したり、防具や武器に纏わせて防具や武器を強化することが出来る。つまり、お猿の宇宙人のスーパーなんたらが言っている気と同じような物だ。

注目はされたけど、それほど騒がれなかったので少し安心した。

「それより、矢を回収して、出発しませんか？」

話題を変えるために提案した。

「そうだな、それじゃ、矢を回収しよう」

エドワードの号令で、俺達は全員で矢を回収しに行った。

回収した矢の半分は使い物にならなかった。矢は少しでも曲がってしまおうと使い物にならない。俺達は矢を回収してすぐに出発した。

## 17話

その後、バーモの街の近くまで、何も起こらなかった。そして、バーモの直前、最後の昼食後の休憩時間に、リッチモンから提案があった。俺達は何事かとリッチモンに注目した。

「あと2時間でバーモに到着するが、俺達の荷馬車は明日の1日でワインを積んで、その翌日に、王都に向かう隊商に加わる予定だ。王都に向かう隊商は俺達の荷馬車を入れて4台になる。今回と同様に、3泊4日で王都に行く予定だ。俺達の商会はスルモスタ商会、王都で3番目の規模の商会だから、君達も名前ぐらいは聞いたことがあるだろう。」

俺達の商会から連絡があって、3台分の護衛は集まったそうだが、俺達の荷馬車の護衛の依頼を受ける冒険者が見つかっていないらしい。

そこで、出来たら王都への護衛の依頼を君たちに受けて欲しい。報酬は商会の規程で決まってるのだが、指名依頼にすれば15クランになる。それに、受けてもらえるのなら、バーモでの宿代は商会側で負担する。ただし、宿屋の指定があるからその中から選んでもらうことになる。

「どうかな、考えてもらえないか？」

俺達4人はお互いの顔を見た。教授に依頼されたワインを王都に運ぶ必要があるので、俺達にとっては都合が良い話だ。しかも、指名依頼なら従来の依頼の2割増しの料金になっているはずだ。

「ねえ、エドワード。どうせ、王都に行く予定だったから、都合が良いんじゃない？」

ユーリがエドワードの顔色を伺いながら聞いた。ギルバードはにやついた顔をしているが、エドワードはいかにも考え込んだような



重々しい顔つきをしている。

3人の性格は今回の護衛の旅で、かなり把握したと思う。エドワードの顔つきは演技で、内心ではしてやったりと思っているはずだ。そして、ギルバートはそんなエドワードを見て、笑いたいのを我慢しているのだろう。

ユーリは演技でも何でも無い、単なる天然だ。俺はクライアントとの交渉時のように、何食わぬ顔で見っていた。

たぶん、リッチモンには、それなりのプレッシャーが掛かっているだろうと思う。ロンリはあからさまに不安そうな顔でエドワードを見ている。

「リオンはどう思う？」

エドワードが俺に聞いてきた。エドワードの様子を見ると、特に値上げの交渉をするつもりは無いようだ。

それに、リッチモンも商会の規程があると言っているし、リッチモンが可能な限り好条件を提示しているらしいので、値上げ交渉は無理だと考えた方が良さだろう。

しかし、商売人なら、最初に提示する金額は標準の報酬額、たぶん12クランぐらいだと思うが、12クランと提示すべきだろう。勿論、昨日の魔獣の襲撃退治に対するお礼の気持ちが多分に入っているのだろう。

しかし、商売人としては人が良すぎる。顧客からは感謝されても、きつと、出世はしないタイプだ。

「そうだね、リッチモンさんは、最良の条件を提示しているみたいだから、受けても良いんじゃないの？」

俺はエドワードに答えた。暗に値上げ交渉は無駄だと言う意味を込めた。

「ギルバートはどうだ？」

今度はギルバートに聞いた。

「俺はエドワードが決めたことに従うよ。リーダはお前だからな」  
ギルバートは真面目な顔でエドワードに答えた。口元が引きつっ

ているのを見ると、笑いたいのを我慢しているようだ。

「分かった。それじゃ、その依頼を受けるよ」

エドワードはリッチモンに重々しく答えた。まだ、18歳のはずだが、営業マンとして十分にやっていけそうだ。

「そうか、それは助かったよ。それじゃ、商会に連絡を入れる。今日中に依頼を申請しておくから、明日中に受けてくれ。バーモに着いたら宿屋の支払い手形を渡すよ」

リッチモンがほっとした顔で答えた。

その後、休憩時間が終わると、俺達はバーモに向けて出発した。

交易所の駐車場に荷馬車を止めて、5人で事務所を兼用している待合所に入った。ロンリは、バスクの世話のために、荷馬車に残った。

待合所の事務所で、リッチモンが今回の依頼票にサインし、約束通り宿屋の支払い手形を渡してくれた。そして、手形を使える宿屋とリッチモンのお勧めの宿屋を教えてくれた。

俺達は膨れ上がったリュックを担いで待合所を出てリッチモンに教えられた宿屋に向かった。

何故か、俺の背中には、ユーリのリュックが乗っており、俺の無限バックがユーリの背中に担がれていた。勿論、無限バックは俺用に調整してあるので、ユーリは、無限バックを開けることはできない。

宿屋で、リーダーのエドワードが部屋の交渉をした。エドワードは普通に4人部屋を頼んだ。

「ちょっと待って！ ユーリが居るのに4人部屋なの？」

俺は思わず、エドワードに声を掛けたが、3人ともきょとんとした顔で俺を見た。

「リオン、何言っているのか、意味が分からないわ」

ユーリが不思議そうな顔をして俺に聞いた。

「何って、ユーリと俺達と同じ部屋で良いのかと聞いているんだよ。」

男女が同じ部屋って、不味いだろう」

「何言ってるのよ、今まで、一緒に寝てたじゃない、私達3人はいつも同じ部屋に泊まってるわよ。リオンが増えたって同じじゃない。それとも、私達と一緒にじゃあ、リオンは嫌なの？」

ユーリが呆れた顔をして俺に答えた。この世界の貞操観念は日本とは違うらしい。男女が同じ部屋で寝ることは、普通の当たり前のことなんだろうか？

「いや、ユーリが良いと言うなら、俺は反対しないけど」

1人だけ騒いでいるようで気まずく思いながら俺が答えると、エドワードは何事もなかったかのように、宿屋の主人との会話を続行した。なんだか理不尽な気がするのは、俺だけだろうか？

俺達は何事もなかったかのように部屋に入り、そして、宿屋の風呂に行って旅の汚れを落とした。ひよっとしたら混浴かもしれないと、どきどきしたが、ちゃんと男女別になっていた。そして、宿屋の食堂に行き、依頼達成の乾杯を上げることになった。

ちなみに、報酬に関しては、エドワードが預かることになり、王都に戻るまでの経費をエドワードが一括して払い、王都に戻った時点で、教授からの報酬も含めて精算してから、4等分することになっている。

「乾杯！」

とビールの大ジョッキを持ち上げたエドワードが音頭を取ると、俺達3人は声を揃えて「乾杯！」と答え、ジョッキをぶつけ合ってから、ビールを飲んだ。

「ぷはーっ、こいつはうめえぜ」

ギルバートが親父臭い感想を言った。確かに、迷宮都市のビールよりも、このビールの方が旨い。さすがは、ワインとビールの名産地と言われるだけのことがある。

「折角だから、ビールを飲んだら、ワインも頼みましょう」

ユーリが提案したので、すかさず「賛成」と俺は言っておいた。どうやら、俺は飲んべえになってしまったようだ。

以前の俺からすれば、とても考えられない。あんな不味い物を飲みたいのか全く理解できないと公言していた昔の俺のことが、まるで別人のように思える。

皆、腹が減っているらしく、最初は殆ど会話なしで、ビールを飲みながら定食を食べた。そして、定食を食べ終えた頃を見計らって、エドワードが追加の料理とワインを注文した。

「ユーリ、依頼の相場はどうだった？」

エドワードがユーリに聞いた。

「王都への護衛依頼の報酬は10クランから12クランってところね。リッチモンさんの提案は物凄く好条件だったわ」

「そうか、リオンが言ってた通りだな。それに日程も都合が良い」

「そうね。私達にとっては、これ以上ないってぐらい、好都合よ」

ギルバートが、ビールを飲み干して、テーブルに置いたことに気付いたので、ワインのボトルを取り上げてギルバートに向けた。

「ギル。ワインはどうだ？」

ギルバートは嬉しそうな顔をして、ワイングラスを向けてきた。

俺は気前良く8分目までワインを注いでやった。

「ありがとな」

ギルバートは嬉しそうに礼を言ってワインを飲んだ。

ふと、正面に視線を向けると、エドワードとユーリが俺を見ていることに気付いた。

「なんだか、悔しいわね。リオン。明日はその髪型のままよ。リボンは禁止ね」

突然、ユーリが訳の分からないことを言った。いつもは伸びてしまった髪が邪魔なので、髪を後ろで縛ってポニーテイルにしているのだが、今は風呂で洗った髪を乾かすために、そのままにしている。「俺のポニーテイルは、そんなに似合わないの？」

髪を伸ばしすぎたと思っていたが、ポニーテイルはそんなに似合わなかったのだろうか？

「ポニーテイルも、悪くはないわ。だけど、絶対に今の格好の方が

良いわ」

ユーリがやけに力を入れて力説した。

「良く分かんけど、分かったよ」

俺は狐に包まれたような気がしたが、ポニーテオイルは止めた方が良いと言うなら、女性の意見に素直に従うだけだ。

俺達は、料理とワインを楽しみながら、明日の予定を話し合った。

翌朝、顔を洗ってから着替えを済ませて、ユーリと一緒に食堂に下りた。エドワードとギルバートを何度も起こそうとしたが、2人とも、先に行ってくれと言うと布団のなかに潜ってしまった。2人も二日酔いで、苦しいようだ。

俺はユーリに椅子に座るように命令されて、髪をブラシで梳かれてしまった。男なんだから手で整えるだけで十分だと抗議したが、無視されてしまった。

朝食を食べ終えて、ユーリと2人で食後のお茶を飲んでいると、エドワードとギルバートの2人が食堂に入ってきた。

「おはよう」

俺とユーリは2人に挨拶した。

「ああ、おはよう」

2人とも、辛そうな顔つきで答えた。完全に二日酔いだ。

「二日酔いを一発で治す魔法薬があるけど、飲むか？」

2人は返事の代わりに同時に手を出した。俺はウェストバックからアルコール専用の解毒の魔法薬の小瓶を取り出して2人に渡した。「うげ!」、「なんだ、こりゃ」と2人は同時に悲鳴を上げたが、すぐに、何時もの顔つきに戻った。この魔法薬は恐ろしく苦いのだが、効果は抜群だ。

「すげえ、一発で直った」

ギルバートが驚いた顔で言った。

「ああ、確かに、凄いな」

エドワードも同意すると、食堂の給仕を呼んで、2人分の朝食を注文した。

「凄いわね、二日酔いを治す魔法薬なんて、初めて見たわ。地下迷宮で手に入れたの？ ひよつとして、凄く高価だったりするの？」

ユーリが真顔で俺に聞いた。

「うん。1本10クランだ」

「なんだと！」

俺が答えると、エドワードは吃驚した顔になり、ギルバートが叫んだ。

「嘘だよ」

俺はすぐに否定したが、レシピは218階層の隠れクエストをクリアする必要がある。ひよつとしたら、10クランの値段が付くかもしれないが、いくらなんでも10クランは高すぎるだろうと俺も思う。少なくとも、10クランなら俺は絶対を買わない。

「脅かすなよ」

ギルバートは安心した顔になって俺に文句を言った。

「でも、10クランって、嘘じゃないかもよ。魔力回復の魔法薬なら最高級品は10クランぐらいするわよ。二日酔いを一発で治す魔法薬なら10クランでも不思議じゃないかも」

「いや、たかが二日酔いで10クランも出す奴は居ないよ。10クランも出すなら、諦めて、我慢するさ。少なくとも、俺は絶対を買わないね」

俺はユーリに反論した。しかし、確かに魔法薬は高値で取引されているので、ユーリの言うことも、間違っていない。

「そうね。確かにリオンの言う通りね。二日酔いは辛いけど、そんなにお金は出せないわね」

ユーリも同意した。

「それで、幾らするんだ？」

エドワードが聞いた。

「知らないよ。ユーリの言う通り、地下迷宮で見つけた。何処にも

売ってないから値段は無いよ。たかが二日酔いの葉なんだから、気にしないでいいよ」

「そうか、分かった」

エドワードは答えたが、納得した顔ではなかった。エドワードもユーリが言ったことは本当かもしれないと思っているのだろう。

朝食が運ばれてくると、ユーリに急かされながら2人は、急いで朝食を食べた。

宿屋を出て馬車のレンタル屋に向かった。ワイン工場は馬で1時間間の距離にあるため、馬車のレンタル屋で4人分の馬を借りる予定だ。

4頭分のレンタル料金は半日で10シルクだった。エドワードが交渉して値引きして貰った。

王都から迷宮都市に行くのに、マジックアイテムで馬を召喚して乗馬した経験があるが、リオンは名人級の乗馬の技術を持っている。俺としては2回目の乗馬なのだが、簡単に馬を乗りこなすことができた。

ワイン工場に着くと、エドワードが交渉して、すぐに工場主に会うことができた。エドワード達が下宿していた雑貨店の紹介状が効果を発揮したらしい。

俺達4人は、応接室に通されて、暫く待っていると、エドワードが渡した紹介状を持った50歳ぐらいの太った男性が、応接室に入ってきて、俺達4人が座っている対面の中央に座った。

「やあ、お待たせして申し訳ない。私がこの工場主で、ベルガン・オーガスタと言います。どうぞ、ご臍屢に」

と軽く頭を下げた。

「そちらの2人が、弟の店で下宿していたエドワードさんとギルバートくんですか？」

「はい。私がエドワードで、隣がギルバートです。ジャックさんには、本当にお世話になりました」

エドワードが代表して工場主に答えた。

「弟のジャックの様子はとうですか？」

「はい。特に問題なく、元気にしています」

「そうですか、それは良かった。それで、そちらのお嬢さん方の名前は何？」

「ユリウス・スタンレーですわ。ユーリと呼んでください」

「リオン・ウオートです」

工場主が俺を見たので、俺は名前を言って頭を下げた。工場主は嬉しそうな顔で俺を見ていた。

「手紙には、魔術学院の教授の依頼で、プレミア付きのワインとシャンパンを仕入れに行くと書いてありましたが、何本、必要ですか？」

「教授から、赤白を1ダースとシャンパンを2ダースと言われています」

ユーリが説明した。交渉はユーリが行なうことになっている。

「すると、4ダースになるけど、4人で大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です。無限に荷物を入れることができる無限バックと言うマジックアイテムがありますので、幾らでも運べます」

「ほう、そんな便利なマジックアイテムがあるのですか、商人なら喉から手が出るほど、欲しがるでしょうな」

「そうですね。でも、とても稀少なマジックアイテムでして、世界で数えるほどこしか存在していないと言われています」

「なるほど、流石は魔術学院の方ですな、いや、大した物です」

「ありがとうございます」

「それで、予算は？」

「1本5クランです」

「ふむ。1本5クランね。良いでしょう、うちの相場は交易許可証があれば、契約商人の仕入れ価格が4クラン、商人じゃないお得意様は5クランです。弟の頼みがあるから、お得意様扱いで売りましょう」



「交易許可証なら、持ってますよ」

俺は咄嗟に工場主に言った。

「おや、それでしたら、4クランで卸しましょう。しかし、支払いは商会カードになりますが、商会カードはお持ちですか？」

「はい。持っています」

「それでしたら、問題ありません。契約商人の卸値で譲りますよ」

「それと、もし可能なら、別枠で、同数のワインとシャンパン。それと、最小単位のビール樽を1ダースを卸して頂けませんか？」

エドワード達とは打ち合わせしていない内容だが、契約商人の卸値だとしたら破格の扱いだ。こんなチャンスは二度と無いだろう。隣でユーリが呆れた顔で見っていた。

「ああ、勿論、構わないよ。最小の樽は5ガロンだよ」

「はい。大丈夫です」

「それでは、全部で、プレミアの白ワイン24本、赤ワイン24本、シャンパン48本と5ガロンビール樽を12個でいいかな」

「はい」

「分かりました。そうだ、幾らでも運べるのなら、弟の店にワインとビールを運んで欲しいのだが、頼めませんか？」

「勿論です」

ユーリが慌てて割り込んで答えた。

「それは助かる。大型の荷馬車1台分あるから、通常の輸送費を報酬として払うよ」

「通常の輸送費って、幾らですか？」

ユーリが嬉しそうな顔して聞いた。

「私が契約している商会の輸送費は60クランだよ」

「えっ、そんなにするの？」

ユーリが吃驚した声を出した。

「これでも、かなり安い方だよ」

「やった」

「他に入用な物がありますか？」

「いいえ。これで全部です」

「そうですか、それでは、倉庫に案内しましょう」

工場主は立ち上がったので、俺達もすぐに立ち上がった。工場主がドアの方に移動したので、俺達も後に従った。

工場主の案内で巨大な倉庫に行き、渡されたワインとビールを無限バックに入れ、商会カードで支払いを済ませた。そして、馬に乗ってワイン工場を後にした。

「ところで。どうしてリオンは、交易許可証や商会カードを持っているの？」

隣に並んで馬に乗っていたユーリが聞いた。

「えっと、……師匠に譲られたんだ」

「へえ、交易許可証って、譲れる物なの？」

「そうだよ。正確には『黒猫商会』と言う名前の商会を譲ってくれたんだ。商会と言うのは、店を開いて商売をすることのできる登録証のことだね、交易許可証と銀行の商会口座がセットになってるんだ。商会カードとは、商会用の銀行カードのことだよ、交易許可証があれば、交易所で売買できるし、交易所の精算は、商会カードを使うことになってるんだ」

「へえ、それじゃ、リオンは交易所で売買が出来るってこと？」

「そうだよ」

「それじゃ、無限バックで、荷馬車何十台分もの荷物を入れて運んだら、物凄い儲けになるんじゃないの？」

「そうかもね。だけど、程々にしないと大問題になると思うよ」

「どうして」

「経済と言うのは、微妙なバランスで成り立ってるからね。無限バックを使って無茶な商売したら、そのバランスが壊れてしまうよ。バランスが壊れるとインフレかデフレがあっという間に起きてしまうよ」

「インフレとかデフレって何？」

「インフレと言うのは、急激に物価が上がることだよ。例えばパン1個が10コルで売買されていたとすると、その価格が1年ぐらいで10倍、つまり、1シルクになってしまうことだよ。去年は10コルで買ってたパンが、今年になったら、1シルクになってしまったら、困るだろう？」

「それは、困るわ」

「デフレはその反対で、急激に物価が下がることだよ」

「そうなんだ」

「要は、素人は商売に手を出さないってのが、一番、無難だよ」

「ふーん。でも、護衛である街に行ったら、その交易所で特産品を荷馬車1台分ぐらい仕入れて、護衛で違う街に行った時に、交易所で売れば、儲かるんじゃないの？」

「荷馬車1台分に限定するなら、経済バランスに影響は出ないけどね。だけど、仕入れた名産品を交易所で買い取って貰えるかどうかは難しいよ。」

その街で、どんな品物がどれだけ求められているか調べて、その街が求めている品物を売らないとだめだよ。

例えば、その街は、ジャガイモはどの店の倉庫にも一杯にあふれているけど、玉ねぎはどの店の倉庫も空だったとすれば、玉ねぎを交易所に持っていけば、買い取ってくれるけど、ジャガイモを持つて言ったら、買い取ってくれないからね」

「成る程、良く分かったわ。つまり、どんな品物が幾らで、どれだけ売れるのかを把握しておかないといけないってことね」

実際はユーリの言う通り、商人ギルドで荷物輸送のクエストを請け負えば、相当な儲けになるのだが、ユーリに教えたら、冒険者を辞めて運送屋を始めてしまいそうだ。

「その通りだけど、それじゃあ、半分だね。売値と買値の両方を把握しないとだめだよ。つまり、どの街で、どのような品物が幾らで売られて、幾らで買えるかを知ること。つまり、相場を把握することだよ。そして、商売に基本は安く仕入れて高く売ることだよ」

「なるほど、良く分かったわ」

「リオン。そんな話を何処で習ったんだ？」

突然、エドワードが聞いた。

「師匠だよ」

「師匠？」

「リオンの師匠は、私達にとっては、マリアさんのような人らしいわよ。リオンは小さい頃に師匠に拾われて、師匠に育てられたそうよ」

ユーリが俺に代わってエドワードに答えた。

## 18話

翌日の早朝に4人揃って宿屋を出て交易所に向かった。

交易所の待合所は冒険者達で溢れていたが、俺達はすぐにリッチモンを見つけることができた。

「リッチモンさん、おはようございます。」

俺達を代表してエドワードがリッチモンに挨拶をした。

「やあ、おはよう。待ってたよ。早速だが、荷馬車の所に移動するよ」

リッチモンの先導で俺達は待合所を出て駐車場へ向かった。

「昨日、説明したが、今回の隊商は4台。俺達の荷馬車は3番目だ。君達の年齢が若いので1番安全な場所に配置して貰えたよ。」

隊商の護衛リーダーはダンカンだ。ダンカンのチームは4人チームで馬に乗ることになっている。

君達はダンカンのチームの指示に従ってくれ、ただし、俺達の荷馬車を守ることが最優先だからね。そこところは間違わないように頼むよ」

駐車場に向かって歩きながらリッチモンが説明した。

「分かりました。任せてください」

エドワードがリッチモンに請合った。クライアントを安心させるのもリーダーの勤めだ。エドワードは若いがチームのリーダーとして優秀だと思う。

駐車場の荷馬車の近くにロンリが待っていた。

「やあ、ロンリ、おはよう」

ギルバードが挨拶したので俺達も挨拶をした。

「やあ、皆さん。おはよう。今回も、よろしく頼みます」

ロンリが挨拶を返した。

ダンカンから集合の命令が出たので、全員が集まるとダンカンから護衛のルールなどの簡単な説明があった。

そして、4台の荷馬車は、順番に出発した。

最初の2日間は何事もなく、順調に進んだが、3日目の朝に、盗賊団に襲われた。

朝の10時頃、マップ画面に凄い数の黄色の点が表示され、アリスが、盗賊団の待ち伏せの可能性があると警告してきた。

魔獣は赤い点で表示されるが、魔獣以外は黄色の点で表示される。街中などで、人間や亜人を表示したら、黄色の点ばかりになるので、普段は赤い点しか表示していない。

前方の気配を探ると、確かに何か潜んでいる気配がした。

前方に小さな森が広がっており、街道は小さな森の中に延びている。

黄色の点は50個ぐらい、こちらの約2倍の勢力だ。バスクは早く走れないので逃げるできない。戦闘になれば隊商は全滅するかもしれない。

俺は戦う覚悟を決めた。

「前方の森に50人ぐらいの盗賊団が隠れてるぞ」

俺はパーティ間通話機能をオンにして報告した。

「リオン、隊商に警告しろ」

エドワードの命令が来た。

「前方の森に盗賊団が待ち伏せしてるぞ！ 人数は、50人だ」

俺は大声で叫んだ。

「襲撃だ。縦陣形を作れ」

ダンカンの指示が飛んで、隊商の荷馬車は予め決められていた縦陣形に移動を始めた。横に4台に荷馬車が並んだ形になるように、俺達の荷馬車は左側に逸れて、1番目と2番目の荷馬車の間に入るように進んだ。

陣形が整う前に、森から真っ赤な服を着た馬に乗った盗賊団が飛び出して来た。馬の後から赤い服を着た盗賊が徒歩で続いていた。

「リオンは自分の判断で自由に動け、近づいてくる盗賊を討伐して

くれ、荷馬車が止まったらギルバートは見張り台から降りて合流しろ、俺達3人は固まって防衛に徹するぞ」

エドワードの命令が来た。俺は弓を準備し、見張り台に設置されている矢を掴み取って、矢を構えた。60mぐらいまで近づいた盗賊団の内、こちらの荷馬車に向かってくる盗賊を優先して矢を撃ち込んだ。

10人ぐらいの馬で駆けてくる盗賊を仕留めた頃、俺に向かって矢と魔弾が襲ってきたが、俺は最小限の動きで避けながら、矢を撃ち続けた。

エドワード達に近づく盗賊を優先して倒したのだが、3人の盗賊がエドワード達に向かって行った。

「ユーリは真ん中、ギルバードは右、俺は左の盗賊を倒す」

エドワードの命令が聞こえた。

エドワード達の近くの盗賊のあらかたを倒したので、俺は見張り台から飛び降りた。

エドワード達は3人の盗賊と戦っているが、1人は既に倒れているし、明らかにエドワード達の方が優勢だったので、俺は盗賊団の中央に向かって走りながら、目に付いた盗賊に次々と矢を撃ち込んでいった。

「あっちに応援にいくぞ」

エドワードの命令が聞こえた。3人の盗賊を倒したエドワード達は2番目の荷馬車の護衛の方に移動を始めた。どうやら2番目の護衛の応援に向かうようだ、2番目の護衛のうち2名が倒れおり7人の盗賊が居た。30mぐらいの距離があるため、味方を誤射する可能性は0ではないのだが、7人も盗賊ではエドワード達の手に余るだろう。

少しでも盗賊の数を減らすために、エドワード達が向かった盗賊を優先して矢を撃った。

「ギルバートはそっちの盗賊を倒せ、ユーリは俺の傍を離れるな」  
エドワードの命令が聞こえた。

3人目の盗賊に矢を撃った時、俺の近くにいた2人の盗賊が剣を振り上げて俺に向かってきた。4人の盗賊が残っていたが、俺は自分の身を守るために体を回転させながら、振り下ろしてきた剣を避けて、手に持った矢を盗賊の喉元に矢の半分ぐらいまで突き刺し、そのまま、回転しながら2人目の盗賊の脇をすり抜け、同時に背中 of 矢筒から矢を引き抜いて、盗賊の後ろから首筋に、無理やり矢を半分ぐらいまで突き刺した。

エドワード達のが気になったが、それどころではなかった。そして、前方を向いたとき、30mぐらいのところに魔法で攻撃している真紅の魔女の衣装を着た魔術師とその両脇で魔術師を守っている2人の戦士に気づいた。他の盗賊に大声で命令を叫んでいるので、盗賊団の首領だと思う。

この時点で、俺は19人の盗賊を仕留めていたし、残りの盗賊の人数も半分以下に減っていた。

「リッチモン」、「やだー！」

ギルバードとユーリの叫び声が聞こえた。リッチモンに何かが起こったようだが、俺はエドワード達のことを確認する余裕がなかった。アリスが盗賊団の首領を倒すべきだと忠告してきたし、俺もその通りだと同意した。

俺は女性魔術師に向けて矢を立て続けに放ったが、女性魔術師の横に居た戦士がさっと前に立ちはだかり、全ての矢を体で受け止めた。そして、女性魔術師が俺に向けて、魔法を放ってきた。

俺を中心に10mの範囲に高熱の炎が立ち上がった。上位魔法の炎獄の業火ボルケーノだ。俺の近くに居た2人の盗賊が巻き添えになり、悲鳴を上げた。

弓の弦が燃え上がり、革鎧も燃え出した。

俺は装備画面を呼び出して弓をアイテム画面に移動させ、右手に拳銃を出し革鎧とブーツをもっと高性能な戦闘服に交換した。

拳銃に魔闘気を纏わせて炎で燃えないようにし、女性の魔術師に



両手で狙いを定めて続けざまに引き金を引いた。

女性魔術師の前に立ちはだかった戦士に3発、そして、戦士の耳を掠めてすり抜けていった弾が女性魔術師の頭を撃ち抜いた。

驚いたことに、戦士に当たった3発の弾が弾かれてしまった。戦士に意識を集中するとアリスから戦士の情報が流れてきた。

「鉄身」と「竜躯」の特性、竜殺しの称号持ちだ。普通の武器では傷をつけることが出来ない。俺は戦士を無視して邪魔になりそうな近くの盗賊を次々と銃で撃ち殺した。

竜殺しの戦士が俺に向かってきた。赤色の鱗の鎧を着ており、両手剣を振りかぶって突進してきた。俺は拳銃と「黒桜」を持ち替えて両手で「黒桜」を構えた。「黒桜」は、四尺三寸の特殊な素材で作られた日本刀だ。

両手剣を振りかぶった2mぐらいの巨体の戦士が俺に襲い掛かってきた。

物凄い迫力だ。危険を察知したアリスが「超加速」を発動して4倍速に加速した。

戦士の動きが遅くなり、ゆっくりと両手剣を振り下ろしてきた。

俺は戦士の脇をすりとりすり抜けて、後ろから袈裟切り。必殺のカウンター技が見事に決まった。戦士の体が斜めに2つに分かれて倒れた。

俺は戦闘服から元の革鎧、ブーツの防具を切り替え、「黒桜」を拳銃に戻し、目に付いた盗賊を銃で撃ち殺した。

最後の盗賊を撃ち殺すと、辺りは静寂に包まれた。

パーティ画面でエドワード達3人は無事であることは確認してある。

俺は拳銃をアイテム画面に戻して、元の弓と交換し、ロングソードを腰に戻した。

少し焼け焦げた弓を片手に持って、エドワード達の所に向かって

歩き出した。

なんだか、自分が自分でないような、不思議な感じだ。

30人以上の盗賊を殺したと思うのだが、人を殺したと言う実感が全く無い。頭が真っ白になって、ぼうとしているんだと思う。

弓と革鎧には、「復元」の魔法を付与してあるので、数時間後には元の状態に戻るはずだ。

見渡して確認すると、護衛の半数近くが倒れたていると思う。

エドワード達3人が倒れたリッチモンドの傍で立っていた。そして、近くに2番目の荷馬車の護衛4人が倒れていた。

ユーリがエドワードの胸にすがって泣いていた。

「リッチモンが、死んだよ」

泣きそうな目をしたギルバードが俺に言った。

しゃがんでリッチモンの体を確認すると、3箇所には斬撃の後があった。3箇所とも、大きく切り裂かれており、骨や内臓が見えている。明らかに死んでいる。

魔獣とは違い、人間や亜人の死体は消えずにその場に残る。周りには、盗賊と護衛達の死体が幾つも転がっている。

護衛リーダーのダンカンが「みんな集まれ!」と何回も叫んでいる。

「エドワード、ダンカンが呼んでる」

俺はエドワードに注意した。

「そうだな、よし、皆、ダンカンの所へ移動するぞ」

エドワードが号令した。俺達は4人揃って、ダンカンの所へ移動した。

ダンカンに色々と尋問されたが、拳銃については師匠の遺品で秘密だと説明を断ると、深くは追求してこなかった。

仲間の遺品を集め、殺した盗賊から神聖協会の認識票と生首を含めた戦利品をかき集めてから出発した。余裕が無いので死体はそのまま放置された。

隊商は全部で30人も居たのだが、生き残ったのは全部で12人、

そのうち2人は、大怪我を負って動けない状態だ。

チームが編成し直され、俺は、足を怪我して動けない護衛と組んで2番の荷馬車担当になった。

エドワードとユーリの2人が元の3番の荷馬車担当で、ギルバードは4番目の荷馬車担当になった。

見張り台上がって、ぼうつとしながら景色を眺めていた。

どうやら、足の振るえは収まったようだ。以前に同じような状態になったことがあった。酷いうつ状態になっているらしい。

両親や親戚の死を経験していたが、平和な日本では当たり前なんだが、人を殺したのは初めてだ。

殺した相手は盗賊だ。それに殺さなければ自分が殺されていただろう。つまり、戦争と同じだ。別に気にする必要は無いのだ。それに、冒険者をやるなら、いずれは人を殺すことになるだろうと予想していたし、いざとなったら、例えば女子供でも、躊躇なく殺すつもりでいた。

自分では踏ん切りが着いていたと思っていたのだが、案外、俺はお人好しだったようだ。

なんとか誤魔化そうとしたが、足が震えていたし、顔は青ざめていたのだろう。思い返してみれば、皆が気を使っていたことが分かる。ダンカンと年長者は俺を見ると、「大丈夫か？」と聞いてきた。ダンカンの尋問の時は、上の空で答えていたように思うが、そのことに気付けたのだから、随分と、良くなったのだろうと思う。

「リオン。大丈夫か？」

エドワードがパーティ間通話機能の個人用回線で聞いてきた。

「ああ、エドワードか？ 勿論、大丈夫だよ」

「人を殺したのは、初めてか？」

「まあね。良く分かったね」

「俺も経験があるし、ユーリとギルバードの時も大変だったからな、リオンの様子が同じだった。顔が青ざめて、足が震えてた」

「そうか、エドワードも同じだったのか？」

「まあな。自分じゃ、良く分からないけど、同じだ」

「ギルバートとユーリは、派手に泣いたんじゃないのか？」

「あははは……。しかし、驚いたな。全くその通りだった」

「とにかく、話しかけてくれてありがとう。本当に大丈夫だよ。随分と良くなったと自覚してる」

「そうか、その調子なら、大丈夫そうだな、しかし、俺の時は丸1日は気力が戻らなかったけど、リオンは凄いな」

「丸1日もか、それは、精神修行が足りないからだよ。人生経験の差だね」

「何言ってるんだ、お前は16歳だろう。俺よりも2つも下じゃないか、俺達が初めて人を殺したのは去年だったから、一つ下になるのか。」

前から、思ってたけど、とても16歳の少年とは思えないな。何と言うか、中身は50歳ぐらいのおじさんみたいだ」

「おい、俺は16歳だぞ、おじさんと言うな」

「分かった。悪かったよ」

「まあ、いいけど」

「それじゃ、回線を切るぞ、何かあったら何時でも言ってくれ」  
「分かった」

エドワードとの回線が切断された。エドワードのお蔭で、すっかり、気分が良くなったような気がした。

日が落ちても暫く進んでから野営になった。

生き残った護衛の話では、襲ってきた盗賊は「赤衣の盗賊団」と呼ばれる有名な盗賊団で、莫大な懸賞金が掛けられているそうだ。

「赤目の魔女」と呼ばれる魔術師の女性がボスで200クラン、相棒の「竜殺し」と呼ばれる戦士も200クラン、もう1人の幹部が100クランの賞金首で、盗賊団自体に500クランの賞金が掛かっている。

生き残った護衛は御者も入れて12人なので、1人80クランになるとみんな喜んでいた。

ダンカンから「賞金はみんなで、山分けにしたいが、構わないか？」と聞いてきたので、「みんなで盗賊団を倒したことにしてくれらるなら、その方が都合が良い。俺の名前は出さないようにしてくれ」と俺は答えておいた。

そして、ダンカンはみんなを集めて、賞金は山分けにすると約束した。その場で盗賊から剥ぎ取った武器も分配され、俺は最初を選ぶ権利が与えられた。

俺は竜殺しが持っていた両手剣を貰った。

ユーリは女性の魔術師が持っていた魔法の杖を貰い、エドワードとギルバートの2人は魔法の片手剣を貰っていた。

翌日の夕方に王都の交易所に辿り着いた。

ダンカンがギルドの依頼票にサインをして、翌日の昼に交易所の待合室に集合するように指示してから、解散となった。

## 19話

交易所を出た4人は自然と一緒に王都の中心に向かった歩いた。

盗賊団を殲滅したことが知られば、凄い騒ぎになるだろう。報告がギルドに届く前に、依頼達成の処置をすました方が良いだろう。「エドワード、これから、冒険者ギルドに行って、依頼達成の手続き片付けないか？」

「そうだな、そんなに時間は掛からないから、そうするか」

俺の提案にエドワードが頷いて同意した。

「その後は、どうする？」

ギルバートが聞いた。

「今日は、ぱあっと、と乾杯にしない？ 時間も遅いから、オーガスタ雑貨店と魔術学院は明日でしょ」

ユーリが明るい声で提案した。

「いいね。今回は、随分と儲けたから、派手に行こうぜ」

ギルバートが嬉しそうな顔で同意した。2人は飲んで騒いで、忘れたいのだろう。俺もそんな気分だ。いや、ひよっとしたら、2人は俺に気を使ってくれてるのかもしれないが、それは考えすぎかもしれない。

俺達は冒険者ギルドに寄って依頼達成の手続きを済ませると、商店街にある宿屋を確保した。

部屋で休憩してから4人で食堂に入った。

「乾杯！」

ビールの大ジョッキを持ち上げたエドワードが音頭を取ると、俺

達3人は声を揃えて「乾杯!」と答え、ジョッキをぶつけ合ってからぐいっと飲んだ。

「ぷはーっ、こいつはうめえぜ」

ギルバートが親父臭い感想を言った。

ふと、既視感を覚えた。つい最近、同じような風景を見た記憶がある。ああ、そうか、バーモの街に泊まった時、依頼達成の乾杯を上げたっけ、その時と同じだ。

確か、ギルバートが同じことを言ったと思う。

俺達の前には宿の定食セット4人分が並べられている。料理の内容が違うが、あの時と全く同じだ。

「今回は、随分と儲けたわよね」

ユーリが嬉しそうに言った。

「まだ、依頼は終わってないぞ、精算は明日の夜だ」

いつものように、エドワードがユーリに釘を刺した。

「まあ、そうなんだけどね。明日の昼に賞金も貰えるし、ドキドキするわね」

「明日は、午前中にオガスタ雑貨店に行って、昼に交易所だろう、そして、午後は魔術学院かあ、なんだか忙しいな」

ギルバートが溜息を付いた。

前回と同様に、定食を食べ終えた頃にエドワードが追加の料理とエドワードとユーリの分のビールの追加を注文した。

「追加のビールが来る前に飲んじゃえよ。俺達の方も注文しようぜ」  
ギルバートが俺を急かすと残っていたビールをいっきに飲み干した。

俺のジョッキには4分の1ぐらい残っていたが、俺もいっきに飲み干して空のジョッキをテーブルに置いた。

「学院都市に行ったら1週間はのんびりするぞ。ユーリは魔力測定を受けるんだろう? 魔力が上がってるはずだ」

「そう言えば、教授から護衛に依頼をしたいってメールが来てたわ。出発は2、3日後だって」

「護衛の依頼？」

「詳しいことは、ワインを受け取った時に直接話すって書いてあったわ」

「おい。今回は大変だったんだぜ、少しは休ませろよ。命の洗濯をしないとやってられないぜ」

「教授の依頼なら受けない訳には行かないだろう。諦めろよ」

エドワードがギルバートに言った。

「しょうがねえなあ」

ギルバートは言うどビールを煽った。

「ところで、リオン」

突然、ユーリが俺を呼んだ。

「何？」

「ひょっとして、リオンは魔法が使えらんじゃない？」

一瞬、突然の質問に驚いたが素直に答えることにした。神聖協会のネットワークで調べればすぐに分かってしまうのだ。隠さない方が良いだろう。

「うん。使えるよ」

「なんだと」

ギルバートが声を上げたが、エドワードとユーリはやっぱり言う顔をした。

「どうして、魔法を使わないの？」

「うーん。どうしてかなあ、……使う必要が無いから？」

「なんで、私に聞くのよ。ひょっとして、隠してるの？ 杖を持ってるないし」

「隠してる訳じゃないよ。杖だってちゃんと持っているよ」

「どうして戦闘の時に魔法を使わないの？」

「うーん。難しい質問だなあ、……。半分は趣味かな、魔法を使うのは面倒だし、それよりも、スパーンと剣で斬り付けた方が早いじゃない。例えば、急に狼が襲ってきたとするじゃない。俺は咄嗟に腰の剣を抜いてすれ違いにスパーンと斬るよ。咄嗟に杖を出して呪



文を唱えてたら狼に噛み付かれちゃうじゃない」

「成る程なあ、リオンの言う通りだね。ユーリに魔法を使わせるために、俺達はユーリの壁になって守ってるもんな」

ギルバートが納得した顔で言った。

「結局、好みの問題かもね。魔法で倒すよりも剣で倒した方が達成感がある。要は魔法よりも剣を使う方が好きだと言うことだよ」

「そうねえ、リオンの言う通り魔法で戦うのは色々と制約があるのは確かだわ」

「ユーリは剣で戦うよりも、魔法で戦う方が好きだから魔術師をやってるんじゃないの？」

「そうねえ、そんな風に聞かれたら、確かに私は剣よりも魔法の方が好きだからと言えなくはないわね」

「ところで、どうして魔法が使えると思ったの？」

「変だと思ったのは盗賊団の首領を倒した時よ。リオンは上位魔法のボルケーノを受けて平気だったし、一瞬で装備を変えてたじゃない。古代遺跡の兵器も使ってたわ。あれは、魔弾銃じゃないの？」

「正確には、まったく違う武器だよ。魔弾銃じゃない。それに、魔法は使ってないよ」

「そうなんだ。やっぱり魔法じゃないのね。魔力を一切、感じなかったから、不思議でしょうがなかった。でも、ボルケーノを防ぐには炎の防衛バリアを張らないと無理でしょう？　どうやって防いだの？　それに、あの武器は何なの？」

「うーん。ダンカンにも尋問されたけど、それについては秘密だ。師匠に口止めされてるから答えられない」

「そうか、口止めされているなら仕方がないわね。魔法を使えることは言っても良いの？」

「うん。魔法を使えることは口止めされていないからね。魔法は師匠に習った」

「リオンは、魔術師の資格は持ってないの？」

「いや、ちゃんと資格はあるよ。神聖協会のネットワークを調べれ

ば分かるからね。隠すつもりは無いよ」

俺はウェストポーチから魔術師ギルドのカードと特級魔術師のカードを取り出して、ユーリの前に置いた。ユーリは目を見開いて驚いた顔をした。隣のエドワードも同じように驚いている。

「ユーリ、どうした？」

ギルバートは聞いた。

「ギルバートは、あのカードが何か知らないのか？」

俺が聞くと。

「知らない。そのカードは何？」

「魔術師ギルドの登録カードと特級魔術師の資格カードだよ」

「へえ、凄いなあ……、って、待てよ、今、特級魔術師と言ったか？」

「うん」

「なんだと！」

ギルバートが大声を上げた。

「おい。声が大きいぞ」

「すまん」

ギルバートは真っ赤な顔になって小声で謝ったが、俺達は食堂内の全員の客の注目を浴びた。

客の注目が消えるのを待って、俺はカードをウェストバックに入れた。

「リオンは規格外だな、さすがに驚いたよ」

エドワードが静かに感想を言った。

「おい、ユーリ！ 大丈夫か？」

ギルバートがユーリに呼びかけた。

「ええ、……大丈夫よ。でも、流石に驚いたわ。こんなに驚いたのは初めてよ。リオンの規格外っぷりには慣れたと思ってたけど、ぜんぜん甘かったわ」

「赤眼の魔女と竜殺しを単独で倒した実力か。完全に化け物だな」  
エドワードが言った。

「化け物は、酷くないか？ まあ、良いけど」

俺は文句を言ったが、俺もリオンは人外だと思っている。

「ああ、すまん。言い過ぎた」

「世界で10人も居ない魔闘気の使い手で、王国で5人も居ない特級魔術師。世界最強だわ。それで見た目がこれじゃ。堪らないわ」

「だけどよ、それってマリアさんも同じだよな？」

「マリアさんは魔闘気の使い手じゃないだろ」

「エドワードは本気でそう思うか？ でもよ。マリアさんが魔闘気を使えるって言ったら、俺、素直に信じるぜ」

「成る程、確かにな」

マリアさんと言うのは凄い人らしい。3人の話からリオン並みの化け物と言うことらしいが、どんな人なのか物凄く興味がある。

「マリアさんって、どんな人？」

「難しい質問ね。……ひと言で説明するなら、リオンみたいな人？」  
ユーリが答えると、エドワードとギルバートが同意するように頷いた。

「俺みたいない人じゃ、分らないよ」

「そう言えば、マリアさんも黒髪だったわね。それに、考えてみるとリオンとマリアさんって似てない？」

「おっ、確かにユーリの言う通りだ。良く似てる。でも、親戚じゃないよな。マリアさんも人外だけどハイエルフだもんな」

「そう言えば、教授の依頼だけど、マリアさんも同行するそうよ。何でもマリアさんが私達に護衛の依頼をするように教授に頼んだらしいわ」

「何だか嫌な予感がしてきたぞ、今回の盗賊団なんか目じゃないほど、とんでもない事が起きないか？」

「よせ。そんな事を言ったら、本当になる」

エドワードが真剣な顔でギルバートを止めた。ユーリが不安そうな顔をした。

「ああ、すまん」

ギルバートが謝ったが、雰囲気はシーンとしてしまった。

「もう、いいわ。今日はとこっとん飲むわよ！」

ユーリがジョッキを持ち上げて、ぐいぐいと飲んで飲み干した。

「おっ、すげえな」

「何言ってるの、ほら、ギルも飲みなさい」と言うと、「いつき、いつき、……」と音頭を取り出した。何処かの体育系のサークルと一緒にだ。

「よーし」

ギルバートは気合を入れると同じようにビールを飲み干した。そして、ユーリに急かされて俺達は順番にビールを飲み干していった。結局、俺が勘定を済ませて酔いつぶれた3人を順番に担いで部屋に運びベッドに寝かせた。そして、翌日の朝、3人は起き上がるとトイレに駆け込み。俺は3人に二日酔いの魔法薬を渡した。

オーガスタ雑貨店の倉庫で、ワイン工場で依頼された荷物を渡した後、交易所の待合所に行き、ダンカンから賞金を受け取った。

賞金は1人当たり100クランで、俺はダンカンから宝石が詰まっている小袋を受け取った。盗賊から剥ぎ取った現金や宝石、マジックアイテムなど、予想以上に高価な評価額になったため、20クランが賞金に上乗せされた。

そして、赤眼の魔女が持っていた宝石の小袋は特別褒賞品として俺に渡すことにスルモスタ商会の緊急幹部会議で決定されたそうだった。

魔術師学院は王都から20kmの場所にあるため、俺達は魔術師学院と王都を往復している乗合馬車に乗り込んで魔術師学院に向かった。

昼飯を取る時間が無かった俺達は屋台でサンドイッチを購入して、乗合馬車の中で遅い昼食を食べた。

乗合馬車は20人乗りで、荷物は屋根の上に載せるようになっていた。昼の時間は空いているらしく乗客は俺達を入れて10人だった。

「リオンは、魔術師学院は初めて？」

サンドイッチを食べ終えて、魔法の水筒の水を飲んでいたら、ユリーが話しかけてきた。

「うん。初めてだよ」

「それじゃ、少し、説明してあげようか？」

「それは嬉しいですね、是非、お願いします」

「魔術師学院は名前の通り魔法を勉強するための学院よ。今から600年前に設立されたわ。1000年前の大戦争の後、王国が安定した頃に大戦争で失われた魔法技術を取り戻すために学院が作られたそうよ。」

この王国の魔術学校は魔術師学院だけだから、学院には全国の魔法を志す若者が集まるのよ。

設立当初、学院の敷地は1万エーカーだったそうだけど、学院の周りには、先生などの学院関係者や生徒が寝泊りするための下宿が宿屋が建てられ、また、商売熱心な商人が集まってきて、店も建てられて、徐々に発展して行ったの。

そして、現在では学院の敷地は2万6千エーカー、人口が約1万人の都市に成長したわ。それで学院都市と呼ばれているのよ。迷宮都市と比べたら規模は4分の1ぐらいだけど、それでも凄いと思うわ」

「そうだね。それで、学院の生徒って何人ぐらいいるの？」

「そうね、学院は、初級、中級、上級の3つに分かれていて、初級が1000人、中級が500人、上級が100人だったかな。」

魔術師資格の初級、中級、上級に対応してるのよ。私は、初級を卒業したから、一応、中級に属してるわ」

「ひょっとして、卒業条件はそれに対応した魔術師資格を得ればいいの？」

「ええ、その通りよ」

「授業料は、どうなってるの？ 入学試験とかあるの？」

「入学試験はあるわよ。試験に合格すると学院の導師に弟子入りするよの、初級は年間5クラン、中級は10クラン、上級は50クランよ。それと、各教科の授業料が決まっているわ。授業を受ける場合は、その授業の半年間の授業料を払うのよ。初級の授業料は1クランぐらいね。神聖協会の資格認定試験が半年に1回だから、それに合わせてあるのよ」

「へえ、それなら授業を受けなくても、独学で勉強して魔術師資格の試験に合格すれば良いんだね」

「ええ、その通りよ。私は初級の資格を取ってから、エドワード達と冒険者をやっているけど、ちゃんと年間費用を払っているわ」

「結構、自由に出来るんだね」

「まあね。でも、魔術師資格の試験は難しいから、ちゃんと授業を受けた方が結果的には、早く合格できるわ。」

その分、費用が掛かるけどね。私は、初級魔術師試験に合格してから、半年間で必要な授業を受けてから冒険者になったわ。

導師が弟子の面倒を見るし導師は神聖協会の試験に合格できるように、色々と指導してくれるの。それでも、教授から一杯課題を出されてるのよ。神聖協会の腕輪を使って定期的に連絡を入れてるし、課題のレポートも腕輪で送っているわ」

「ユーリが弟子入りした導師が、教授ってことなの？」

「そうよ。それから、学院は王国の研究機関のような役割があるのよ。王国からそれなりの予算が出てるそうよ。どれぐらいなのかは知らないけどね。」

学院は魔法の研究も熱心に行っているわ。魔法の研究をやりたい人は助手の資格を得るために必死になっているわ。助手になれば給金が出るし、研究費用も支給されるのよ」

「助手になるには、資格があるの？」

「中級魔術師以上の資格が必要ね。それと、導師に認められないと

無理。助手を採用するのは導師なのよ」

「導師になるには助手になって、研究成果を出す必要があるってこと？」

「ええ、その通りよ、良く分かったわね」

「ユーリのように冒険者になる生徒は多いの？」

「多いわよ。初級魔術師試験に合格したら殆どが冒険者になるわ。」

冒険者になって地下迷宮で修行した方が魔力が上がり易いのよ。

魔法実験室で幾ら修行しても実力はつかないわ。ちゃんと実力がないと資格試験に合格できないからね」

なるほど。冒険者になってレベルを上げないと、中級以上は取れないってことなんだろう。

乗合馬車は学院都市の北側にある魔術師学院の入口で俺達を下ろしてくれた。魔術師学院の正門がちょうど都市の中央にある。

俺達はユーリに案内されて魔術師学院の敷地に入った。

魔術師学院には誰でも自由に入れるらしく、入口の門は開いているし、門番も居なかった。

ユーリの話では日が暮れる頃に門は閉められるそうだ。門が閉まっても門の横に出入り口があるそうで、遅くまで魔術師学院に居ても問題はないらしい。

ユーリに聞いた通り、魔術師学院の敷地は広大だった。それこそ、街の中に、さらに小さな街が作られているかのようで、敷地に入ると随分と雰囲気違っていた。

殆どの者が魔術師の格好をしていた。すれ違う者はユーリを除いて、冒険者の格好をした俺達3人をいかにも珍獣を見るかのようにジロジロと不躰に見ていた。

まあ、俺が他人の視線を意識しすぎていたのかもしれない。

教授は研究棟に自分の研究室を持っているそうだ。

ユーリの説明では2フロア分を確保していて、古代遺跡のがらく

たがそこらじゅうに転がっているらしい。

古代遺跡の遺品は国の許可なしに廃棄することができないので、教授専用の倉庫も確保しているそうだ。



## 20話

「教授。エドワード達を連れてきたわよ」

ユーリはドアをノックもせず中に入り大声で呼びかけた。

俺達3人はユーリに続いて中に入り、最後に入ったエドワードがドアを閉めた。

「教授！ いないの？ 帰っちゃうわよ」

再びユーリが大声を出した。師匠に対して随分と乱暴な言い方だ  
と思うのだが……。

奥の方でガタガタと音がしてから奥のドアが開き、長身の男性が入ってきた。身長は190cmぐらいで細身だ。金髪の長髪に尖った耳が突き出ている、緑色の目。人間離れた妖精のような整った顔だち。放出している魔力が並ではないところを見ると、エルフではなく、ハイエルフじゃないかと思う。20歳ぐらいに見えるが、寿命の無いハイエルフなら、見た目で判断するのは間違っているだろう。

「やあ、ユーリくん、来る頃だと待ってたんだ。エドワードくんに  
ギルバートくん、久しぶりだね。そして、君が噂のリオンくんかい。  
意外と若いねえ」

長身の男性が近づいてきて、俺に手を差し出した。

「リオン・ウォートです」

俺は長身の男の手を握りながら名前を名乗った。

「私はマーリン、マーリン・トワイライト。教授と呼んでくれたまえ」

教授が名乗った。ユーリが説明してくれた通りで、初めて会った  
気がしない。

「教授、マリアさんは、何処ですか？」

ユーリが聞いた。

「旅支度の買い物に行くと行って、出て行ったよ」

「そうかあ」

「なに、すぐに会えるさ、気を落とす必要はない。それよりも座ってくれたまえ、色々話を聞きたい。ユーリくん、奥でお茶を用意してくれないか」

教授はユーリに指示を出す。

「さあ、立ってないで、座ってくれ。」

と俺達を急かした。

部屋の中央に大きな作業用テーブルが置かれており、椅子が8人分ある。

俺達は部屋の片隅に荷物を置くと、ユーリは奥の部屋に入って行き、俺達は椅子に座った。エドワード、ギルバート、俺の順だ。教授は俺の対面に座った。

「教授から依頼があった、ワインとシャンパンが手に入りましたよ。注文どおり48本です」

すぐにエドワードが教授に報告した。

「それは嬉しいね。48本は運べないと思ってたよ」  
教授が嬉しそうな顔をした。

エドワードが俺に頷いたので、俺は椅子から立ち上がって、片隅に置いたリュックを取りに行き、48本のワインとシャンパンをテーブルの上に並べた。

ユーリが人数分のお茶を運んできて俺達にお茶を配った。

教授はワインの瓶を手持って銘柄を確かめた。

「ふむ。本物のようだね。約束通り1本8クラン、全部で384クランをエドワードくんの口座に振り込むよ、それと奥の部屋の棚に運んでくれないかな」

俺達はユーリの指示されて奥の部屋にワインとシャンパンを運んで席に戻った。

「さて、リオンくん。ユーリくんが古代遺品らしい武器を使ったと

報告書に書いてきたが本当かね？」

教授が俺を真っ直ぐに見詰めたまま聞いてきた。

「ユーリは何と報告したんですか？」

「何でも、見たことが無い武器で、20cmぐらいの筒のような形状で、次々と盗賊を殺していたそうだ。僕は魔弾銃かと思ったけど、魔力は一切、感じられなかったと報告書に書いてあった」

「そうですか、でも、あの武器は秘密にしておきたいので、見せられません。」

「そんなことを言わずに、頼むよ。見るだけで直ぐに返す。代わりに僕の取っておきの魔弾銃を見せてあげよう。」

完璧な形状を保ったままの奴だ。ここまで完璧な魔弾銃は、めったにお目にかかれない物だよ。誓って、取ったりしない。見るだけだから頼むよ」

教授は目を輝かせながら熱心に頼んできた。まるで子供みたいだと思ったが、好奇心が抑えられないのだろう。それに、俺はひと目で教授を気に入ってしまった。

「分かりました。でも、質問は無し。見るのも10分ぐらいにしてください」

一応、釘を刺してから、ウェストバックから拳銃を取り出して教授に渡した。口径が0.385+Pのオートピストルでカートリッジは16発入りだ。

教授が熱意を込めたキラキラとした目で見詰めながら拳銃を受け取った。

「これは、随分と重いんだね」

拳銃を回転させたり、銃身の部分を握って構えたり、頭上に上げて下から覗いたりしている。

俺は笑いたいのを必死に抑えた。まるで、インディアンが初めて銃を見た時のようだ。そんな映画のシーンが頭をよぎった。

ユーリがくすくすと笑った。

「教授、それじゃ、まるで、子供が新しいおもちゃを手に入れたみ

たいですよ。少しは落ち着いたらどうですか？」

と耐えかねた様子のユーリが教授に言った。

「失礼だね。君は。この武器がいかに珍しいものなのか、全く分かっておらん。そうだ、代わりにリオンくんは僕のコレクションの魔弾銃を見せてやってくれないか、奥から持ってきてくれ」

教授が顔を上げてユーリに言った。

「はいはい。分かりました」

ユーリは返事をすると思へ行つた。直ぐに、魔弾銃を持ってきて俺に渡してくれた。

ショットガンを短くして片手で持てるようにした感じの魔弾銃だった。

貴重な物と言う割にはユーリはぞんざいに扱っていたように思う。見た目だけなら教授が言う通り欠けた所はないし、良く手入れがされているようでピカピカだ。

オーソドックスなデザインだが洗礼された趣きがある。右手に構えて魔力のラインを引こうとしたら、肝心のコアが死んでいることに気づいた。これでは魔弾を撃つことができない。

コア自体が入っていないのか、コアが死んでいるのか、あるいは部品が破損して単に接続が切れているだけなのか、分解して見なければ分からない。

「教授、コアが死んでますよ。中身を見ましたか？」

俺は考えもなしに聞いてしまった。教授が目を見開いて俺を見詰めた。

「驚いたな、それが壊れているのが分かるのかね？」

と教授がテーブルに身を乗り出してきた。しまったと思ったが後の祭りだ。

「ええ、まあ」

俺はどうやって誤魔化そうと考えたため、口ごもってしまった。

「3年前に分解しようとかんばったんだが、何せ、壊れて戻せなくなるのが怖くてね。何もできなかった。」

一度、のこぎりを使って思い切って割ってみようとしたけど、思いの外、保護魔法が強力で、のこぎりが壊れてしまった。

さすがに、ハンマーで壊れるまで叩くなんてことは出来なくてね。そうだ、何なら分解してくれないか？ 君も興味があるだろう」

教授が段々と興奮した様子で言った。

「教授！。いいかげんにしてください」

突然、ユーリの大声が部屋の中に響き渡った。

教授はしまったと言う顔をして椅子に座りなおした。

「私もエドワードもギルも、さっきからずっと待っているんです。

いい加減、護衛の話をしてください。黙って聞いていれば、いい大人が調子にのって何ですか」

ユーリが真っ赤な顔で教授に怒鳴った。

「とても、1000年も生きてる知性あふれたハイエルフの賢者だと思えません、まるで、新しいおもちゃに夢中になった子供じゃないですか。

大体、いつも、この調子じゃないですが、直ぐに我を忘れるなんて、これが、魔術学院の考古学部門の最高顧問だなんて、恥ずかしいじゃないですか。……」

とユーリの説教が続いた。

「分かった。ユーリくん。すまなかった。この通りだ」

教授が頭をテーブルに押し付けて誤った。まるで、土下座みたいだと思った。

「全く、しょうがいがいわね。それじゃ、リオンは魔弾銃を教授に渡して、教授もリオンに返してください。」

ユーリが睨むと教授は名残惜しそうに拳銃を渡してきた。俺は魔弾銃を渡して拳銃をウェストバックに入れた。

「リオンくん、勘違いしないで欲しいのだが、僕はまだ352歳だ。1000歳じゃない、知らないかもしれないけど、それでも随分と若い方なんだ」

「教授」

ユーリが静かに、しかし、やけに迫力のある声で言った。

「いや、教育者としては間違いは正さないとね。」

さて、それじゃ、護衛の話だったね。4人ともわざわざ出向いて貰って申し訳ない」

教授はコホンと咳払いしてお茶を一口啜った。

「モントールから北に前文明の遺跡があつてね。マリアくんが3年越しでやっと調査許可を貰えたんだ。それで、調査に一緒に行かないかと誘いを受けた。但し、ユーリくん達のパーティを必ず一緒に連れて行くことが、マリアくんからの条件だった。」

片道10日で調査は1ヶ月以上を見込んでいるから、余裕を見ると最大で2ヶ月だ。遺跡は100年も前に見捨てられているから、中には魔獣が蔓延っているらしい。

それで、魔獣の退治も必要になるだろう。善は急げと言うことで、出発は明後日の朝だ。

メンバーは、僕と助手のマーガレット、マリア、馬車の御者と雑用係りの使用人が2人だ。護衛の報酬は1人30クラン。食料は使用人の2人に明日買出しに行く予定になっている。宿代も含めて必要経費はこちら持ちだ。

「どうかな、引き受けてもらえるかな？」

「マリアさんの依頼なら断れないわ。ねえ、エドワード」

ユーリがエドワードに聞いた。

「そうだな。」

エドワードが頷いた。

「リオンはどうするの？　引き受けるわよね」

ユーリが俺に聞いた。

「遺跡の調査ならお宝が見つかったら貰ってもいいの？」

俺は教授に聞いた。

「今回の調査は考古学部門として実施する。遺跡で見つかった遺品は考古学部門の管理下に置く事になるね。」

国の許可が下りたのも魔術学院の管理下での調査と言うのが理由だからね。

まあ、僕は考古学部門の部長だから。大した価値の無い物とか、魔法の剣とかなら問題ないし。

魔弾銃が10丁ぐらい見つかったら、1丁ぐらいは大目に見てもいいかもしれないなあ……。

そうだ、リオンくんが僕の助手になればいいよ。それなら、研究材料と言うことで君の物にできるよ」

教授がさも名案だと言う顔で言った。

「教授、冗談は程ほどにしてください」

タイミング良くユーリが教授を睨んだ。

「何も、睨まなくてもいいだろう。」

ユーリくん。近頃、君はマーガレットに似てきたんじゃないか？」

「教授の相手をしてたら、誰だってこうなります」

ユーリが文句を言った。

「それで、リオンはどうするんだ？　一緒に行かないか？」

エドワードが誘ってくれた。

「まさか、断ったりしないよな」

ギルバートが畳み掛けてきた。

モンツールは王都から東に200kmの所にある都市でベルガス海の沿岸にある。大規模な港を持っており、船による交易で栄えている都市だ。港のある街に行きたいと思っていたから、丁度良いかもしれない。

「分かった。行くよ」

俺はエドワードに答えた。皆は、当然だと言う顔で頷いた。

「ところで、遺跡の魔獣は大丈夫なの？」

ユーリが教授に聞いた。

「マリアくんが居れば問題ないよ」

教授が答えた。そう言えば、3人はマリアを人外と呼んでいたっけ。

「今度はリオンも居るしね。教授。リオンは特級魔術師ですよ」

ユーリが含み笑いを浮かべて教授に報告した。

「なんだって！」

教授が大声を上げた。

「教授、落ち着いてください」

ユーリも声を上げた。エドワードとギルバートの2人はニヤニヤしながら眺めている。絶対に面白がっている。

「そうだな、リオンとマリアさんの2人が揃ったら無敵だな」

ギルバートが言った。

「ユーリくん。特級魔術師と言うのは本当かね」

落ち着きを取り戻した教授がユーリに聞いた。

「ええ、昨晚、神聖協会の資格カードを手持って確認しました。間違いありません」

ユーリが真面目な顔をして報告した。

「驚いたな、こんなに若く見えるのに、特級の資格とは、……人間種族にしか見えないが、実は人間とは違う種族とか、ひょっとして200歳以上だったりしないかね」

教授は俺を見ながら聞いてきた。

「僕は平凡な人間ですよ。年齢も16歳で間違いありません」

「しかも、私達と出会って1度も魔法を使っていないんです。魔法なしで赤眼の魔女と竜殺し、いえ、赤衣の盗賊団の殆どをリオンが殲滅しました」

ユーリは笑いを抑えた顔で声だけは真面目に教授に報告した。

「ふーむ。そう言えば、魔闘気の使い手と報告書に書いてあったね。ユーリくんを疑っている訳じゃないが、実際に自分の目で見ないととても信じられんよ。……。」

教授がぶつぶつと呟いた。

「教授、集合は明後日の8時、ここの裏口で良いですか？」

エドワードが切り出した。

「ああ、そうだね。それで良いよ」



「それと、護衛用に馬を4頭、用意してください」

「君たちも馬車に乗れるよ」

「馬車に乗ってたら警戒できませんよ。馬車には見張り台は無いですよね」

「ああ、成る程、その通りだね。分かった。用意するよ」

「それじゃ、俺達は宿屋を探しに行くか？ 明日は、旅の準備だな」

ギルバートが提案した。

「ユーリは、学院に残るだろう」

「ええ」

「それじゃ、俺達で宿屋を確保しておく、後で連絡を入れるよ」

「お願いね」

エドワードが立ち上がったので、俺とギルバートも立ち上がった。

「そうだ、リオンくんはちょっと待ってくれないか？」

「リオンに何の用？」

俺の代わりにユーリが教授に聞いた。

「ああ、さっきの続きだよ。リオンくんは魔弾銃を知ってるみたいだからね。できたら、分解して欲しいんだ。それに、コアが死んでいると言ってたじゃないか。コアが死んでるとは、どういう意味かと思ってね」

教授は言うど魔弾銃を俺の前に置いた。

「エドワード、時間が掛かりそうよ、私がリオンの面倒見るから先に行って」

ユーリが言うど。

「そうだな、それじゃ、頼む」

エドワードが答えると、ギルバートと一緒に部屋を出て行った。

## 21話

「それじゃ、コアのことを教えてくれたまえ」

エドワード達が出て行くのを待ちかねていたかのように教授が俺に言った。

「教授は魔弾銃を撃ったことは無いですか？」

「残念ながら無いよ。使える魔弾銃は王国が厳重に保管しているらしいからね。教会が相当な数の古代遺跡の武器を確保しているらしいと噂で聞いたことがあるよ」

俺が得た知識では王国には銃刀法のような規則は無いのだが、ひょっとして、日本のように銃を持っているだけで犯罪になるのかも不安になった。

「ひょっとして、魔弾銃を持っていたら犯罪になりますか？」

「いや、犯罪にはならないよ。しかし、王国か教会が買い取ろうと必死になるだろうね。学院も手に入れようとするかな、まあ、学院と言うよりも僕が、だけどね」

と教授は、あははは……。と笑った。

「そうですか、実は僕の師匠が魔弾銃を持っていたので、前に使ったことがあるんです。さっき、見せた銃も師匠から無理を言っただけでもらった物です。それで、魔弾銃に魔力線を通そうとしたら、魔力線を通す物がなかったの、コアが死んだと言ったのです」

「ひょっとして、魔弾銃の中に魔水晶が入ってるの？」

隣に座ったユーリが聞いた。魔水晶とは魔術師の杖に付いている魔法の媒体となる石だ。

「そうだよ。魔弾銃って、例えば、魔弾を撃つための専用の杖みたいな物なんだ。普通の杖で魔弾を撃つよりも遥かに楽に撃てるようになるんだ。しかも慣れれば連射も可能になる」

「へえ、凄いわね。」

「リオンくんの師匠は誰だい？」

「それは言えません。師匠のことは秘密にすると師匠と約束しました。それに、僕も名前を知らないです」

「リオンの師匠って、私達にとってのマリアさんのような存在だそうですね。小さい頃に引き取られて、師匠に育てられたそうですね」

「なるほど。……それで、その魔弾銃を分解できるかな？」

俺は魔弾銃を手にとって、じっと、意識を集中した。魔弾銃は強力な保護魔法で保護されているのだが、魔力で押さえ込めば分解できそうな感触を得た。

魔弾銃の構造を確認してみると、寄木細工の秘密箱のような仕掛けがあることに気づいた。ドライバーを使って、キーになるパーツをずらすことができれば、分解することが出来そうだ。

俺はウェストバックからドライバーセットを取り出し、魔弾銃の仕掛けを弄って2つに割った。

「これは驚いた。こんな仕掛けになっているとは」

教授が驚いて言った。何種類かのドライバーを使って構成部品を1個ずつ取り外してテーブルに並べた。

「これがリオンくんが言ったコアだね。成る程、確かに魔水晶だ。黒く濁っている。これじゃあ、使い物にならないね。しかも加工された魔水晶だなんて、とても作れないよ。しかし、これと同じような物をどこかで見たなあ」

教授は魔水晶を親指と人差し指で摘んだまま首を傾げた。

「じゃあ、魔水晶さえ何とかなれば直るの？」

ユーリが聞いた。

「そうだね、壊れているのは魔水晶と、これと、これと、これだね。」

俺は壊れている部品を取り出して横に並べた。

「ふむ、それなら細工師に頼めば、何とかなりそうだね。問題は魔水晶だが、やっぱり見た記憶があるよ。下の物置部屋の何処かに転がってるかもしれんね」

教授が言った。

「それじゃ、教授はその部品を直して貰ってよ、私達は下へ行ってその魔水晶を探してみるわ。リオンも一緒に来て」

ユーリが椅子から立ち上がって俺を引っ張った。

「分かったよ」

俺はユーリに引かれて、椅子から立ち上がった。

俺はユーリに連れられて教授の研究室を出て下のフロアに移動した。

ユーリに引っ張られて倉庫となっている大部屋に入った。ここと同じような部屋が4部屋もあるそうだ。

ユーリがガラクタと称した通り、壊れた部品が詰まれた棚が並んでいた。俺は片隅から順番に棚に詰まっている部品を調べ始めた。

部品だけを見ると、何の装置なのか分からないのだが、どのような装置なのか、仕掛けがどうなっているのか、色々な妄想が頭に浮かぶ。

教授が子供のように夢中になる気持ちが分かった気がする。

「もう、リオンって教授とそっくりね。今、気づいたわ。そうやってガラクタを触っている様子が、教授と同じだわ。何を探しているか、ちゃんと覚えてる？」

「もちろんだとも、魔弾銃のコアだろう」

「あー。やだやだ。今の言い訳って教授と全く同じよ。まるで教授が2人になったみたい。兎に角、この部屋の調査は終わったわよ。次の部屋に行くわ。今度はちゃんと探してよ」

ユーリは俺の袖を引っ張って次の部屋に向かった。そして、4部屋の倉庫を調べ終えて、教授の部屋に戻った。

教授の研究室に戻ると、教授は隣に座っている赤毛の女性と話をしていた。

「マーガレットさん。こんにちわ」

ユーリが挨拶すると、マーガレットと呼ばれた女性がこちらに振り向いた。

赤い目で、尖がった耳が赤毛の頭から突き出ていた。教授と同じハイエルフ族のようだ。ユーリと同じような夏バージョンの魔女子の格好だが、ユーリよりも明らかにスタイルが良い。

凶悪な胸が少しはみ出ているようだ。座っているので身長は分からないが、ユーリよりも背が高そうだ。

「ユーリちゃん。こんにちわ」

「そちらお坊やが、リオンくんなの？」

「はい。リオン・ウォートです。よろしく御願います」

俺はお辞儀をして、名前を名乗った。

「あら、礼儀正しい坊やね。私は教授の助手、マーガレット・アマデウス。マーガレットと呼んでちょうだい」

と立ち上がって名乗った。

身長が175cmぐらいの長身の女性だ。胸に反して細身で腰が細い。世界トップモデル並みのスタイルだ。

「教授、下のフロアにはありませんでした」

ユーリが教授に報告した。

「そうか、2人ともありがとう」

教授が残念そうな顔をした。

「何のこと？」

マーガレットが教授に聞いた。

「2人にこれと同じ物が無いか、下のフロアを探して貰ってたんだよ」

教授がマーガレットに魔弾銃のコアを見せた。

「あら、ここまで濁った魔水晶は珍しいわね。どうやったら、そこまで黒くなるのかしら、その魔水晶がどうかしたのですか？」

「これは魔弾銃のコアになっている魔水晶なんだよ。良く見れば、分かると思うが、特殊な魔法回路が組み込まれているだろう。以前に、どこかで見た覚えがあるんだけど、思い出せなくてね。」

教授が説明すると、マーガレットは教授の手から魔水晶を取り上げ、窓に透かして眺めた。

「あら、この魔法回路なら見覚えがあります。確か、80年前に教授が凄い発見だと騒いでらしたわ。重要コレクション用の倉庫に保管してあるはずですよ」

マーガレットが答えた。

「そうだ、思い出したよ。そうか、あそこに入れたんだ。すっかり忘れてたよ。あそこは僕しか入れないからすぐに取りに行くよ」

教授が嬉しそうに言いながら立ち上がった。

「待ってください。まだ、打ち合わせの途中です。そんなおもちやのことは明日にしてください」

マーガレットが教授を捕まえて椅子に座らせた。

「おもちやとは酷いな。あれがあれば魔弾銃が直るかもしれないんだよ。こんな凄いことが、どうして理解できないのか、僕には謎だよ」

「そう言えば、テーブルの上に分解したおもちやがあると思ってましたが、ひょっとして、魔弾銃を分解したんですか？」

「そうなんだよ。リオンくんが分解してくれてね。しかも、あの魔水晶があれば、直りそうなんだよ」

「そうでしたか、それで今日は異常に機嫌が良かったのですね、何か新しいおもちやを見つけたのだろうと思いましたが、まだ、遺跡の調査に出発もしてないのに、どこで見つけたのか不思議に思っていました。」

それにしても、あの魔弾銃を分解できたとは凄いわ。リオンくんは教授よりもよっぽど有能なのですね。私が止めなければ、鍛冶場の金床とハンマーで叩き壊されるところでした。私に感謝してほしいですよ」

2人の話を聞いていたユーリが溜息をついて、「お茶を入れてくるね」と俺に言うてから、奥の部屋に行った。

俺は教授とマーガレットとは反対側のテーブルの椅子に座った。

「まったくだ、君には感謝しているよ。そうだ、リオンくん。さっきは冗談だったが、今度は本気で助手にならないか？ 明日の昼に魔弾銃の組み立てをやって貰う必要があるし、それに何よりも魔弾銃が直りそうだからね、何かお礼がしたいんだよ」

「教授の助手ですか？」

「私の助手に登録すれば給金がでるよ。学院の施設を使えるし、自由に研究棟に出入りできるし、腕輪を使えば、何時でも何処でも連絡が可能になるしね。」

それと、職員用の最上級の独身用個室も用意するよ。勿論、君の自由を奪うつもりは無いよ。助手だからと言って、何もしなくて良いし、私も君に命令はしないよ。

まあ、ちょっとした質問か、お願いぐらいはするかもしれないが、勿論、断ったとしても、怒ったり、恨んだりしないから、その点は安心してくれたまえ」

「あら、マリアさんと同じ待遇ですか？ 余程、リオンくんが気に入ったようですね。そう言えば、なんとなく、マリアさんに似てるわね。」

兄弟みたいに見えるけど、種族が違うから血縁者のはずがないわね」

「マーガレットくん。その通りだよ。しかもリオンくんはマリアと同じ特級魔術師だよ」

「あら、そうですか、その点もマリアさんと同じなんですね」

マーガレットが教授に答えた。

「おや、マーガレットくんは驚かないんだね」

「そうですね。言われて見ると不思議ですわね。マリアさんと似てると思ったから、当然かなと思ってしまいましたわ」

マーガレットが答えた。教授がマーガレットに何か合図をしたように見えた。

「リオンくんは、魔術師ギルドと特級魔術師のカードを持っていますか？」

マーガレットが聞いた。

「はい。持ってます」

「助手に登録するために、データを登録しますので、貸して頂けませんか？ 奥の端末に登録したらすぐにお返ししますわ。そうね、10分ぐらいかな」

と説明するとマーガレットは俺に向かって手を差し出した。なんだか、断れない雰囲気だ。ヘタレな俺は知的な美女にお願い？ いや、命令されてしまうと、とても抵抗ができない。

俺は、諦めてウェストポーチからカードを出して、マーガレットに渡した。マーガレットが奥の部屋に向かうと、お茶を運んできたユーリが入れ違いに入ってきた。

俺の前にカップを置いてくれたので。

「ありがとう」

とユーリに礼を言った。

「リオン。エドワードから宿屋を確保したと連絡があったわよ」

「そうだ、明日の昼に部品の修理が出来るそうだよ。修理と言うよりも作り直しだけだね。全く同じ物を作ってくれるそうさ。魔水晶も用意しておくから、昼にこの部屋に来てくれないか？」

教授が俺に頼んだ。

「はい。分かりました」

俺は諦めて答えた。とっくに抵抗する気持ちが無くなっていた。完全に流されていると自覚したが、日本人の性だ。仕方がない。

「それと、ユーリくんの魔力測定は午前の最後の11時だよ」

「分かったわ」

ユーリは、教授に返事をする、と、カップのお茶を飲み始めた。教授は、黙って分解した魔弾銃の部品のスケッチを始めた。

暫くすると、マーガレットが戻ってきた。

「リオンくん。これ返すわね」

と2枚のカードを渡してくれた。

「学院の職員カードは、明日になるわ。腕輪の更新もあるから、明



日、この部屋に来てください。一緒に事務局に行くわ。独身者用の個室は、ちょうどリホーム中の部屋があったので、確保しておいたわ。来月から使えるわよ。必要最小限の家具は揃っているけど、必要な物があつたら、自分で買ってください」

「あれ、どういうこと？ ひょっとして、リオンは教授の助手になったの？」

「ええ、その通り、マリアさんと同じ待遇よ」

「そうか」

とユーリが納得した。

「ありがとうございます。」

と俺はマーガレットにお礼を言った。

「どういたしまして、これで、お仲間ね。分からないことがあつたら、何でも相談してちょうだい。恋の相談も受けるわよ。よろしくね」

「こちらこそ、よろしく御願います」

マーガレットは、教授の方を向くと

「教授、用意する物はさっきのリストで大丈夫ですか？」

と聞いた。

「ああ、そうだね、あれで十分だろう。頼むよ」

と教授は顔を上げて答えた。

「分かりました。それじゃ、私は、事務局に依頼してきます」

と言うと、マーガレットは部屋を出て行った。

「リオン。個室を貰ったの？」

とユーリが聞いた。

「うん」

「いいわね。独身者用の個室なら部屋が3つぐらいあるから、私達も泊まれるわね」

「そうなの？」

「私達なら1個の部屋でごろ寝でいいから、大丈夫よ。それより、宿屋に行きましょう。もうすぐ日が暮れるわ」

「ああ、夕食なら、奢るから、一緒にどうだい？」

と再びスケッチの手を止めて、教授が聞いた。

「残念だけど、エドワードとギルが宿屋を確保したから無理です」

「そうか、それじゃ、明日、リオンくんを連れて来てくれ」

「はい。分かりました」

ユーリは返事をする、俺のカップも一緒に茶器を奥の部屋へ運んで戻ってきた。

「それじゃ、教授、また明日」

ユーリが教授に言う。

「ああ、また明日」

教授が返事をした。俺は教授に頭を下げてユーリと一緒に部屋を出た。

エドワードが確保した宿屋に着いた時、すっかり暗くなっていた。風呂に入ってから4人で食堂に入った時、時刻は8時を過ぎていた。夕食を食べながら、ユーリが学院の出来事を2人に説明した。夕食を食べ終えた頃にエドワードが今までの精算結果を報告した。1人あたり56クラン。部屋に戻ったらエドワードが渡してくれるそう。

昨晚の宴会で懲りたのか、誰も酒を追加しなかった。ビールジョッキには半分から3分の1ぐらいのビールが残っていた。

エドワード達のパーティに参加して11日目になるのだが、3人とは随分長く一緒にいるような気がする。

「賞金を足すと、156クランかあ、なんか、一気に金持ちになったな」

ギルバートが嬉しそうに言った。

「去年1年で稼いだ金額と同じくらいかしら」

ユーリが言った。

「リオンが仲間になって、まだ、10日ぐらいか。信じられんな」

エドワードがしみじみと言った。

「あら、そうだっけ、なんだか、半年ぐらい一緒にいたような気がするわ」

「半年は言いすぎだろう。だけど、1ヶ月、いや。2ヶ月以上のよ  
うな気はするな」

「明日は、ユーリとリオンは学院に行くなら、俺とギルは旅の支度  
だな。何か欲しい物はあるか？」

エドワードが聞いた。

「そうね、おやつを大量に仕入れておきたいわね。そうだ、明日の  
朝、リオンと一緒に買い物してから、学院に行くわ。リオンが居れ  
ば幾らでも買えるもの」

ユーリが答えた。

「おっ、それはいいね。それじゃ、俺の分を買ってよ」

ギルバートが調子に乗って言った。

「いいわよ。みんなの分を買っておくわ。いつものケーキ屋さんの  
お菓子を全部、買い占めて置くわ」

ユーリが物騒なことを言った。どうやら、本気で言っているよう  
だ。

「そいつは、豪勢だね」

ギルバートが言う。

「程々にしとけよ。そんなことをしたら、変な噂が立つぞ」

エドワードが戒めた。

「そうね、それなら、半分ぐらいにするわ」

「1克蘭以内にしろよ。1克蘭以上は、必要経費として認めな  
い。1克蘭以上なら、自腹にしてくれ」

「ええー。最低でも2克蘭。いえ、待って、マリアさんとマーガ  
レットさんの分もあるんだから、3克蘭よ。3克蘭にして」

「しょうがない、それなら、3克蘭だ」

エドワードが真面目な顔で答えた。

俺は呆れて声が出なかった。3克蘭なら30万に相当する。3

0万円分のお菓子って、どれだけの量になるのか。1ホール3千円としたら100個、6千円の高級品なら50個。想像したら気分が悪くなってきた。

「そう言えば、リオンの弓って、あのボルケーノの魔法で焦げてたのに、何時の間にか元通りになってたわね。確か革鎧も焦げてたわ、魔法で直したの？」

突然、ユーリが聞いた。

「魔法は使ってないよ。弓と革鎧は復元の魔法が付与されているから自動に修復されるんだ」

「復元の魔法って、……いいわ。今更だから、もう驚かないわよ。でも、リオンが魔法を付与したのでしょうか？ 魔法を付与されるほどの弓じゃないわ。素材は普通だったもの」

「まあね。元は迷宮都市の武器屋で買ったノーマル品だよ」

「もういいわ。考えないことにする」

ユーリが呆れた顔をしてそっぽを向いた。

「復元の魔法って、何だよ」

ギルバートが聞いた。

「多少の傷なら自動に修復される魔法よ。地下迷宮で強力な魔法の武器や防具が手に入るでしょう。古代遺跡から発掘される魔道具もそうだけど、そう言った、強力なマジックアイテムは壊れないように、強力な保護魔法と復元魔法が掛かっているのよ。ちなみに、ノーマル品の武器や鎧にそんな魔法を付与できる魔術師なんて学院には居ないわよ」

「なるほど」

ギルバートが簡単に納得した。

「聞きたくないけど。リオンが着てる革鎧って、温度調整の魔法まで掛かっているの？ 汗を掻かないから不思議に思ってたわ。エドワードとギルは根性で平気な顔をしてるみたいだけど、いつも、汗臭いのよ。でも、リオンは全然、汗臭くないのよね」

ずっと、一緒に居たのだから、ばれても仕方がないだろう。

「まあね。その通りだよ」

「ひょっとして、私のロープに魔法を付与できる？」

「時間をくれたら、やってもいいよ。その代わり、内緒にしてよ」

「それなら、いいわ。内緒にしてあげる」

ユーリがうふふと笑った。正直、ちよつと怖い。

「なあ、リオン。俺達は仲間だよな、きつと、俺の鎧も魔法を掛けてくれるよな」

ギルバードが怖い顔で聞いてきた。

「勿論だよ。皆の武器と鎧を強化するよ。まかせて」

俺は顔を引きつかせながら、答えた。エドワードも怖い顔で俺を睨んでいた。

部屋に引き上げると、ユーリがロープとマントにブーツと装備一式を押し付けてきた。仕方がないので、エドワードとギルバードの装備品も受け取った。そして、その晩にベッドに入ったままカスタマイズ画面を使って仕上げた。

翌朝、朝食後にカスタマイズした装備品を皆に渡してから魔術師の格好に着替えた。

「あら、魔術師の格好も似合うわね。なんだか、神秘的な雰囲気が漂ってるわ」

ユーリが感想を言った。ユーリもカスタマイズした魔術師の服装に着替えた。

「いいわね。暑くないし軽いわ。なんか服を着てない見たいだわ、ありとうね、リオン」

ユーリが嬉しそうに礼を言った。

予定通り、俺はユーリに連れられて、ケーキ屋さんで大量なお菓子を入れたから、学院に向かった。

## 22話

「おはよう」

とユーリは大声で挨拶しながら、教授の部屋に入ったので、俺も後続いた。

教授とマーガレットが並んでテーブルに座っていた。

「やあ、ユーリくん、早いな」

教授が挨拶した。

「おはよう。リオンくんの魔術師の格好は、似合うわね。昨日の鎧姿より、こっちのが神秘的で、ぐっと来ちゃうわ」

マーガレットがとんでもないことを言った。

「それじゃ、私は魔力測定に行つて来ます」

ユーリは言うど、部屋を出て行つた。俺は担いでいたリュックを部屋の片隅に置いた。

「あら、そのリュックは無限バックじゃないの？」

マーガレットが聞いた。

「ああ、その通りだよ。昨日はそのリュックから48本のワインとシャンパンが出てきたよ」

教授がマーガレットに答えた。

「あらまあ。凄いわね」

マーガレットが普通に答えた。

「それじゃ、リオンくんを事務局に連れて行くわ」

「ああ、お願いするよ」

俺はマーガレットに連れられて事務局に向かった。

事務局で、登録処理を行い。職員用身分証、入館証、助手用の魔術学院の制服に数冊の小冊子を貰い。神聖協会の腕輪に学院のAPをインストールして教授の部屋に戻った。

「やあ、リオンくん。待ってたよ。さっき、魔弾銃の部品が届いたんだ。早く組み立ててくれないか」

教授が挨拶も抜きで言ってきた。魔力測定が終わったのか、教授の対面にユーリが座っていた。

「あら、予定よりも早いわね」

「まあね、1時間おきに催促した甲斐があったよ」

俺は手に持った荷物をリュックに入れてテーブルに座った。

テーブルの上には魔弾銃の部品が綺麗に並べてある。コアになる魔水晶を手にとって確認してみると、魔弾の威力も属性も自由に制御することが出来る汎用性の高い魔水晶だった。

魔力の許容量もあまり高くない、魔力増幅倍率は5倍か6倍ぐらいで、凝縮率の限界値も高くない。

俺はウェストバックからドライバーセットを出して魔弾銃を組み立てた。

殆どの部品を組みあげた時、ドアが開いて誰かが入って来た。

「あっ、マリアさん。こんにちは」

ユーリが挨拶する声が聞こえた。

「マリアくん。丁度、良い所に来たね」

教授が言うのが聞こえた。

「マリアさん。こんにちは」

マーガレットの声が聞こえた。そして、「皆さん。こんにちは」と女性の声が聞こえた。

気になったが、途中で手を止めることができないため、大きく2つに分かれていた魔弾銃を1つに合わせる作業を続けた。

銃身の先頭をひねって、魔弾銃を固定してから部屋に入ってきた女性を見た。

黒髪黒目の美少女が立っていた。俺は美少女が日本人かと自分の目を疑った。

身長は168cmぐらい、癖の無いロングヘアの黒髪に黒い瞳。整った顔立ち。17か18歳ぐらいの美少女だ。

よく見ると、尖った耳が黒髪から出ているのに気づいた。体から放出されている魔力からハイエルフだと分かった。

しかし、黒髪で黒い目をしており、西洋系白人のような顔なのだが、なぜか、同じ日本人だと言う印象を受けた。

冷静な部分ではハイエルフだと認識しているのだが、俺には超美少女の日本女性のように思えた。見知らぬ女性も俺をじっと見詰めていた。

「ああ、マリアくんは初めてだね。こちらがリオンくんだよ」  
教授が紹介してくれた。

「初めまして、マリア・エーデルワイズです」

マリアが自己紹介をした。

俺は慌てて立ち上がり、「リオン・ウォートです。こちらこそ、御願います。」となんとか、挨拶を返した。

マリアはにっこりと微笑んでからマーガレットの隣に座った。

マリアの微笑は、物凄い武器だ。俺は唾然としたままマリアに見惚れてしまった。

「皆揃って、何をしてるの？」

マリアが教授に質問した。

「リオンくんが、僕の魔弾銃を修理してくれてね。今、組み上がったところだよ」

教授がマリアに説明した。

俺は横に居るユーリに脇腹を突かれて「何をぼうとしてるの、早く座ったら。」と言われて、慌てて椅子に座った。

俺は気持ちを落ち着かせて、魔弾銃の組み立てに集中した。秘密箱のような仕掛けを戻して完成させた。

座ったまま、右手で構えて魔力線を通してみると、ちゃんと直っていると言う感触を得た。

「教授、使えそうです」

俺は魔弾銃を教授に渡した。

「そうか、これで、学院長に魔弾銃のレプリカと馬鹿にされずに済



む。早速、試し撃ちに行こう。実験室を確保してある」

教授が立ち上がり1人で出て行った。

「ちょっと、教授。待ちなさい」

マーガレットが慌てて立ち上がって、教授を追いかけた。ユーリも立ち上がると。

「マリアさんも、行きませんか？」

「そうね。何だか良く分からないけど、私も行くわ」

マリアも立ち上がった。

俺も立ち上がって2人の後を追いかけた。

魔法実験室に入ると、教授とマーガレットが魔法を測定できるように、的と測定装置をセットしていた。

準備を終えると教授は所定の場所に立って、魔弾銃を的に向けて構えた。暫く、的を狙っていたが、魔弾銃を降ろして俺の方に顔を向けた。

「リオンくん。魔弾銃はどうやって撃つのか、教えて貰えないかね」

「もう、教授ったら」

ユーリは言うのと、笑い出した。つられて、マーガレットとマリアもくすくすと笑っている。

「えっと、昨日、説明した通り、魔弾銃は、魔弾魔法に特化した魔法の杖だと言えます。つまり、魔弾銃を杖の代わりにして、魔弾魔法を撃てばいいです。ご存知の通り、魔弾銃の中心には、特殊な加工をした魔水晶が嵌め込まれています。杖と同様に、まずは魔弾銃の中にある魔水晶に魔力線を引いてください。後は初級魔法の属性魔弾の魔法を撃つイメージで、魔力を込めてください。呪文も魔法陣も無しで、魔力も10分の1ぐらいの少しの魔力です。属性は何でもかまいません」

「そうか。魔法の魔弾を撃てば良いんだね」

教授は答えると、再び、右手を真っ直ぐに的に向けて魔弾銃を構えた。緑色の圧縮された魔弾が的に向かって、一直線に飛び、的に

当たって爆発した。

「これは、凄い」

教授が嬉しいように声を上げた。

「マーガレットくん。測定値を読み上げてくれ給え」

教授がマーガレットに言うと、マーガレットがディスプレイを見ながら数値を読み上げた。

「凄い威力だ。それに、速度も凄い。普通に魔弾と比べると、威力も速度も倍以上もあるね。これは、凄い武器だ」

教授が驚いた声を上げた。そして、再び、魔弾銃を構えて試し撃ちをした。今度は炎属性の魔弾だった。ただし、どちらかと言うと魔弾と言うよりも、その上位魔法の爆炎球の魔法になっていた。威力は高いのだが、圧縮されていないので魔弾銃の効果を全く生かしていなかった。

「教授、込める魔力をもっと少なくしてください。魔力の5分の4は無駄になってます。それと、もっと凝縮率を上げて貫通力を持たせてください」

「そうか」

教授は答えると。魔弾銃を撃った。

少しはましになっているのだが、凝縮率が全然足りていない。

「もっと、凝縮してください。少ない魔力をぎゅっと、凝縮して魔弾を小さくするようなイメージです」

再び、教授が魔弾銃を撃ったが、凝縮率はあまり上がっていない。「ふむ。なかなか、難しい物だね。リオンくん。ちょっと見本を見せてくれないか？」

教授が俺に魔弾銃を差し出した。確かに、言葉で説明するよりも、実演した方が、分かり易いだろう。

俺は教授から魔弾銃を受け取って所定の位置に立った。

「繰り返しますが、普通の魔弾の魔法の10分の1の魔力を込めてください。そして、凝縮します。そうすると、魔弾銃のコアが凝縮した分の魔力を増幅してくれまし、速度と貫通力も同時に増幅して

くれます。2倍に凝縮すると威力と速度と貫通力を2倍に増幅してくれます。この銃なら、最大5倍まで、増幅してくれますので、5倍に凝縮する必要があります」

と俺は説明してから、最大の効果を引き出すために、5倍凝縮で炎の魔弾を的を狙って撃った。

ヒュッ、バーンと的が振動した。

「凄い！マーガレット、数値を読んでくれ」

教授が興奮した口調で命令すると、マーガレットが数値を読み上げた。

「凄まじい威力だ。これで、消費魔力が10分の1かね」

「そうです」

「それから、この魔弾銃に入れたコアは、反属性にも対応していますので、反属性の魔弾も撃てます」

俺は説明して炎の反属性の魔弾を撃った。教授が命令しなくてもマーガレットが数値を読み上げた。

「反属性は、ちょっと難しいですけど、これで、レッドドラゴンを倒せます。そして、慣れると連射も出来ます」

俺は、ダッダッダッ……と、秒間1発ぐらいの連射で10発ほど撃った。

マーガレットが10発分のデータを読み上げ始めた。俺は教授に魔弾銃を差し出すと、咄然とした顔の教授が魔弾銃を受け取った。

「まいったね。これほどとは、……予想外だよ。王国が必死になって、魔弾銃を管理下に置こうとする理由が良く分かったよ。こんな銃があったら、騎士団の1個小隊ぐらい、あっと言う間に殲滅できるね」

教授が言った。

「まあ、使いこなせばですよ。流石に連射は難しいですよ」

「成る程ね。使えるようになるのは難しいようだね」

「とにかく、練習あるのみです」

「うむ」

教授は頷くと、定位置に立って魔弾銃を構えて撃った。

「うーむ。リオンくんのようにには行かないねえ」

と呻くと魔弾を1発ずつ、丁寧に撃ち続けた。

30発ぐらいで、教授は撃つのをやめた。

「どうやら、魔力切れだ、今度はマーガレットくん。やってみたまえ」

教授はマーガレットと交代した。そして、マリア、ユーリの順番で、魔弾銃の試し撃ちが行なわれた。

俺以外の全員の魔力が枯渇するまで、試し撃ちが行ってから教授の部屋に戻った。

俺以外の全員が魔力消費による疲れきった様子で椅子に座った。

マーガレットが奥の部屋に行くと、魔力回復の効果がある苦いお茶を入れて戻り全員に配った。俺には普通のお茶を入れてくれた。

「マーガレットくん。僕の端末に測定データを転送してくれないか」

「はい。教授」

「さすがに、疲れたね」

と教授が呻いた。

「皆さん。魔力が無駄になってましたよ。10分の1の魔力で十分なのに、魔力を込めすぎです。たぶん、魔弾の魔法のイメージの所為ですね。魔術式が魔弾ですから、難しいと思いますが、魔弾とは、違う、新しい魔法だと認識を改めた方が良いでしょう」

「なるほどね、新しい魔法を習うつもりで、練習しろと言うことだね。分かった」

教授が頷いた。

「リオンくんは、何処で、魔弾銃の使い方を習ったの？」  
マリアが聞いた。

「師匠に教えてもらいました」

「師匠って誰？ 名前は？」

「名前は僕も知らないです。小さい頃から師匠と呼んでました」

「どんな人なの？」

「えっと、人間種族ですよ。マリアさんのように黒髪黒目でした」

「東方のアールスト諸島の人かしら？」

「分かりません」

「そうですか」

「リオンは師匠と言ってる人に小さい頃に拾われて、育てられたそうですよ。今年の3月になくなったそうです」

ユーリがマリアに答えた。

「すると、リオンくんも魔弾銃を持ってるのかね」

「師匠に教えてもらって、かつ、死亡したとしたら、持っていないければ変だ。実際に教授と同じようなデザインで、倍率10倍の優れ物の銃を持っている。」

「ええ、そうです。師匠の遺品です。師匠の遺言で口止めされてますから、何も答えられませんので、聞かないでください」

「俺は釘を刺すことにした。何せ、嘘っぱちだ、聞かれても答えられないのだ。」

「うむ。まあ、しょうがないか」

教授が頷いた。

暫く休んでからユーリに頼んで図書館に案内して貰った。ユーリも本を返却して何冊か借りたいそうだ。

魔術師学院の図書館は一般の総合大学の図書館よりも遥かに大きい。6階建ての大きな建物の全てが図書館になっていた。

俺は図書館に入り、蔵書を丸ごとライブラリに複写し、ついでに職員専用の書庫、特級魔術師資格が無いと閲覧できない書庫をライブラリに複写した。学院長の特別許可がないと入れない禁書の書庫も、こっそりと、ライブラリに複写した。

ユーリは20冊ぐらいの分厚い本を借りて、俺のリュックに入れてから宿屋に戻った。

7時頃に、いつものように4人揃って食堂に行き、定食セットを食べた。

「冒険者ギルドで、赤衣の盗賊団が倒されたと、噂になってたぜ。首領を倒したのは、ダンカンのチームだってよ」

ギルバードが話を切り出した。

「なんでよ」

ユーリがギルバードに文句を言った。

「俺達の名前は出てたか？」

「いや、リオンの名前は出てなかった」

「そうか、それは良かった」

「リオン、悔しくないの？」

「目立ちたくないからね、ダンカンが賞金を皆で分けても良いかと聞いた時、ダンカンのチームが倒したことにして、俺の名前を出さないようにしてくれたら、良いよと答えたからね。ダンカンが約束を守ってくれただけだ」

「そうなんだ、でも、どうして？」

ユーリが聞いた。

「有名になると、ギルドや国から、面倒な仕事を押し付けられるからさ。例えば、どこかに、凶悪なドラゴンが現れて、大事件になつとする。ギルドか国の名前で、ドラゴンを倒せと命令されるかもしれないだろう。俺、そんな面倒なこと嫌だよ」

「そうかあ、ドラゴンを倒すなんて、無理だよな。でも、リオンなら倒せるんじゃないの？」

「そう言う問題じゃないよ。つまり、大事件が起きる毎にギルドや国から良いように使われるのが嫌だと言うことだよ」

「なるほど、有名になったら有り得るわね」

ユーリが納得して答えた。

「だけど、教授や学院に知られたわよ。今更、遅いんじゃない」

ぶっ、と思わず、ビールを吹いてしまった。確かに、ユーリの指摘通りだ。しかし、今更後悔しても遅い。

「うーん、……。そうだよなあ、まあ、……。いつか」

「って、おい、良いのかよ」

ギルバードがビールを吹いた。

「今更だもんな。仕方がないよ。幸い、明日からモンツール行きだから、戻る頃にはほとぼりが冷めてるよ」

「まあ、いいけどよ」

「それより、アラーム王国が復活して、ソウルナイトが出現したって噂があったぞ」

「嘘でしょう。ソウルナイトは伝説よ。実在しないわ」

「アラーム王国の復活は本当かもしれない、モーマッド王国に侵攻したそうだ」

「それじゃ、アラーム王国とモーマッド王国が戦争状態になったの？」

「まだ、正確なところは分らんけど、本当かもしれないな、マーモッド王国から支援の使者が来て、派兵するかどうか協議中だと言ってた」

「戦争かあ、嫌だわ」

「派遣されるのは、王国の騎士団さ。俺達冒険者は関係ないな」

「ベンガル王国が騎士団を派遣すれば、ノースワイド王国も騎士団を派遣するだろうから、モーマッド王国が負けることはないだろう」

「明日から、また野宿だからな、今日は早めに休むか」

「そうだな」

俺達は、ビールを飲み干して、部屋に引き上げた。

## 23話

研究棟の裏口に行くと、4頭の馬が付けられた馬車が止まっていた。

以前、護衛した荷馬車と比べると、かなり小さいのだが、それでも小型のマイクロバスぐらいのサイズがある。前の半分に3列の座席が作られており、乗り込むための扉と窓が作られており、後ろの半分が荷台になっているようだ。

荷台の後ろに、鞍を着けた4頭の馬が繋がれており、4頭の馬から少し離れたところで、教授達がたむろしていた。御者が御者台に上がっているところを見ると、出発の準備は完了しているようだ。

「おはようございます」

「やあ、おはよう。諸君」

俺達4人は教授達に挨拶した。教授が明るい声で、挨拶を返してくれた。機嫌が良さそうだ。

「おはよう」

教授の隣にいたマーガレットとマリアも挨拶を返してくれた。

「荷物は、荷台に載せてくれ、エドワードくんの注文通りに、馬を4頭、用意したよ。こちらは使用人のジョージとリンダ、夫婦だよ。私達の面倒を見てくれることになってる。あと、御者はルーサーだ。後で紹介するよ」

教授が使用人を紹介してくれた。

俺達は馬車に荷物を積込んで馬に乗った。エドワードとユーリが先導、俺とギルバートが馬車の後に付くことになった。

教授達が馬車に乗り込むと俺達は出発した。

昼食の休憩を取ってから、1時間後、30匹の平原狼がマップ画面に現れた。



「前方2時の方向に平原狼が30匹、距離は200m、こっちに向かっている」

俺はパーティ間通話機能を使って報告した。エドワードが御者に合図して馬車を止めた。

俺とギルバードは馬車の横を通ってエドワードに近づいた

「馬から下りて、馬を馬車に繋ごう」

エドワードの命令で俺達は急いで馬車に馬繋いだ。

教授とマリアが馬車から降りてきた。

「どうしたの？」

マリアがエドワードに聞いた。

「2時の方向に平原狼が30匹、こちらに向かっています」

「距離、150m」

俺は叫んで弓を準備し、狼の方向に向けて弓を構えた。

「あら、本当に平原狼だわ。こっちに向かっているわね。でも、良く分かったね」

「魔弾銃の試し撃ちに丁度良いね。手伝わせてくれ」

教授が言うのと魔弾銃を取り出して構えた。

「そうね、それじゃ、私の手伝うわ」

マリアは杖を取り出して構えた。

80mぐらいに近づいた時、俺は戦闘の平原狼に矢を放った。そして、次々に矢を放っていった。50mぐらいに近づいた時、すでに10匹の狼を仕留めた。

「リオンくん。少しは残してくれたまえ、試し撃ちができない」

教授が文句を言った。

「10匹ぐらいは残りますから大丈夫ですよ。30mぐらいになったら撃ってください。有効距離は魔弾と同じです」

俺は矢を撃ち続けながら教授に答えた。

残り、10匹になった時、俺は「黒桜」と弓を交換して馬の前に移動した。平原狼は30mぐらいまで近づいた。エドワードとギルバートが矢を撃ち始めユーリとマリアが魔弾を撃った。そして、教

授も魔弾銃を撃ち始めた。

結局、馬車に近づけさせずに全ての平原狼を倒してしまった。教授は2匹の平原狼を仕留めて、満足したらしく嬉しそうな顔をした。俺は弓と「黒桜」を交換して馬に乗った。そして、エドワードの号令で、馬車は出発した。

空が夕焼けで染まった頃、俺達は街道を逸れて馬車を止めた。そして、全員で野営の準備を始めた。

教授が用意したテントはマジックアイテムで簡単に組み立てることが出来た。左右に寝泊りするためのテント、中央が煮炊きと食事をするためのテントの3つのテントで構成されており、左右の寝泊りするためのテントは3畳ぐらいの個室が10個と奥にトイレに風呂があった。右を男性用で左が女性用として使用することにした。そして、教授が魔法の防衛バリアを張った。

夕食を食べ終えてお茶を飲んでいるとマリアが近づいて来た。

「平原狼を倒したときリオンくんは刀を使ってたでしょう。ちょっと見せて貰っても良いかしら？」

俺は「黒桜」を出して、鞘ごとマリアに渡した。受け取ったマリアは、一瞬、驚いた顔をしたが、すぐに普通の顔に戻り「黒桜」を抜いた。教授も含めて皆がマリアに注目した。

「リオンの剣って、それなの、初めて見たわ」

ユーリが呆れた顔で言った。

「腰のロングソードは、飾りだったのか？」

ギルバートが聞いた。

「変った武器だな、そんな武器は初めてみたよ、マリアさん。知ってるんですか？」

エドワードがマリアに聞いた。

「ええ、これは、刀と呼ばれる剣よ。切れ味に特化した剣、武器の中では、一番、切れ味がある最強の武器よ」

マリアは言うとう刀を鞘に戻して返してくれた。

「素材はアルモスね。特別な力はないけど、その分、切れ味が強化されてる。達人の剣士にとっては最高の武器だわ。私ではとても使えそうも無いわ」

マリアが言った。

「マリアさんがそこまで言うとは、……」

エドワードが感嘆した顔で言った。

「最強の武器か。凄えな。俺にも持たせろよ」

ギルバートが言ってきたので俺はギルバードに「黒桜」を差し出した。ギルバードは「黒桜」を受け取ろうとして悲鳴を上げた。

「なんだよ。めっちゃくちゃ、重てえ」

「無理しないで、諦めた方が良いわ、軽量の魔法が掛かってるけど、それでも、150kg以上は確実にあるわね。180kgぐらいかしら」

ギルバードは、両手で掴んで、「うりゃ！」と叫んで持ち上げた。そして、すぐに、俺に戻した。

「あかん。持ち上げるだけで限界だ」

ギルバートが言った。

「180kgか。それで、リオンは普段は身につけていないのか」  
エドワードが言った。

「なんで？」

ユーリがエドワードに聞いた。

「180kgもあったら3人分の重さぞ。馬がつぶれる」

「そうか、そうだね」

ユーリが納得した顔で頷いた。

「俺のお気に入り刀だよ。銘柄は「黒桜」。これで竜殺しを倒した」

「そう言えば、竜殺しを一撃で2つにしてたな」

ギルバートも納得した顔で頷いた。

「その刀も、師匠の形見なの？」

マリアに聞かれた。

「うん。そうだよ」

「変なことを聞くけど、リオンの師匠は本当に死んだの？」

「ちゃんと確認して死体を火葬にした。だけど、師匠が生きてると言われたら、信じるかもしれない。師匠ならなんでもありだ。でも、そんなことまでして俺を騙す理由が分からないな」

「なるほど。生きている可能性はゼロでは無いと言うことね」

「リオンくんは、不思議な少年だね」

と教授が呟いた。

魔獣の襲撃が1日に1回か2回ぐらいあったが、予定通り4泊5日でモントールに着いた。

モントールはベンガル王国で3番目に大きな大都市だ。地球で言えば地中海のような地形をしたベルガス海に接している大きな港を持っており、海上交易で栄えた交易都市だと言える。勿論、陸上交易も盛んだ。

俺達は教授に指示された宿屋に馬車を乗り入れた。日本なら1泊数十万ぐらいの超高級ホテルに相当する高級宿屋だった。宿屋の庭に馬車を止め、宿の人間に馬を預けて宿に入った。

ペントハウスのような部屋に教授が入り、俺とエドワード、ギルバードの3人、マリア、マーガレット、ユーリの3人が同じ部屋。部屋と言っても5LDKぐらいの部屋だ。

格式の高い宿屋だそうで、成金の商人では幾ら金を積んでも教授が入った部屋には泊まれないそうだ。

ユーリに「教授って、何者？」と聞いたら、ユーリの隣にいたマーガレットが「エルフ族の第三王子よ」と教えてくれた、俺は呆気に取られてマーガレットを見つめてしまった。

「やだあ、リオンくんったら、そんなに見つめられたら、おねえさん、こまっちゃう」

と言われてしまった。

教授の部屋で豪華な夕食を食べた。教授が上座で教授から向かって右側にエドワード、ギルバート、俺の3人、左側に、マリア、マーガレット、ユーリの順に座った。給仕が全員に食後のワインを注いだ。

「さて、諸君。これからの予定を簡単に説明するから、傾聴して頂きたい」

教授が話し出した。テーブルに座った全員が教授に注目した。

「マーガレットくん。明日の朝に、宿屋の者に手配して、食料品を仕入れてくれ。遺跡を監視している騎士団に対する命令書を貰う必要があるので、私とマリアで伯爵の所に挨拶に行ってくる。調査期間中の食料の補給もあるので、支援して貰うつもりだ。エドワードくん達は、街の見学でもして、のんびりしてくれ。本当は3日ぐらいのんびりしたい所だが、明後日の朝に出発する予定だ。何か質問はあるかね」

教授は暫く質問を待ったが、誰も発言しなかった。

「では、調査の成功を祈って、乾杯しよう。プレミアワインと比べようがないが、これは、これなりに良いワインと宿屋の主人が言っていた」

教授はワインを持ち上げて匂いを確かめた。

「うむ。少なくとも悪くは無さそうだ、では、諸君、ワインを持ちたまえ」

みんな、ワインを持ち上げた。

「調査の成功を祈って、そして、世紀の大発見があらんことを祈って、乾杯！」

教授の掛け声で、一斉に、ワインを飲んだ。

「ところでよ。これから行く遺跡ってなんと言う遺跡なんだ？」

ワインを半分ぐらい一気に飲んだギルバートが聞いた。

「知らないのか？」「スターレン溪谷の遺跡」、別名を「暗黒騎士の棺」と呼ばれてる遺跡だよ」

「へえ、リオン、よく知ってたな」

「依頼に対する事前調査が足りないよ。ギルって、今までに、依頼の内容とか調べたことがないんじゃないの？」

「まあな、難しいことは、エドワードとユーリに任せてある」

ギルバートは胸を張って言った。

「自分で情報を確認することは重要だよ。何でも人任せじゃ、その内、痛い目に会うよ」

「さっき、教授が言ってたけど、騎士団が常駐している遺跡よ。前文明の軍事施設だったそうよ。1000年前の大戦争の時から、王国が管理している重要な遺跡で、前文明の武器が見つかったそうだけ、でも、大昔に発掘尽くされているから、新しい発見は期待できないと思うわ。だけど、別名「暗黒騎士の棺」と言うのは、知らなかったわ」

対面に座っていたユーリがギルバートに説明した。

「暗黒騎士って、ソウルナイトのことか？」

ギルバートが聞いた。

「そうだと思うけど、リオン、教えてよ」

ユーリが俺に聞いた。

「学院の調査報告書に書かれてたよ。知ってると思うけど、大戦争の直後、ベルガン王国の4人のソウルナイトが密かに封印されたことになってるけど、スターレン溪谷の遺跡には開かずの間があって、その扉に暗黒騎士を現すルーン文字が描かれているらしい。扉を封印している魔法は今失われてしまった古代の魔法術式が使われるそうだよ。」

調査報告書の作者はそのルーン文字が扉を開く鍵だと考えたようだよ。そして、扉の先にソウルナイト「暗黒騎士」が眠っているに違いないと推測した。それで、「暗黒騎士の棺」と呼ぶと書いてあった。多分、「暗黒騎士の棺」と呼んでるのは、報告書の作者だけだと思うけどね」

「いつの間にそんな報告書を見つけたのよ」

「ほら、図書館に案内してくれたじゃない。あの時だよ。一応、助

手の資格があるから職員専用の書庫を覗いたんだ」

「えー。だって、図書館に居たのは1時間ぐらいでしょう。信じられない」

「偶然だよ。何気なく引っ張りだした報告書をさらっと読んだら、今回の行き先の遺跡かなあと思って、読み直した。多分、今回の調査目的はその扉じゃないの？」

「驚いた。よく分かったわね。その通りよ」

マリアが声を上げた。

「あら、そうだったんですか、私も知りませんでした」

マーガレットが言った。

「教授に聞いたら、「着いてからのお楽しみだよ」と言って、教えてくださいませんでした。ねえ、教授！」

マーガレットが教授に言った。

「いやあ、参ったね。ほら、男のロマンだよ。ソウルナイトを見つけられるかもしれないとなったら、誰だってウキウキするだろう。それにリオンくんのように調べれば、分かることじゃないか。実際、リオンくんは見当をつけてた訳だし、それにリオンくんが言うように、何事もちゃんと自分で確かめないとだめだよ」

教授が誤魔化した。かなり無理がある論法じゃないかと思った。少なくとも、マーガレットは納得した顔をしていない。

「リオン。その報告書の題名と作者は誰なの？」

マリアが聞いた。

「えっと、「サーモスト遺跡の調査結果」で新王国暦107年2月作成、報告者はドーントス導師」

俺はアリスの検索画面を見ながら読み上げた。

「ドーントス導師。王国ソウルナイト調査団の初期メンバー賢者ムラサメ・モリスンの奥さんの旧姓だわ。そんな報告書が学院に埋もれてたなんて、知らなかったわ」

マリアが教授を見て言った。

「題名も、「サーモスト遺跡の調査結果」では、見落としていたの

は、しょうがないだろう」

教授も真面目な顔でマリアに答えた。

「その封印の扉は教授に任せて、俺達は遺跡の魔獣を倒すのが仕事だ」

エドワードが言った。

「まあ、そう言うことだな」

ギルバートが同意した。

「あら、封印の扉に興味はないの？」

ユーリが聞くと。

「無いよ」

ギルバートが素っ気無く答えた。

「渓谷の遺跡だから水属性の魔獣が出そうだね。物理攻撃無効の魔獣がいるかも」

俺は警告した。

「ユーリが居るし、リオンも居るから問題ない」

再びギルバートが答えた。

その後、俺達は遺跡の魔獣対策について話し合ってから自分の部屋に引き上げた。



## 24話

翌日、「1ヶ月分のお菓子を買わないと」と張り切っているユーリに連れられて、街に繰り出した。午前中で5軒の店をまわって、お菓子を大量に仕入れ、昼食を食べるために、食堂に入った。

「買い忘れの物は無いよね」

満足顔のユーリが俺達に確認した。

「午後はどうする？ 宿に戻るのか？」

ギルバートがエドワードに聞いた。

「折角だから、観光したいなあ」

ユーリが言った。

「それで、何処に行くんだ？」

ギルバートがユーリに聞いた。

俺は以前からこの世界の船がどんな船なのか見たいと思っていた。中世レベルなら、スクーナーかキャラック。あるいは、ガレオン船を生で見れるかもしれない。昔から、帆船に憧れていた。

「港に行つて、船を見ないか？」

俺は提案してみた。

「おっ、いいねえ」

ギルバートが乗ってきた。

「港か。余り治安が良くないぞ」

エドワードが言った。

「あら、折角、リオンが船を見たいと言ってるだもん。行きましようよ。宿に戻っても退屈なだけよ」

ユーリが俺の提案に同意してくれた。

結局、俺達は港に行くことになった。

支払いを済ませ、食堂を出て港に向かって歩いた。潮の匂いで港に近づいていることが分かった。俺は海育ちなので、潮の匂いを嗅ぐと子供の頃を思い出して懐かしい気持ちになる。しかし、臭覚が

敏感になったおかげで潮の匂いが物凄くきついと感じた。

倉庫が立ち並ぶ道を進んでいくと、目の前に港が見えた。沖の方に見渡す限りの範囲に船が停泊している。帆が畳まれてマストしか見えないので、三角帆のスクーナーなのか四角い帆のキャラックなのか判断できない。3本マストのずんぐりした形がキャラックで、スクーナーな形がスクーナーだと思う。

現在の巨大な船を見慣れている所為か意外に船が小さいなあと思った。大きな船でも長さが30mぐらいしかなさそうだ。

俺達は栈橋まで進み、荷揚げをしている様子を眺めた。

20人ぐらいのズボンしか履いていないバンモス族や獣人族が大きな木箱を船から担いで移動して行った。監督人らしき人が時々、鞭で叩いている。

どうやら、奴隷に荷物を下ろさせているように見える。

「なあ、あれって、奴隷か？」

俺はギルバートに聞いた。

「奴隷？」

ギルバートが聞き返したので、俺は奴隷と思ったグループを指差した。

「ああ、船から荷物を運んでる奴らか？ リオンの言う通り、奴隷だな。人足用の奴隷だ」

「奴隷なんて、居たんだ」

「リオンは、奴隷を見たことなかったか？」

「ああ、初めて見た」

「そうか、あれは、荷物を運ばせるための奴隷だ。頭は空っぽだけど、力と体力だけはある」

「奴隷って普通に居るんだ？」

「人足用の奴隷は安いからな、ジャックさんの店にも5人ぐらい居たぞ」

「そうか」

この世界では、奴隷は普通なんだろうか、ギルバートも他の2人

も、奴隷のことを全く気にした様子はない。

「しかし、流石にでっかいな。こんなに近くで見たのは俺も初めてだ」

ギルバートは船の大きさに驚いているようだが、俺は、奴隷の集団を見て、テンションが一気に下がってしまった。

「おじさん。ちょっと聞いても良い？」

奴隷を監視していた30代の船乗りには、ユーリが話しかけた。

「ああ、何だい？」

「この船って、どんな船なの？　すっごく大きいけど、どれぐらい積めるの？」

「こいつは、「メリーアン号」って名前だ。キャラック船だよ。積載量は250tだったかな」

「250t！　凄いわね。どれぐらいなるのか、想像もつかないわ」

「そうか、まあ、普通の2階建ての家ぐらいの量が運べるぜ、小さい倉庫なら1隻分で、一杯になるだろうな」

「へえ、それは凄いわ」

ユーリが素直に感心すると。

「まあな、メリーアン号より大きい船は、めったに無いからな。ここら辺でも、最大級の船だぜ」

満更でもない様子で船乗りが答えた。

「良く分かったわ。ありがとう。おじさん」

ユーリは礼を言って、俺達の所に戻ってきた。

「そろそろ、戻るか？」

エドワードが言うと、「そうだな」と3人は頷いた。俺達は、宿屋に引き返すことにした。

倉庫が立ち並ぶ通りを歩いていると。

「キャー！」

女性の悲鳴が聞こえた。そして、女性の謝る声と複数の男性が怒鳴る声が聞こえた。先頭を歩いていたエドワードが立ち止まり、声

のした方の様子を伺った。6人ぐらいの船乗り風の男達がいるのが見えた。そして、男達の隙間から女性が居るのが見えた。

なんか嫌な予感がする。物凄くありきたりな展開になりそうだ。エドワードとギルワードの2人は、顔を見合わせると、男達の方へ走り出した。そして、ユーリも2人の後を追って走った。

「どうしてくれんだよ。ねえちゃんよ」、「そうだ。俺達に付き合え」、「すみません」、「ごめんなさい」と、男の声と女性の声が聞こえた。

俺も諦めて男達の方へ歩いて向かった。

走って行くほどの気力が湧かない。エドワード達なら任せておけば問題ないだろう。男達は簡単に追い払われてしまいうに違いないのだ。

「おい、それぐらいで止めておけ」

「謝っているんだから、良いだろう。許してやれよ」

「あんた達みたいの下種に、付き合えるはずがないじゃない」

3人の声が聞こえた。ユーリは喧嘩を売っているとしたか思えない台詞だ。相手の人数を数えたら7人だった。

殴りあいが始まったと思ったら、エドワードとギルバートは其々2、3人の男に抑えられてしまった。俺は慌てて駆け寄り片っ端から、男を掴んで後ろに放り投げて、エドワードとギルバートを解放した。見知らぬ女性が物凄く驚いた顔で俺の後ろを見ているので、俺も後ろを振り返ると、放り投げた男達が10mぐらい先に散らばって倒れて呻いていた。

暫く様子を見ると、男達は何とか立ち上がり、仲間を助け合いながら逃げて行った。1人も見捨てなかったところを見ると仲間の結束は固いのだろう。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

ユーリの声が聞こえたので、俺は再び振り返って見知らぬ女性みた。

「ひい！」

俺を見た女性が悲鳴を上げた。まるで、化け物を見るような顔だ。俺は少なからずショックを受けた。

女性は18か19歳ぐらいで、普通の容姿だ。美人と言うほどでもない。エドワードとギルバートは痛そうに顎や腹など体を擦っていた。

「大丈夫、彼は私達の仲間よ。あなたを襲ったりしないわ」

ユーリが女性を慰めていたので、俺は2人の陰になるように移動して、様子を見ることにした。ありきたりだが、空になったかごとかごに入っていたらしい荷物があたりに散らばっていた。

荷物に気付いたエドワードが、かごを拾って荷物を拾い集め、ギルバートもすぐに手伝った。俺は女性を刺激しないために、女性を見ないようにして立っていた。

やがて、ユーリとエドワードの遣り取りの後、女性が「ありがとうございます」と言って去って行った。

俺達は何事もなかったかのように、宿屋に向かって歩き出した。

エドワードとギルバートの顔は明らかに殴られた痕が見える。

「応援に駆けつけるのが遅れて、申し訳ない。まさか、あいつ等にやられるとは思ってなかった」

俺は2人に謝った。

「ああ、気にするな、ちょっと人数が多かったただけだ」

ギルバートが負け惜しみを言った。

「だけど、凄かったわね。軽く10mは飛んでたわ。昔、マリアさんが同じ様に投げ飛ばしたのを思い出したわ」

「マリアさんは、あれよりも手加減してたな。7、8mぐらいだった」

エドワードが冷静に反論した。

「そうだったかなあ、でも、結果は同じじゃない。8mも10mもあんまり変らないわ。きつと、半数以上は骨を折ってるわよ。……そうだ、さっきの子がリオンにごめんなさいって、それから、たすけてくれてありがとうと伝えてくれと言ってたわ」

ユーリが言った。

「いやあ、俺も、あんなに飛んでるとは思わなかったよ。ちよつと、力加減を間違えた。それより、殴られた痕が赤いぞ。魔法薬を飲むか？」

俺は2人に聞いた。

「魔法薬が勿体無いからいいよ」

エドワードが答えた。

「マリアさんにばれるぞ」

俺が聞くと。

「大丈夫、喧嘩したぐらいじゃ、マリアさんは何も言わないわよ」  
ユーリが答えた。

夕食時、教授の部屋に集まり、テーブルに着いた。

「おや、エドワードくとギルバートくんは、喧嘩でもしたのかね？」

教授が聞いた。

「船を見た歸りに、船乗りに絡まれてた女性を助けたのよ。でも、怪我はしてないから、大丈夫です」

2人に代わって、ユーリが説明した。

「成程、女性を助けるためなら仕方がないね。相手は方はどうなったのかね？」

「多分、半数は骨折したかな。昔のマリアさんのように、リオンが10mぐらい投げ飛ばしちゃったから、でも、自分達で立ち上がって逃げて行ったから、死んではないと思います」

「あら、そんなことをしたかしら、覚えてないわ」

マリアが首を傾げながら答えた。

「まあ、それは、いいでしょう。さて、明日の予定を説明するよ。伯爵と話したら、丁度、騎士団の交代要員が遺跡に行くそうなので、一緒に行くことになったよ。騎士団への命令書も貰ったし、食料の

補給も了承して貰えた。ところで、マーガレットくん。食料に仕入れは終わったかね？」

教授がマーガレットに聞いた。

「はい。馬車の積み込みも終わってます」

マーガレットが答えた。

「ありがとう。マーガレットくん。それじゃ、明日の朝は、7時半頃に出発するよ。騎士団のところに8時に行く予定になってるのでね。今日は、早めに寝るようにしてくれたまえ」

教授が命令した。

翌日の朝、俺達は騎士団に護衛されながら出発した。遺跡まで1泊2日の予定だ。俺達の馬車は騎士団の補給物資を積んだ荷馬車の後から付いて行った。

騎士団に守られた俺達は順調に旅程を消化して行った。そして、騎士団の隣で野営して、翌日に渓谷の中へ、奥深くへと進んで行った。

午後3時ぐらいに、騎士団が常駐している砦が見えてきたが、遺跡らしき物は何処にも見当たらなかった。

騎士団の砦は山の絶壁の下に、まるで壁に張り付いているかのよう建てられていた。

俺達は騎士団の後ろから丸太を組んで作られた堀の中に入った。

そして、砦の中に壁の一部が巨大な口を開けていた。

どうやら、壁に開いた口が遺跡への入口らしい。

砦の中には、3階建ての建物が3棟、左右に2階建ての建物が2棟ずつもあり、随分と広い。そして、広場で50人ぐらいの騎士達が、戦闘訓練をしていた。

馬車から教授達が降りたので、俺達も馬から降りて、馬を馬車に繋いで、教授の所に集まった。砦の本部らしき中央の建物から、2

人の騎士が出てきて、俺達の所へ近づいて来た。

「貴方が、アーネスト導師ですか？」

先頭を歩いていた20代後半の女性の騎士が教授に聞いた。

「そうです。私がアーサー・トワイライトです。教授と呼んでください」

教授が挨拶した。

「私が砦の司令のルイス・アーネストです」

挨拶すると右手を差し出して、教授と握手した。

「こちらは副長のジム・マッケイドです」

隣に立っていた騎士を紹介した。

「伯爵の命令書です」

教授は、命令書を司令に差し出した。

「中身を確認しますので、少々お待ちください」

司令は断ると、命令書を開いて読んだ。

「確かに、命令を受領しました。あちらの建物が研究員用の宿泊施設になります。一応、掃除させましたので、すぐにでも利用できるかと思えますので、自由に使ってください。厩もあります。馬車は入口の横にでも置いてください。副官のマッケイドに案内させます。それと、お手伝いできることがありましたら、何でも、申し出てください。出来る限りご協力させていただきます」

「ありがとうございます。よろしく願います」

教授がお辞儀をした。

「親交を深めるために、今晚の食事をご一緒にしませんか？」

「ありがとうございます。伺います」

「夕食をご一緒する方の人数を教えてください」

「そうですね。それでは、私と助手の2人、いや、助手が3人です  
ので、全部で4人になります」

教授はちらりと俺を見て答えた。3人の助手と言うことは俺も含まれているらしい。何故、俺が含まれているのか、非常に疑問に思  
うのだが、しかし、抗議する訳にはいかない。



この世界の常識に疎い俺でも、断ったら、礼儀に反することぐらい分かる。

「了解しました。では、時間になりましたら、部下呼びに行かせましょう。ここでは、夕食は7時に取る事になっています」

「分かりました。ありがとうございます」

「それでは、これで、失礼します」

と司令はお辞儀をすると、戻って行った。

俺達は副官のマッケイドに案内されて、研究員用の宿泊施設の中に入った。

研究員用の宿泊施設は3階建ての建物で研究所長用と思われる部屋、上級研究員用と思われる大きめな個室が4部屋、2人部屋が8部屋、大食堂と厨房、大会議室、応接室、男女用の風呂、各階にトイレが完備されていた。

俺は2人部屋の1つを確保した。エドワード、ギルバート、ユーリも2人部屋を貰った。マリアとマーガレットは個室で、教授は当然ながら所長用と思われる部屋に入った。

7時になると、騎士が呼びに来たので、俺達4人は騎士の案内で本部の建物の食堂に入った。

食堂には、司令達5名が座って待っていた。

俺達は教授、マリア、マーガレット、そして、俺の順で座席に座った。俺は助手として参加するので、助手用の制服、つまり、魔術師のロープを着て参加した。

教授と司令が社交礼儀を交わして、司令側から、順に紹介があった。対面には、司令、副長、そして、小隊長の3人。小隊長の2人は、ヴァンモス族、ウォルフ族だ。

マリアとマーガレットは、夏用で、女性用のロープ。つまり、肩を出したドレスのようなデザインのためか、騎士団側の男性の注目

を浴びていた。

教授が俺達の紹介を終えると給仕がワインを配った。

司令は、ワイングラスを持ち上げて掲げると。

「では、今回の調査が成功することを祈って、乾杯しましょう、…  
乾杯！」

と言って乾杯した。

「今回、お世話になるお礼と、皆様のご武運を祈って、乾杯します、  
…乾杯！」

教授がお返しの乾杯をして食事が始まった。

俺の正面、つまり、末席にあたる2人の亜人はグイッとワインを  
飲み干した。

「失礼な質問でしたら、許して頂きたいのですが、御3方は、ひよ  
っとして、ハイエルフの方ですか？」

前菜を食べ終えた時に、司令が教授に聞いた。

「司令は、お目が高いですね。その通りですよ」

教授が愛想良く答えた。

「やはりそうでしたか、なんとなく、エルフの方とは違うような気  
がして、気になっていました。申し訳ありません」

「いえいえ、謝る必要はありませんよ。ハイエルフは滅多に森を出  
ませんからねえ、珍しいのは当たり前ですよ」

「魔術師学院の学院長はハイエルフの方だとお聞きしていましたが、  
教授は学院長のご親戚ですか？」

「ええ、その通りです。学院長は私の叔父に当たりますね」

「そうでしたか」

「司令は伯爵の孫娘だと、伯爵から聞きましたよ。お転婆で困ると  
こぼしていましたが。実際にお会いしたら、こんなに美しいとは思  
いもしませんでしたよ」

教授がお世辞を返した。

次の料理が運ばれてきたので、皆、黙って食事を続けた。司令は  
何とか会話を盛り上げようとしているようだが、殆ど成功していな

い。副長が司令のフォローをすべきだよなと思った。

メインの魚料理を食べ終わると、再び、司令が話しかけてきた。

「教授の専攻は、やはり、前文明の遺跡関係ですか？」

「ええ、その通りです。考古学ですよ。ご存知の通り、魔術師学院は、昔の魔法を復元するための研究を行なっています。こういった遺跡から、手がかりを得て、研究するんですよ。なかなか成果が上がりませんがね」

「遺跡の監視をされていて、お恥ずかしいのですが、実は、この遺跡が何か、良く知らないのです。出来れば、ご教授して頂けませんでしょうか？」

「それでは、簡単に説明します。この遺跡は、ご存知の通り、「スターレン溪谷の遺跡」と呼ばれています。前文明の遺跡と言われていますが、採掘され尽くされていますので、前文明の遺品は、残っていないでしょう。」

元々、軍事施設だったと言われていますが、遺品が残っていないので、分かりません。しかし、大戦争前も、ここは、軍事研究所として使われていました。前文明の遺品を研究していたのだろうと言われていますが、大戦争前の武器などが、多く残っていたようですね。それで、大戦争後は、王国の管理下で、調査が行なわれた。

そのため、現在でも、何も残っていないと言われています。ただし、それでも最深層のフロアには、前文明の遺品が残っている可能性がありますと思われると思います。そのため、今でも、厳重な管理下に置かれている訳です。

今回の我々の調査は、この最深層部を再調査になりますね。もう、100年近くも、閉ざされていきましたので、念のために、最深層フロアを確認するということです」

「なるほど、良く分かりました。しかし、最深層フロアは、危険じゃないですか？ 一応、入口の所は魔獣の掃除をして置きましたが、我々は遺跡の中に入ることを禁止されています。魔獣の討伐を手伝う訳には行かないのですが大丈夫ですか？」

「我々は、魔法を得意としていますから大丈夫ですよ。危なければ引き返します」

「そうですか、分かりました」

司令は答えると口をつぐんだ。

食後のデザートが配られ、最後に食後のお茶が配られた。教授が司令にお礼の言葉を述べて、俺達は研究員用施設に引き上げた。

ちなみに、俺の対面に座っていた3人の小隊長は、完全に酔っ払って、いびきをかいていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4221t/>

---

騎士王物語

2011年7月20日00時41分発行